宇都宮の史跡

宇都宮市教育委員会

表　紙

『宇陽略記』より

宇都宮市大通り5－2－10
高橋節子氏所蔵

文化財シリーズ第10号

宇都宮の旧跡

平成元年

宇都宮市教育委員会

宇都宮の旧跡正誤表

頁	行	誤	正
2	5	土地には	土地は
3	24	時間的や外の	時間をはじめ
4	26	功防戦	攻防戦
6	3	（１３３３年～）	（１３３４年～）
11	12	(ルビ)かんえい	(ルビ)かんえん
12	5	寺であったもと	寺であったとも
14	10	(ルビ)たした	(ルビ)たげ
16	9	享禄２年（１５９２）	享禄２年（１５２９）
16	36	しかし	〔削除〕
17	23	おしどりの	おしどりに
18	1	(ルビ)まがぶつ	(ルビ)まがいぶつ
20	17	寛永18年（１８４１）	寛永18年（１６４１）
20	21	（～１８１７）	（～１８１５）
27	19	船は	船に
29	6	センドウヤ	センドウヤ
30	5	嘉永５年（１８５１）	嘉永５年（１８５２）
30	19	これが	〔削除〕
31	1	安政２年	安政３年
31	18	宇都宮まで	宇都宮で
31	31	天平13年（７９６）	天平13年（７４１）
33	7	用いされます	用いられます
35	2	文化５年	文政５年
36	11	十二代	十三代
38	4	元治元年（１８６３）	元治元年（１８６４）
39	21	元和８年	寛文８年
39	26	寛文８年（１６０８）	寛文８年（１６６８）
39	26	二十七日忌	二七日忌
39	29	自刀	自刃

頁	行	誤	正
40	5	寛永８年	寛文８年
40	7	二十七日忌	二七日忌
41	2	間垣	曲垣
41	23	興平	奥平
41	24	(ルビ)まさあき	(ルビ)まさあきら
41	28	興平	奥平
42	17	藩主	藩士
44	13	文明２年（１４８７）	文明２年（１４７０）
46	14	（考古）	（孝古）
47	8	考兵衛	孝兵衛
47	9	考兵衛	孝兵衛
47	33	正元元年（１２５６）	正元元年（１２５９）
49	11	元禄12年（１６４９）	元禄12年（１６９９）
49	14	宝永元年	宝永７年
50	15	泰堂	素堂
50	18	文久４年（１８６１）	文久４年（１８６４）
50	25	明治39年（１９０５）	明治39年（１９０６）
51	23	(ルビ)はくろう	(ルビ)ばくろう
53	16	保延３年	保延元年
53	26	安永３年〔１７７５〕	安永３年〔１７７４〕
55	22	文化10年（１８７２）	文化10年（１８１３）
60	32	(ルビ)いせんすうもん	(ルビ)いせんすいもん
73	9	(ルビ)ころへい	(ルビ)こうへい
73	9	康平６年（１０６２）	康平６年（１０６３）
80	8	世界大戦	世界大戦後
80	16	大正元年	大正14年
88	21	熱木町	贄木町
91	9	国恩寺（大明神）	〔（大明神）を削除〕

序　　文

毎年、号を重ねてまいりました「宇都宮市の文化財シリーズ」も、本号をもちまして第10号となりました。本号は、私たちの身近な地域の歴史をとりあげた「宇都宮の旧跡」です。

「宇都宮の民俗」から始まったこのシリーズは、民家・芸能・祭り・石碑・名木・民話・古道・絵馬と続いてまいりましたが、ここでもう一度、自分たちが住んでいる土地にまつわる歴史や伝承を取り上げて、その地域に住む私たちがその土地に愛着を感じ、誇りをもてるように、という願いをこめて「旧跡」という本にまとめあげました。

私たちが何気なく生活している土地には、例外なく長い長い歴史が刻まれており、その歴史の上に現在の生活が築かれています。『温故知新』という言葉がありますが、古い歴史を知ってこそ、より良い歴史を築きあげ、幸せな生活を営むことができるというものです。

社会生活の向上や自由時間の増大などによって、市民の皆さんの知的活動や芸術・文化活動への要求は高まり、また、地域では祭りをはじめとする伝統芸能が再認識され、その歴史や風土に根ざした文化を見直す気運が高まりつつある今日ではありますが、一方では急激な都市化の進展や社会情勢の変化により、自分たちの住む土地にまつわる旧跡などが忘れ去られ、貴重な文化財が失われつつあるのも事実です。

このような中での本シリーズの発刊ですので、多くの方々のお目にとまり、地域の歴史の見直しにつながれば幸いに存じます。ひいては宇都宮市全体に対する愛着を寄せていただくよう心より願う次第です。

最後になりましたが、今回の調査及び本冊子の刊行にあたり、調査等に御協力いただきました宇都宮市文化財調査員の方々、また調査の際に御協力くださいました多くの方々に、心から感謝の意を表します。

平成元年３月

宇都宮市教育委員会

教育長　藤　田　昌　平

目　　次

序　　文
まえがき …… 1
Ⅰ　『宇都宮の旧跡』の調査について …… 2
Ⅱ　宇都宮の旧跡 …… 4
1　古戦場をたずねて …… 4
2　政治に関する旧跡 …… 8
3　寺院の跡をたずねて（廃寺） …… 9
4　塚（土を盛り上げて） …… 13
5　磨崖仏をたずねて …… 18
6　宇都宮藩の藩校「修道館」 …… 20
7　寺子屋や塾の跡 …… 21
8　街道に残る一里塚 …… 23
9　大名の宿、本陣・脇本陣をたずねて …… 25
10　河川交通の荷上げ場、河岸 …… 27
11　用水路や用水堰 …… 29
12　刀を作った鍛冶場の跡 …… 31
13　鉱山の跡と石を使った建物 …… 31
14　明治の工場の跡地 …… 34
15　先人の墓所をたずねて …… 35
16　さまざまな碑 …… 55
17　庭園の跡 …… 59
18　名木・名水 …… 60
19　城の跡 …… 64
20　その他の旧跡 …… 75
Ⅲ　参考資料 …… 84
1　宇都宮の旧跡地図 …… 84
2　書籍にある宇都宮の旧跡 …… 87
Ⅳ　索　　引 …… 103
あとがき …… 106

ま え が き

本冊子は、昭和60年に宇都宮市教育委員会が、市文化財保護審議委員会の答申を受け、市文化財調査員活動の一環として実施した「旧跡調査（課題別文化財一斉調査）」の結果をもとにまとめたものです。

同調査は、市内全域を対象として実施され、全部で64件の報告がありました。本冊子は、これに事務局（市教育委員会社会教育課）の職員が調査したものも加えて掲載いたしました。

調査員によって報告された旧跡や、事務局で調査した旧跡につきましては、巻末に市内の所在地図と共に一覧表にして掲示してありますので御参考になれば幸いです。

なお、この「旧跡調査」は以下の組織で調査をしましたが、現地調査において多くの方々の御協力を仰ぎました。

●宇都宮市文化財保護審議委員会委員

雨宮義人（委員長）　岩崎良能（副委員長）　阿久津　浩（委　員）S63.9退任
大金宣亮（委　員）　戸田博亘（委　員）○冨　祐次（委　員）
橋本澄朗（委　員）　塙　静夫（委　員）　森谷　憲（委　員）
渡辺安友（委　員）　小林幹夫（委　員）S63.10新任

●宇都宮市文化財調査員

黒川孝三（一　条）S63.9退任　塚田宗雄（陽　北）　酒井光一（　旭　）
内藤二郎（陽　南）　石川秀男（陽　西）　高藤常松（星が丘）
松本文一郎（陽　東）　平塚良雄（豊　郷）　粂川弘明（宮の原）
菊池正仁（平　石）　直井　学（清　原）　増渕藤四郎（横　川）
板寄悦男（瑞穂野）　小林哲夫（泉が丘）　小塚　博（国　本）
高山伝治（城　山）　福田　操（富　屋）　阿久津義正（篠　井）
松本笑悦（姿　川）　小島豪市郎（雀　宮）　河合芳幸（一　条）S63.10新任

（　）内は調査員の担当地区

●宇都宮市教育委員会社会教育課職員

塚田隆一（社会教育課長）　河越昌司（社会教育課長補佐）○小林鉚一（文化振興係長）
○定岡明義（文化振興係）○手塚英男（文化振興係）○粂木　誠（文化振興係）
◎小松俊雄（文化振興係）○赤石澤　亮（文化振興係）○大塚雅之（文化振興係）
○神野安伸（文化振興係）○今平利幸（文化振興係）○森本久夫（文化振興係嘱託）
小林祐子（文化振興係嘱託）　間彦克子（文化振興係嘱託）　○印＝企画編集（◎印＝主任）

Ⅰ　『宇都宮の旧跡』の調査について

本冊子は、宇都宮市文化財調査活動の一環として実施した「昭和60年度課題別一斉調査」のテーマ『宇都宮の旧跡』の結果をまとめたものです。

1　目　的

私たちが普段生活している土地には、例外なく長い歴史の上に成立しています。しかし地元の歴史というと、どうしても特定の人物や大きなできごとを考えてしまい、身近な歴史にはなかなか目が向かないのが実情です。

また、近年は社会情勢の急速な変化や、情報量の増大のために、身近な歴史そのものが意識されなくなったり、ひいては忘れ去られようとさえしているのが現状です。

そこで、市内全域にわたって旧跡調査を実施し、身近な歴史に焦点を当ててみました。

2　調査対象

『旧跡』の調査対象は、国の史跡指定基準を参考にして教育委員会事務局で以下の様な項目を設けて調査いたしました。

1　古戦場その他政治に関する旧跡

(1)古戦場　(2)政治関係の旧跡

2　社寺の跡または旧境内、塚、磨崖仏、堂宇

(1)社寺の跡　(2)塚　(3)磨崖仏　(4)堂宇

3　藩校、私塾、文庫その他教育学芸に関する旧跡

(1)藩校　(2)寺子屋　(3)その他

4　産業、交通、土木に関する旧跡

(1)一里塚　(2)並木街道　(3)本陣・脇本陣跡　(4)問屋跡　(5)河岸跡　(6)用水堰　(7)窯跡　(8)鍛冶場跡　(9)鉱山跡　(10)産業関係建物跡

5　墓、石碑関係

(1)墓　(2)石碑　(3)古墳

6　旧宅地、園地、井泉、樹石および特に由緒のある地域

(1)旧宅地　(2)井泉　(3)樹木　(4)その他

7　信仰関係他

8　城跡、屋敷跡

9　その他

3　調査方法

(1)　調査

調査は直接現地に行って聞き取り調査を中心にして行いました。また、写真撮影もできるだけ実施いたしました。

(2) まとめ

「旧跡調査票」に調査結果を記録し、写真を添付しました。

宇都宮の旧跡調査用紙			No.
旧跡名		所在地	
(位置略図)		(解説)	
(写真)			

(3) 調査地区

調査地区は宇都宮市全域で行いましたが、各調査員は原則として、担当地内の調査を行いました。

(4) 調査結果

昭和63年3月までに調査を実施した旧跡の件数は、232件に達しました。そのうち161件を今回の『宇都宮の旧跡』の中に掲載いたしました。

今回の調査は、宇都宮市文化財調査員から報告のあったものを中心として、残りは事務局で行いましたが、事務局は「宇都宮市史　全8巻」、宇都宮市60周年誌」、田代善吉著「宇都宮史」等4冊の記載の中から旧跡に関係するもののリストを作成し、このリストにしたがって補足調査を実施しました。なお、このリストは巻末の参考資料編に載せておきましたので、御参考になれば幸いです。

したがいまして、今回の調査では時間的や外の様々な制約によりこのリスト全部を調査するというわけにはいきませんでした。また、調査物件に関しましても、全てを本報告書の中に書くわけにはいきませんでしたので、御了承いただきたく思います。

一つの旧跡には、年代や内容に関しまして諸説あり、それが問題となっているものもあります。このような場合には原則として「宇都宮市史」の記載を採用させていただきましたので、この点も併せて御了承いただきたく重ねてお願い申し上げます。

(5) 本冊子の見方

本文中にある〔　　〕で囲まれた数字は、巻末資料の宇都宮の旧跡地図の数字と一致します。現在の位置との比較や、旧跡を訪れる場合などに活用してください。ただし、この位置のうちいくつかは、推定の位置や大まかな位置としてとらえてあります。また、広範囲の旧跡の場合には、範囲の中の一点を指して全体を示すこととします。

Ⅱ　宇都宮の旧跡

1　古戦場をたずねて

古戦場とは、昔ここで戦いがあった、またはあったことが伝えられている場所のことをいいます。ここでは戊辰戦争を含む江戸時代以前の古戦場を掲げておきます。

●裳原古戦場

平安時代から戦国時代まで、宇都宮の地を支配していた宇都宮氏の第11代城主である宇都宮基綱が、小山義政と戦って戦死をしたといわれている場所です。時に康暦２（天授６）年（1380）のことでした。

この裳原の古戦場といわれているところは何か所かありますが、そのうちの一つが、現茂原２丁目の国道４号線あたりといわれています。〔１－①〕 現在は車の往来も多く、新幹線の架橋などもあり当時を偲ばせるものは全くありません。

伝 裳原古戦場（現・茂原２丁目付近）

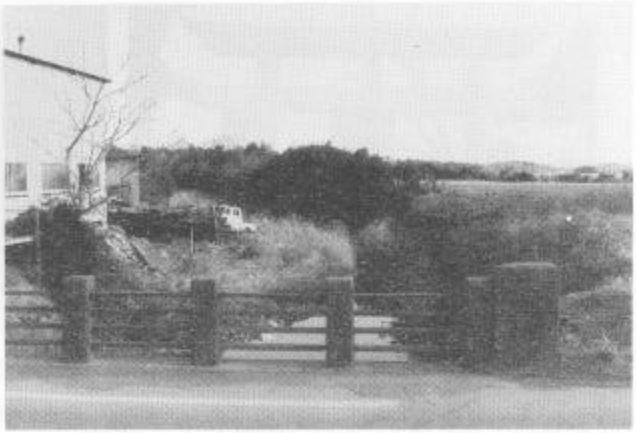
なお、茂原２丁目以外にも、現宇都宮自衛隊宇都宮南駐屯地（現・茂原１丁目）南側のくぼ地だという話や、石橋町の鞘堂付近だという話もあります。石橋町の鞘堂という地名は、裳原の戦いの時に戦死した者たちの刀の鞘を塚にしたところから起ったという話もあります。

●幕田古戦場（戊辰戦争）

江戸幕府が終わりを告げ、明治新政府に変わろうという時、新政府を認めず幕府体制を守ろうとする勢力と、明治新政府の間で武力衝突が起こりました。これが戊辰戦争（戊辰の役）といわれるもので、慶応４年（1868）のことです。この戦いは宇都宮城をめぐる功防戦も行われたので宇都宮の街はほとんど焼けてしまいました。当然市内の数多くの場所で戦いが行われましたが、ここでは幕田の戦いと六道の戦いの２つのみを記載します。

慶応４年４月19日、宇都宮城は幕府方大鳥圭介の前軍としての土方歳三の軍と会津藩士秋月登之助らの軍によって落城してしまいました。このころ宇都宮藩を応援するための因幡（現・鳥取県）、土佐（現・高知県）藩らの新政府軍は、まだ壬生城にとどまっていました。一方壬生城を攻めようとしていた幕府軍は、幕田（現・幕田町）〔１－②〕に陣をはったところから、安塚・幕田付近で戦いが起こりました。４月21日の夜から22日にかけこの雨中の激戦で、死傷者は新政府軍・幕府軍を合わせて100名を越えるものでした。なお、この戦いは新政府軍の優勢のうちに終了し、幕府軍は幕田から西川田方面へ退却しました。

幕府軍戦死者の墓〔１－③〕
（現・幕田町）



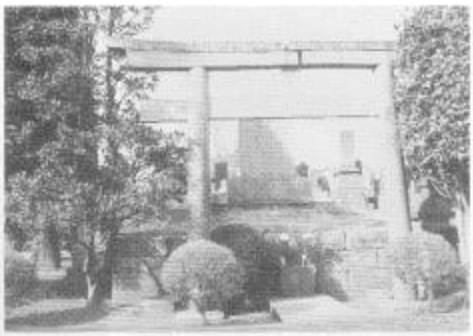
幕府軍が退却した幕田町の集落を望む〔１－④〕
（姿川にかかる栃木街道の大森橋より東方を見る）

●六道（ろくどう）古戦場

落城した宇都宮城を奪いかえすために、新政府は第二・第三救援隊総勢850人程度を派遣しました。新政府軍と幕府軍は鶴田（現・鶴田町）や滝の権現（ごんげん）〔１－⑤〕（現・滝谷町）などで撃ち合いになった後、六道口〔１－⑥〕で大激戦となりました。戦いは４月23日の早朝からはじまり午後３時ごろ幕府軍は新政府軍の攻撃に耐えきれず、宇都宮城を放棄し、二荒山神社から八幡山・徳次郎方面へと退却していきました。この戦いで命を落とした幕府軍の戦死者（会津（あいづ）藩中心）が六道の交差点の角に祀（まつ）られ、近所の方の手できれいに手入れされており、現在でも多くの方がお参りしていくそうです。一方新政府軍として命を落とした人たちは、報恩寺（ほうおんじ）〔１－⑦〕や光琳寺（こうりんじ）〔１－⑧〕などの多くの寺に祀（まつ）られています。

六道にある戊辰戦争戦死者の墓（現・西原１丁目）

報恩寺（現・西原１丁目）官修墓地



光琳寺（現・西原１丁目）官修墓地

（注…官修墓地とは、新政府軍として戦死した者の墓のことをいいます。官修墳墓ともいいます。）

もっと知りたい人のために

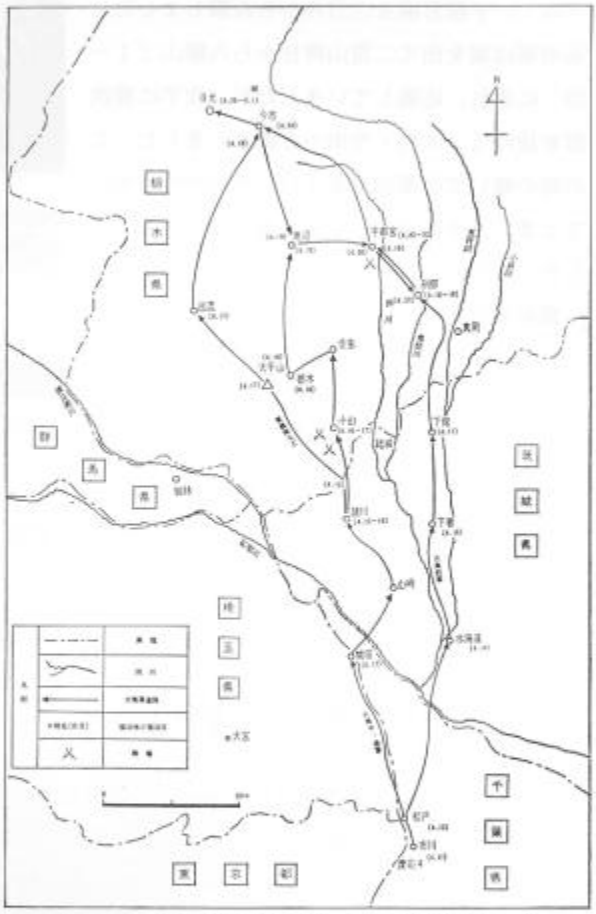
●裳原の戦い

鎌倉時代が終わり、室町時代へと移るころの話です。当時は建武の新政（1333年～）に失敗した後醍醐天皇は1336年に吉野（現・和歌山県）に移りました。一方、京都にいた足利尊氏が朝廷をたてたため、南朝（吉野）と北朝（京都）の天皇が同時にいる世となってしまいました。この争いは全国的に広がりあちらこちらで南朝方と北朝方の二つに分かれて争いが繰り広げられました。当時、宇都宮の第９代城主であった公綱は北朝方について、南朝方の楠木正成らと戦い勇名を全国に轟かせました。しかし、北條氏が滅亡すると公綱は逆に南朝方につき、足利尊氏を破ったりもしていました。公綱の子氏綱は、父が京都で戦っている時わずか13才で城主となり、有力家臣である芳賀禅可清原高名とともに宇都宮の地を取り仕切っていました。氏綱は父と違い、北朝方に味方をしたため、父と子の争いで宇都宮家は分裂状態に陥りました。そのような中で氏綱は上野、越後国の守護職となるほど、着実に関東一円に勢力を広めていきましたが、やはり関東で勢力を伸ばそうとしていた上杉憲顕との戦いに破れるとだんだんと勢力も衰えていき、上杉氏が室町幕府の関東管領として関東を取り仕切るようになりました。

そのような中で小山周辺を支配していた小山氏は、勢力を伸ばそうとするうちに宇都宮氏との争いが起きてきました。康暦２（天授６）年（1380）の５月16日にとうとう宇都宮氏と小山氏の争いが表面化し、裳原の戦いとなってあらわれてしまいました。この戦いで小山方は大円入道親子をはじめ親戚・家臣等200人ばかりが、宇都宮方は氏綱の子である11代城主基綱をはじめ芳賀一族等の家臣80人あまりが戦死するという激しい戦いでした。この戦いをきっかけとして鎌倉公方足利氏満によって、小山氏攻撃（３回にわたる）が行われた小山義政の乱がはじまったのでした。この乱は17年の長期にもわたり、結果として小山氏は滅亡してしまいました。

●戊辰戦争

250年続いた江戸幕府が慶応3年（1867）大政奉還をし、天皇を中心とする社会に変わりました。これをもって682年も続いた武家社会が終わりを告げたのですが、武士の中には新しい政府は認めず、あくまでも戦う決意の者達が多くおりました。これらの者達は慶応4年（1868）4月11日江戸を出て千葉の市川に、大鳥圭介（播磨・現・兵庫県出身・幕府の歩兵奉行）を中心として2000人以上の者が集まりました。幕府軍はその後二手に分かれて北上していきました。一方、宇都宮の地を重要視した新政府軍は、宇都宮へ兵を集めるとともに、大鳥圭介を中心とする幕府軍（右図参照）を迎え撃つために小山へ兵を送りました。小山で幕府軍と新政府軍の戦いとなりましたが、幕府軍の勝利に終わり、宇都宮を目指して進軍してきました。一方、先鋒隊として大鳥と別行動をとっていた土方歳三や秋月登之介らは刑部村（現・西刑部町付近）に泊り、4月19日二手に分かれて宇都宮城を攻めました。城を守っていた宇都宮・烏山ら諸藩もよく戦いましたが、夕方には幕府軍に



幕府軍の進路(「宇都宮市史」第6巻より抜すい)

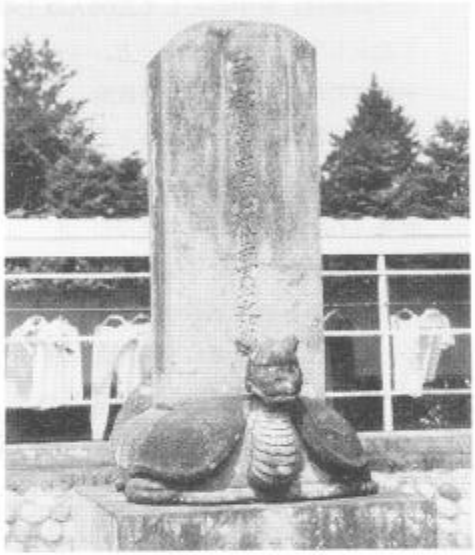
忠恕公の隠れた御穴
（現・新里町）

城を占拠されてしまいました。命からがら逃げ出した城主の忠恕は、農民の姿に身を変えて、鞍掛山中腹の御穴〔1－⑨〕の中で二日間身を隠しており、栃木を通って館林へと落ちのびて行きました。

新政府軍は宇都宮城をとりもどすため、薩摩藩（現・鹿児島県）長州藩（現・山口県）土佐藩（現・高知県）を中心と

して体制を立て直すなど宇都宮城攻撃の準備を進めました。22日は安塚村（現・壬生町）で、壬生城を攻めようとした幕府軍と新政府軍との間で、雨中の激戦となりました。幕府軍の勢力が優っていましたが、薩摩軍の応援などで新政府が盛り返したうちに戦いを終えました。翌23日には新政府軍は宇都宮城総攻撃を仕掛けました。宇都宮藩が先陣となり西川田方面から六道口を攻撃しましたが、幕府軍も必死に応戦し大激戦となりました。その後、大山弥助（巌・後の元帥）らの援軍により新政府軍は、六道口を突破し、宇都宮城を三方向から攻撃しました。幕府軍は城を出て二荒山神社から八幡山〔1－⑩〕に逃れ、応戦していましたが、夜半に徳次郎を抜けて、大沢・今市へと敗走しました。この時の戦いで宇都宮城および二荒山神社は焼けてしまい、市街のほとんども焼失してしまいました。このの23日の戦いの戦死者は、新政府軍・幕府軍合わせて100人を越える悲惨なものでした。

なお、城主忠恕公は無理な行動と戦いのため体調をくずし、4月27日に急に亡くなってしまいました。



戸田忠恕公の墓（英巌寺・現・花房本町）

2　政治に関する旧跡

この項では、政治に関する旧跡のうち、特に江戸時代の高札場について見ていきます。高札とは、室町時代や江戸時代に禁令（やってはいけないこと）や法令（守るべきこと）を人々に知らせるために街頭に立てた看板です。

● 雀宮宿高札場

雀宮宿の高札場は雀宮宿本陣のすぐ北側（日光街道の西側）にあると「日光道中図絵」や「日光道中分間延絵図」などに

慶応4年の高札（上欠町・小川氏蔵）

描かれています。

現在は、雀宮２丁目２番地か３番地あたりのところだと思われます。〔２－①〕 交通量の多い国道４号線沿いに面しており、その痕跡を見つけることはできません。

●宇都宮宿高札場

宇都宮宿の高札場は旧伝馬町にありました。道の北側にあり小伝馬町への入口のところです。

現在は、泉町６番地の大通りに面したあたり〔２－②〕になります。

●中徳次郎宿高札場

中徳次郎町の高札場は、宿の一番北側で道路の西側にありました。現在は国道293号線との交差点付近ではないかと思われます。〔２－③〕

復元高札場（仙台市博物館）

以上、宇都宮市内の主な高札場をあげましたが、それ以外にも台新田（現・台新田町）〔２－④〕、今泉村（現・今泉４丁目？）〔２－⑤〕、竹林村（現・竹林町）〔２－⑥〕、上戸祭村（現・上戸祭町）〔２－⑦〕、野沢村（現・野沢町）〔２－⑧〕、上徳次郎宿（現・徳次郎町）〔２－⑨〕、小池村（現・上小池町）〔２－⑩〕などに高札場があったことが「日光道中分間延絵図」に見ることができます。これら以外の村々にも必ず高札場は設けられていました。

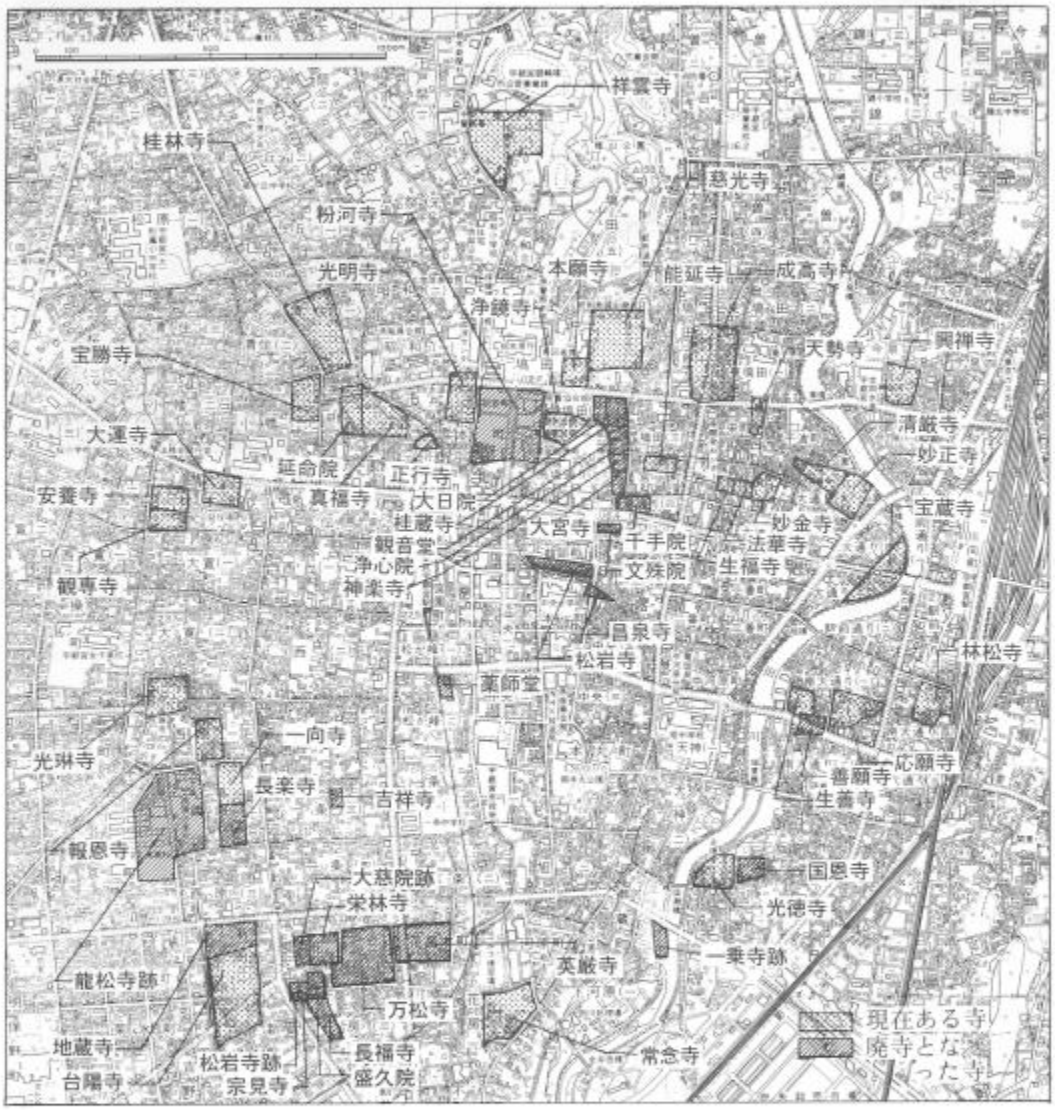
3　寺院の跡をたずねて（廃寺）

現在、宇都宮市内にある寺院の数は、（「栃木県宗教法人名簿」栃木県総務部文書学事課刊を参照した。内容は仏教系の宗教法人数）74にのぼります。江戸時代においては、キリスト教を禁止する一つの方法として、寺請制度を設けました。これは、すべての者がどこかの寺院の檀家にならなくてはいけない。というものでした。このため各地に非常に多くの寺院が建てられていきました。宇都宮市史６巻にのっている廃寺（現在なくなってしまった寺）を調べてみますと106か所も数えあげることができました。もっともこの数の中には、陽北・陽南・陽西・陽東・泉が丘・宮の原・清原・城山・篠井地区のものは含まれておりませんので、数はもっと多くなるはずです。

これらの寺院は明治になって急速に数が減っていきました。これは慶応４年（1868）３月に出された「神仏分離令」のためです。これは当時国を治める上で、仏教と神道の区別をはっき

りさせるために行われたものです。これは、仏教に対しては排斥的なものとなり、各地で廃仏毀釈（仏教的なものをしりぞけて、寺院や仏像をこわしたりすること）が行われ、多くの寺院が廃寺となるに至ったのです。

例えば市街地の廃寺を見てみますと、下図のようになります。



宇都宮城下の廃寺

実に多くの寺が廃寺となったか分かっていただけると思います。宇都宮城を守るということから、寺が城を囲むようにして配置されている様子がよく分かります。

以下、いくつかの廃寺跡を紹介していきます。

●英厳寺〔3－①〕

現在、宇都宮市指定史跡になっている英厳寺跡は、新国道沿いにある滝沢病院の裏手になります。ここには江戸時代の中頃から終わりまで、宇都宮藩の城主であった戸田氏の墓所があります。この寺は、戸田忠真が宝永7年（1710）に宇都宮城主になった時に建てられましたがそれ以前にも戸田氏が移る先々で建てられていました。伊豆下田・天草富岡・京都・岩槻、そして越後高田を経て宇都宮の地に建てられたのです。当然、戸田氏が寛延2年（1749）に島原へ所替え（幕府の命令により藩を変わらせられること）になった時にも、英厳寺は移されました。現在英厳寺には戸田氏の墓がありますが、これらは明治になって建てられたもので、もともとこの寺は位牌を安置し供養するためのものでした。城主の一族や重要な藩士が死亡した時には、この英厳寺で葬式を行い、その後城主は江戸牛込の松源寺の墓地へ、藩士は宇都宮城下の各寺院へ埋葬されたのです。

英厳寺跡（現・花房本町）

戸田忠恕公の墓

英厳寺の広さは、数千坪もあり、その中に位牌堂や僧堂がありましたが、戊辰の役で戦火を受け、倉庫以外はすべて灰と化してしまいました。

その後、梅の名所として名をはせましたが、現在は公園となり、数本の老梅と、市指定になっているイヌツゲの巨木のみが当時の様子を偲ばせてくれます。

●安養院〔3－②〕

城下町宇都宮は、日光東照宮へお参りする将軍の宿泊場所でもありました。宇都宮を出発した後は日光街道を北上していくわけですが、その際にこの安養院で小休止をとったといわれています。将軍が休む程ですから相当に立派な寺であったと考えられます。

現在では寺が建っていた形跡は認められませんが、上徳次郎町の上町公民館の西側の台地上にある墓が当時の面影をわずかばかり伝えてくれています。

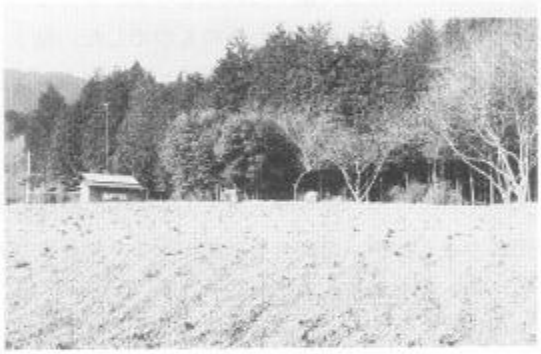
安養院跡（現・徳次郎町）

●天王寺〔3－③〕

天王寺廃寺跡は、国道293号線と新里街道のほぼ真北に２ｋｍ入った天王寺集落にありました。明治の初めごろ、廃寺になったと伝えられていますが、現在でも礎石（鏡つき堂）となっていた四つの大きな石が四個畑の中に残っています。また、この寺は新里地区でも格式が最も高い寺であったもといわれています。

現在は寺の敷地のほとんどが畑となっていますが、寺の入口とみられるところに歴代住職の墓が並んでいます。その中でも特に目を引くのは、「開山芝田和尚大禅師」と刻まれている石塔です。この石塔は県指定の史跡になっている徳次郎町の伝法寺にある妙哲禅師の墓〔3－④〕と大変似ています。天王寺跡と伝法寺は互いに遠い位置にあるようですが、実際は山一つ隔ただけの近いところにあるのです。芝田和尚は文献にも出てきませんが、妙哲と深いつながりがあったのかもしれません。

開山芝田和尚の墓石



天王寺跡（現・新里町）

●薬王院〔3－⑤〕

宇都宮南高校南にある東谷町の交差点の南東側にある集会場が薬王院跡です。集会場の前には「二荒山」の石碑が建っており、裏側には墓地があります。

私たちの家の近くにも多くの墓地がありますが、その中のいくつかは寺院かもしれません。六地蔵があったり、卵塔型の墓石（住職の墓）があればまず間違いありません。東谷町の薬王院はこのような、私たちの身近にある寺跡の一つなのです。

薬王院跡（現・東谷町）

4　塚（土を盛り上げて）

塚とは一般に、土を高く盛って築いた墓とか、何かの供養のために土を盛ったものなどを指します。種類も非常に多くあり古くは豪族の頭の墓であった古墳から、行者が生き埋めになったという伝説のある行人塚、農業の神様である庚申サマを供養するための庚申塚など、数えきれない程です。この項では市や県の指定史跡となっているような古墳を除いた代表的な塚をいくつか紹介します。

●宗円塚

宗円とは、平安時代の末から安土桃山時代までの約550年間、宇都宮の城主として活躍した宇都宮氏の祖となる人です。この宗円の墓といわれている場所が市内に２カ所あります。一つは下荒針町羽下の山の中で〔４－①〕、もう一カ所は新里町日枝神社正面にあるオカザキ山と呼ばれているところです。〔４－②〕

宗円塚

羽下薬師

下荒針町の宗円塚は、20m程の高さの尾根上にあり、直径18m高さ３m程の円墳です。当然宗円が死んだ年代と古墳が築かれた年代には1000年程度の開きがあり、本当に宗円の墓であるとはいえません。しかし、宗円塚のすぐ下にある猪口氏は、宗円が祖といわれている八田氏の子孫であると伝えられています。また、屋号（家の別称）が堀の内であり、中世の豪族との強いつながりを考えさせます。さらに宗円塚から南西へ500m程行ったところには、市指定の文化財である羽下の薬師如来像がありますが、この薬師如来の制作は平安時代の中～後期であり、まさに宗円が活躍した時代と一致します。下荒針町の羽下付近には古い時代の繁栄を偲ばせるものが多くあり、それらが宗円のイメージと重なって伝えられたものではないかと思われます。

一方、新里町の方ですが、新里の神郷日枝神社〔４－③〕の南の方角にあるオカザキ山に、宗円が祀られているといわれています。このオガザキ山は、日枝神社の鳥居から一直線上にある小高い丘で、日枝神社と対面しているようにも見えます。また、日枝神社は、市指定無形文化財になっている宗円獅子舞が舞われる場所でもあります。宗円獅子舞は宗円が賊従退散の祈禱のため舞わしめた、という伝説があり、このようなところからオカザキ山の伝説が生まれたのではないかと思われます。

日枝神社からオカザキ山を望む

宗円獅子舞

日枝神社

もっと知りたい人のために

●藤原宗円

平安時代の中期、一条天皇の摂政（天皇に代って政治をする官）となり権力をふるっていたのが藤原兼家でした。宗円はこの藤原兼家の次男藤原道兼の孫藤原兼房の次男と言われています。永承6年（1051）陸奥（現在の東北地方）の豪族安倍氏が朝廷に反旗をひるがえしました。この安倍氏をおさえるために源頼義・義家父子を朝廷は派遣しました。この途中下野（現・栃木県）を通りましたが、この時戦勝を祈るための僧侶として宗円は従ってきました。宗円は戦勝祈願のため、氏家郷勝山（現・氏家勝山）にとどまり祈りをあげました。時に天喜2年（1054）のことです。この時に祈った不動明王を康平6年（1063）に多気山に安置して、田下城（現・田下町）を築きましたが、後に下野国主に命じられ宇都宮城主になったといいます。この時の不動明王が、多気山持宝院にある市指定文化財の不動明王です。宗円はこの後、日光山輪王寺の座主（住職）や宇都宮の神社寺院をとりしきり、その勢力は下野国だけでなく常陸（現・茨城県）にまで及んだといわれています。宗円は宇都宮氏の祖先であるばかりでなく、八田・小田・氏家・塩谷・横田・上三川・多功・武茂氏の祖先であるともいわれています。天永2年（1111）に69才又は79才で亡くなったと伝えられています。

宇都宮にとって宗円は重要な人物となっていますが、歴史的な記述に乏しく、宗円の存在すら疑問視する研究者もいます。ちなみに、宇都宮氏の中で最初に確実な文献資料にのっているのは、3代城主朝綱からです。しかし、現在の宇都宮市に宗円がかかわる史跡や伝承が多いことは、宇都宮市民の心の中に宗円は確実に生き続けているといってもよいでしょう。

●和尚塚〔4－④〕

宇都宮駅から戸祭営業所行きの路線バスの中に和尚塚経由というものがあります。県立美術館の北側から戸祭小の西側を通る和尚塚街道をバスは走っていますが、いざ和尚塚の場所となると知らない人もいるのではないでしょうか。さて、和尚塚は、この和尚塚街道の西側にある遠欽寺の境内にあります。付近は住宅地として開発されていますが、塚には大木が何本か繁り昔の面影をとどめています。高さ約2.5m一辺が30m四角形をしたちょうど相撲の土俵のような形になっていますが、これは昭和8年（1933）に納骨堂を作るため、塚の上の部分を削ってしまったためなのです。この時に石棺・経石（石にお経を書いたもの）・供養碑が出土しました。この供養碑によると、和尚塚は八幡山西の祥雲寺〔4－⑤〕を開いた良訓和尚の墓ではないかと考えられています。なお、良訓は大永4年（1524）に亡くなりました。

和尚塚

●経塚

経塚とは、一般に仏教の教典を地中に埋めてその上に盛り土をしたものを指します。大きさは直径10m、高さ2m程のものが多いのですが、円墳と形が似ているためよく混同されます。円墳の小さいもの（小円墳）は6～7世紀を中心として作られましたが、経塚の方は平安時代

聖山公園遺跡内1・2・3号経塚〔4－⑥〕

聖山公園内2号経塚
出土経筒

（11世紀）から現代まで作られています。一番多く作られたのが平安時代の終わりごろと、室町時代のころでした。

宇都宮市内には、古墳を除く高塚または供養塚と呼ばれているものが200近く報告されています。このうちいくつが経塚なのかは発掘をしてみないと分かりませんが、相当な数になると予想できます。昭和57年度から発掘調査をはじめた聖山公園遺跡の中には３つの経塚があり、すべて調査をしました。規模はそれぞれ直径7.5m・高さ1.3m、直径６ｍ・高さ0.8ｍ、直径7.3m・高さ1.2mとやや小さめでしたが、このうち直径６ｍの塚から銅でできた経筒（お経を入れて経塚に埋めるための筒）が発見されました。この経筒の扉部分には銘が刻まれており、それによるとこの経筒は享禄２年（1592）に上州（群馬県）四万川（吾妻郡中之条町・温泉郷として有名）に住んでいた六十六部（日本各地66ケ所をまわって66部の法華経をそれぞれの霊場に安置する僧侶）が納めたと記してあります。現在これらの経塚は墓地造成のために消滅してしまいました。

●庚申塚

農業の守り神としてさまざまなものがありますが、一番代表的なものとして庚申サマがあげられるでしょう。庚申とは甲乙丙丁…の十干と子丑寅卯…の十二支の組み合わせ（60で１回りする。これを日とか年にあてはめて用いる。60日および60年ごとに一つの組み合わせが再びやってくる。60才の誕生日の還暦はこの組み合わせが１廻りしたという意味）の一つです。この庚申サマを信仰する人で講という組織（たいてい隣近所で組織する）を作り、60日に一度、宿（順まわりで当番になった家のこと）に集まり、一晩中寝ないで飲食をする、というものです。これは人間の体の中には三尸の虫がおり、この庚申の夜人間が寝ているうちに体から抜け出し、天の神様に、前の庚申の日から60日間に犯した悪い事をすべて報告します。天の神様はその報告によって人間の寿命を縮めてしまう、というのです。そこで、人々はこの夜は寝ないでいるのです。現在はテレビや映画・遊園地など楽しむものがいくらでもありましたが、昔はこの庚申待が一種の休日や楽しみの場の役を兼ねていました。農業の豊作を祈るとともにレクリエーションもという訳です。

上小池町〔４－⑥〕の庚申塚

さて60日に一度の庚申の集まり（庚申待）に対して60年目の庚申の年には庚申塔とよばれる石塔やツカマルメといわれる庚申塚を築きます。一番最近の庚申の年は昭和55年でしたが、この時市内各地で庚申塔が建てられました。しか

し、現在分かっているところでは、市の北部の上小池町や下栗町などでこの年に庚申塚がつくられました。また、それ以外にも、庚申塚の跡は市内でも数ヶ所で見ることもできます。ちなみに、今度の庚申の年は2040年になります。

●おしどり塚〔4－⑦〕

大通りと南大通りを結ぶ今小路通りから大町通りに入った100m程先の右手におしどり塚公園があります。近代的なビルが近くに林立していますが、ここは無住法師が鎌倉時代に書いた「沙石集」の中で紹介している物語の跡として、市の文化財に指定されています。

その物語とは次のようなものです。

おしどり塚公園

鎌倉時代のことです。二荒山神社の東側を流れていた求食川は、川岸に柳が茂っていて水鳥たちのよい住いでした。この求食川から、八幡山一帯を猟の場としていた猟師がおりました。

ある時、この猟師は一日中、獲物を求めて山を歩きまわりましたが、兎一羽さえしとめることができず、がっかりして家路につきました。そして、求食川のほとりを通りかかった猟師が、のどかに遊んでいる一つがいのおしどりを見つけました。猟師は、喜んで弓をひきしぼり矢を放ったところ、ねらい違わず雄のおしどりの命中しました。猟師は首を切り落として雄のおしどりを持ち帰りました。翌日、猟師が川岸を通りかかったところ、昨日のおしどりを射とめた場所に一羽の雌のおしどりがうずくまっていました。猟師は動かないおしどりですので、簡単にしとめることができました。ところが、そのおしどりをあげてみたところ、昨日ころした雄のおしどりの首を羽の下にだいていたのでした。

これを見た猟師は、鳥のもつ愛情に深く心を打たれ、今までの行いを後悔し頭をまるめ僧侶になり、川岸に塚を造り、石塔を建てておしどりの菩提をとむらったということです。

（昭和58年宇都宮市教育委員会発行「宇都宮の民話」より）

物語の中の塚や池は、時代がたつにつれていつの間にかなくなってしまい、供養する石塔だけが当時の面影を偲ばせてくれていましたが、昭和63年度に公園の整備が行われたことにより、当時のイメージに近いものになりました。

5　磨崖仏をたずねて

磨崖仏とは、自然の岩壁に彫刻された仏像の事をいいます。海外ではインドや中国に多くみられますが、国内でも京都笠置寺の弥勒大仏や大分県臼杵の石仏群など各地にも見ることができます。宇都宮市内でも全国に名を轟かせている大谷寺の磨崖仏および岩本町の磨崖仏の二ケ所で見ることができます。

●大谷寺の磨崖仏〔５－①〕

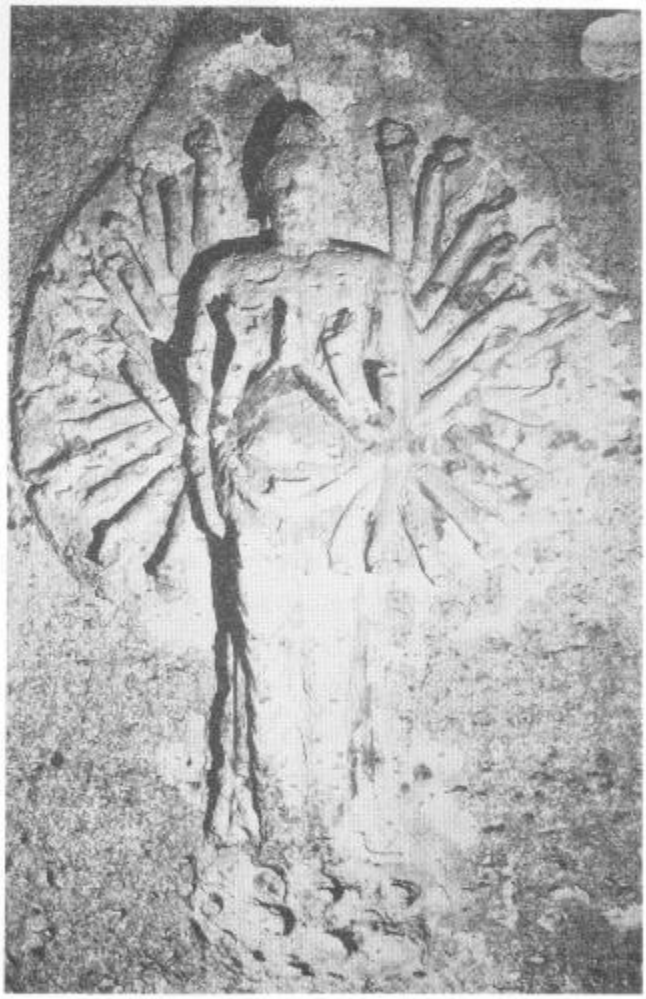
大谷町大谷寺の大谷観音として有名な磨崖仏は全部で十体あり、国指定の特別史跡および重要文化財の二重指定を受けている大変貴重なもので、平安時代から鎌倉時代にかけて作られました。作り方は石心塑造（岩壁面に仏像を荒彫りし、その上に粘土をつけて形を整えさらに漆を塗り色をつけたり、金箔をはったりしたもの）というめずらしい方法で作られています。

大谷寺の本尊となっているのが、千手観音です。数多くの手を持ち、多くの人を救ってくださるというもので、この石仏は平安時代の初期（今から約千年前）に作られたといわれます。

千手観音よりも古いといわれているのが薬師三尊です。他の石仏と比べて一番小さいもので薬師如来を中央に、向かって右に日光菩薩、左に月光菩薩がいます。この石仏も平安時代の初期に作られたといわれています。

その次が、釈迦三尊とよばれているものです。中央に釈迦如来、向かって右に文殊菩薩、左に普賢菩薩がいます。この石仏は平安時代後期（約800年前）に作られたといわれています。

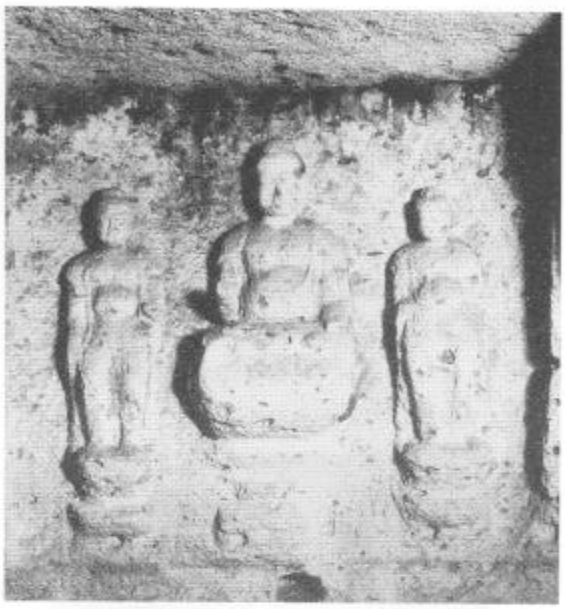
最後に作られたのが、阿弥陀



石造伝千手観音菩薩立像

三尊とよばれているものです。中央に阿弥陀如来、向かって右に観音菩薩、左に勢至菩薩がいます。これは鎌倉時代の作（約700年前）といわれています。

これらの石仏は文化8年（1811）の火災のために、全身が火であぶられ赤茶色く焦げ、粘土もおちてしまいましたが、それでもなお堂々たる姿に荘厳さがあり、それぞれの仏像のもつすばらしさは一切失ってはいません。



石造伝薬師三尊像

石造伝釈迦三尊像

石造伝阿弥陀三尊像

大谷寺は坂東19番目の観音霊場であり、一年を通して参拝者でにぎわっています。本尊の千手観音は弘法大師が一夜のうちに彫り上げたという伝説も残っており、平安時代から現代までの歴史の流れを感じさせてくれます。

●岩本の磨崖仏〔5－②〕

磨崖仏といえば「大谷観音」とすぐ連想してしまいますが、大谷観音の他にも市内に磨崖仏があるのです。岩原町を流れる豆田川にかかる豆田橋の南東方向の小高い丘の上にあります。岩本の公民館の前から凝灰岩の階段をのぼったところの右手正面に鉄の扉があり、その中に磨崖仏２体の姿を見る事ができます。大谷寺のものよりはるかに小さいものですが、馬頭観音と地蔵菩薩が並んでおり地元で手厚く祀られています。

岩本の磨崖仏（右 馬頭観音・左 地蔵菩薩）

岩本の磨崖仏の外観（現・岩原町）

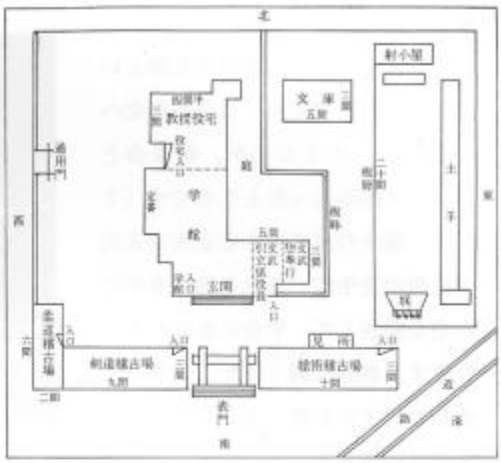
6　宇都宮藩の藩校「修道館」

藩校とは、江戸時代に各藩がその藩の子弟を教育するために作った、現在の学校に相当する施設の事です。一番古い例は岡山藩（現・岡山県）の花畑教場で寛永18年（1841）で、以後明治４年（1871）までに全国で255校程作られました。

宇都宮藩の場合は、文化８～12年（1811～1817）のころに、百間堀前に設けられたもの〔6－①〕が最初で潔進館と名付けられました。

修道館跡（現・中央１丁目）

その後安政5年（1858）に潔進館を大手門の中に移し〔6－②〕修道館と名を改めました。日本や中国の歴史書を学習するのはもちろんの事、槍・弓・剣・柔術などの武芸も課目の中に入っていました。学習の程度によって三段階に分かれており、試験にとおらなければ上の段階には進めませんでした。生徒の数は大体50名で、授業料は個人からは徴収せずに藩の財政でまかないました。ちなみに、当時年間1100両ぐらいの経費がかかっており単純に計算すると一人当り現在の100万円近くにもなります。



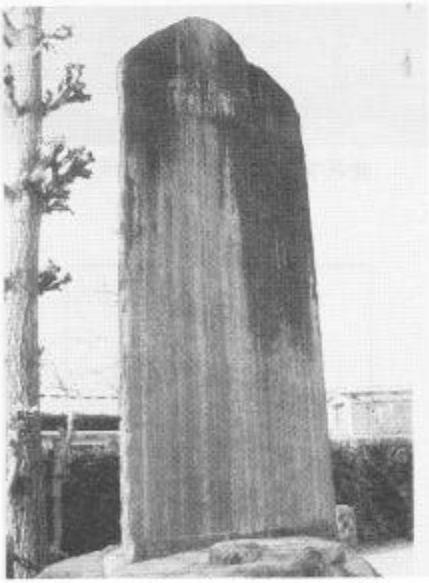
修道館平面図（宇都宮市史第6巻より抜粋）

この修道館は数多くの優秀な人材を輩出しましたが、明治4年（1871）廃藩置県が実施されるとともに閉校になりました。修道館跡にはその後病院や中部公民館などが建てられましたが、現在では市街地の一角を形成するのみとなってしまい、昔の繁栄を偲ばせるものは残念ながら見つけることはできません。

7　寺子屋や塾の跡

寺子屋とは江戸時代の半ばから明治時代はじめごろにかけて活動していた民間の教育の場です。宇都宮市の場合、記録に残ったものの中で一番古いものは、元文元年（1736）のころ城山村古賀志の北条伯教が開いた剣道場です。以来明治のはじめまでの間に50近い寺子屋や塾を見出すことができます。

教えていたのは修験者（山に登ったりして修業をする者、山伏ともいう）や医者、宇都宮藩の武士などで、読み書きを中心としてそろばんから剣道や礼儀作法まで教えていました。


岩崎団吉翁の碑（現・宝木本町）

●岩崎団吉寺子屋

宇都宮市宝木本町の通称仁良塚街道が東北自動車道をわたったあたり（国本中央小付近）を仁良塚といいます。ここで慶応元年（1865）～明治4年（1871）まで、岩崎団吉という人が寺子屋を開きました。〔7－①〕、岩崎団吉翁は地元のために宝木用水の開墾にも多大な功績をあげた人で、仁良塚街道沿いには岩崎団吉翁をたたえる碑もあります。〔7－②〕

● 下荒針町明保舎

鹿沼街道の長坂の途中に久保というバス停があります。ここから北へ500m程行ったところが、明保舎という寺子屋があったところです〔7－③〕現在の戸主である安生安夫氏の先祖の安生佐一郎氏が明治6年に自宅を開放して、学舎にあてたといいます。教師は御子貝光三があたり、多くの門下生を育てました。この明保舎は明治6年（1873）からはじまりましたが、地元の子どもだけでなく大谷や駒生の子どもたちも来るようになり、明治13年に（1880）学校を下荒針町の金沢〔7－④〕に移しました。この学校は地元では金沢学校とか明保学校と呼んでいました。この学校は明治30年に城山南小学校ができたときに廃校となりました。金沢学校は現在では栗林となっており、当時の面影は残っていません。

明保舎跡（現・下荒針町、安生安夫氏宅）

金沢学校跡（現・下荒針町金沢）

下荒針町高山伝治氏宅に残る明保学校（金沢学校）建築担当の辞令

高山真作
明保学校築
営担当可致事
明治十三年一月廿日
栃木懸河内郡役所

建築担当辞令書き下し文

辞令を読み下すと以下のようになります。

高山　真作

明保学校の築造の担当を致す可き事

明治13年1月20日

栃木県河内郡役所

●倉井友敬塾〔7－⑤〕

江戸時代の終わりごろ、雀宮村の針ケ谷では、医師であった倉井友敬が弘化4年（1847）に医師の開業と同時に塾も開きました。読み書き算数を中心に教えていましたが、多くの生徒を集め、明治4年（1871）には男女合わせて100人近く生徒がいたそうです。倉井友敬は信望が厚く、明治27年（1894）には教え子たちが友敬のための石碑も立てています。現在石碑は貞氏宅の庭に立っています。

倉井友敬塾跡（現・針ケ谷町1241　倉井 貞氏宅）

8　街道に残る一里塚

一里塚とは、江戸時代に主な街道沿いに1里（約4km）ごとに作られた塚で、距離のめやすにしました。江戸の日本橋を起点としており、もともとの塚の直径は9m程ありましたが、後の道路拡張や耕作などによってすべて壊されてしまったり、規模が小さくなったりしています。塚の上にはエノキが植えられているものが多くありますが、夏の木陰や遠くからも見える目印としての役割などが多くあったためであるといわれています。

宇都宮は奥州街道と日光街道の分岐点であり、五街道のうちの2本が通っているわけですから、一里塚も数多くありました。しかし、壬生街道の西川田付近の一里塚や奥州街道の海道一里塚は塚はもちろんのこと、その場所さえも特定することはできませんでした。また、雀宮一里塚江曽島の一里塚（現・江曽島町一里）、新田町一里塚（現・清住通り）は現在では塚は完全になくなっています。しかし、日光街道も北の方は比較的良く残っています。ではこれらの一里塚を南から見ていきます。

●雀宮一里塚〔8－①〕

雀宮の一里塚は、当然絵図等では確認できるのですが、本当の場所となると特定できません。今回の調査では、雀宮5丁目の早川輪業店あたりではないかとのことでした。この雀宮一里塚は江戸日本橋から数えて25里にあたり昔は東の塚に榎、西の塚には松が植わっていたそうです。

雀宮一里塚（現・雀宮5丁目）

●江曽島の一里塚〔8－②〕

江曽島の一里塚は江戸から26里にあたり、東の塚に杉・西の塚に松が植わっていると古絵図にはありますが、現在では塚はもちろんありませんし、その場所も明確ではありません。現在の国道4号がＪＲ東北線に近づいた江曽島町のあたりに、唯一一里という地名が残っているだけとなってしまいました。

一里塚（江曽島町一里）付近

●新田町の一里塚〔8－③〕

比較的昔の街道の面影をとどめている清住通りの途中に一里塚はありました。現在は全く塚はありませんが、もとは東西の両方の塚に杉が植えてありました。場所の特定も難しいのですが、絵図等によれば、宝勝寺の入口の南側・現在の県庁前通りと清住通りが交差するあたりであると思われます。

一里塚（宝勝寺より南東を臨む）付近

●上戸祭一里塚〔8－④〕

江戸から28里の上戸祭一里塚は、国道119号線沿いにある戸祭自動車教習所の南にあります。現在でも東西両方の塚は残っていますが、国道を改修した時に塚も整備しました。東側の塚には松が植えてありましたが現在は石柱のみです。西側は杉が植えてあったそうですが現在は松が植えられています。

上戸祭一里塚西側塚（現・上戸祭４丁目）

●高谷林一里塚〔８－⑤〕

高谷林一里塚西側塚（徳次郎町）

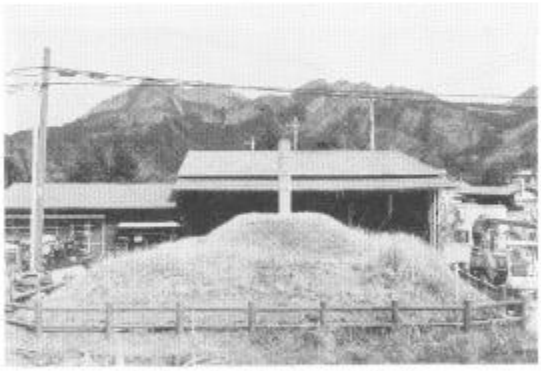
高谷林一里塚東側塚（現・下金井町）

高谷林一里塚は国道119号を東北自動車道の交差するところの南に、東西両方の塚とも見ることができます。東側の塚は昭和58年度に一部修復していますが、西側の塚は自然のままの姿で残っています。桜２本と松１本が植えられています。

●石那田一里塚〔８－⑥〕

江戸から30里のこの一里塚は、石那田町の一里塚バス停のところにあります。北側の塚はやはり一部修復されています。南側の塚はほんの一部だけ塚の痕跡が認められる程度になってしまいました。

日光街道沿いには上小池町にも一里塚がありますが〔８－⑦〕西の塚のみ残っています。これは上小池町の新渡神社の今市寄りに見ることができます。



石那田一里塚（現・石那田町）

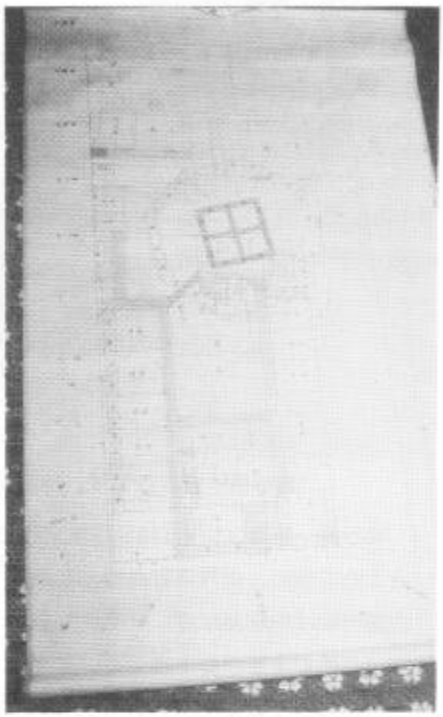
9　大名の宿、本陣、脇本陣をたずねて

本陣とは、江戸時代に各宿場に設けられた大名や幕府の使節などが休んだり泊ったりする施設です。また、脇本陣は、本陣に従者等が泊れない場合に用いた宿で、一般の旅館などと異なり格式が高くぜいたくな作りになっています。

市内の宿場で最大のものはやはり宇都宮宿ですが、現在では全く昔の面影を偲ぶものはありません。本陣は現在の伝馬町３番地一帯にあたります。当時の建物は建坪で191坪もあり、日

光街道で２番目に大きい本陣でした。〔９－①〕本陣を勤めた者は、時代によっても異なりましたが、最後は伝馬町の上野新右衛門が勤めました。

一方、脇本陣もやはり時代によって異なりますが複数の宿があてられたとの記録もあります。その脇本陣であった林庄兵衛の「稲屋」の見取り図が右の写真です。稲屋は現在の大通りの北側、小野崎太鼓店あたり〔９－②〕になります。内部は８畳相当の玄関を入ると離れを含めて室数が９つもあります。20坪もある中庭を持ち当時の豪華さを思い起こさせられます。

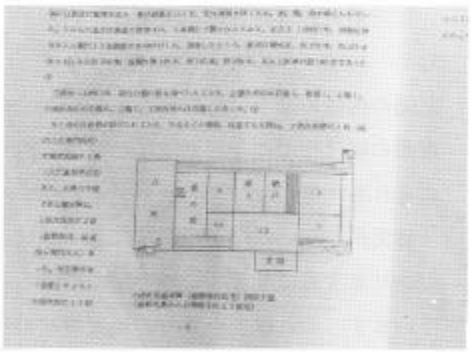


脇本陣「稲屋」見取図
（宇都宮市教育委員会蔵）

● 上徳次郎宿本陣〔９－③〕

徳次郎宿は上・中・下の三つに分かれていましたが、それぞれに本陣・脇本陣が設けられていました。上徳次郎宿の本陣は現在では取りこわされていますが、本陣の子孫である館野文男氏宅には取り壊わす前の写真が残されています。また、中央女子高による調査で作成した推定間取りもあり、これらを見ると相当な規模であった事が分かります。

上徳次郎宿本陣（現・徳次郎町）



中央女子高「徳次郎」より抜粋

● 雀宮宿本陣・脇本陣〔９－④〕

雀宮宿の本陣は、現雀の宮４丁目で国道４号沿いにある大和田内科胃腸科病院のところにあたります。建物はすでにありませんが、当時の間取り図を見ると115坪の広大な建坪であった事がわかります。また、立派な門が現在でも残っています。

一方、脇本陣は、本陣より北に100mばかり行った雀宮駅入口バス停（国道の東側、現・雀宮３丁目）の前にあります。現在でも門や建物が残っており、当時の面影を現在に伝えています。

雀宮宿本陣跡（現・雀宮４丁目）

雀宮宿脇本陣（現・雀宮３丁目、芦谷薫氏宅）

10　河川交通の荷上げ場河岸

現在では道路が整備され、運送の中心はトラックになっています。しかし江戸時代はもちろんの事、明治・大正時代においても大量輸送は船によるものが中心でした。船は一度に多くの荷物を運べ、陸で馬や人夫を使って物を運ぶのに比べて５分の１の費用ですむ、などの理由で多く用いられたのです。市内においては、鬼怒川があり、江戸時代以前から輸送に用いられていましたが、江戸時代に入ってからは河川交通が整備され、かつ年貢米を江戸へ納める必要性から、河川交通は非常に盛んになりました。これらの川で、船は積んできた荷物を陸上げしたり船に荷物を積みこむところを河岸といいます。

ここでは鬼怒川の河岸を中心にしてかんたんに述べてみたいと思います。

市内の主な河岸跡

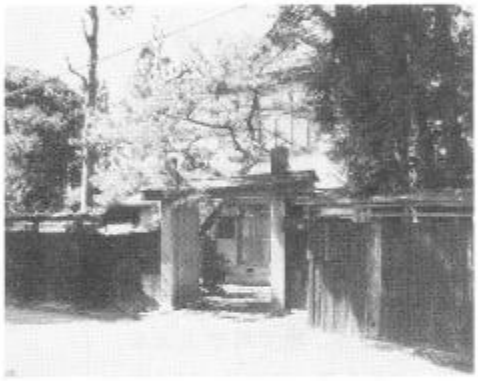
●板戸河岸〔10－①〕

板戸河岸は鬼怒川流域の河岸としては、阿久津河岸とともに最古の河岸の一つであり、会津藩などの年貢米を船積みするところとして、鬼怒川上流域で最も栄えた河岸の１つです。

板戸河岸は江戸時代の明暦から安永にかけて（17世紀半ば～18Ｃ後半）最も繁栄しました。元禄14年（1701）には板戸河岸一ケ所のみで22394駄（約3050ｔ）もの荷物を扱いました。しかしその後、会津藩の年貢米の輸送量の減少や毎年のようにおこる飢饉のため、だんだんと衰えていってしまいました。

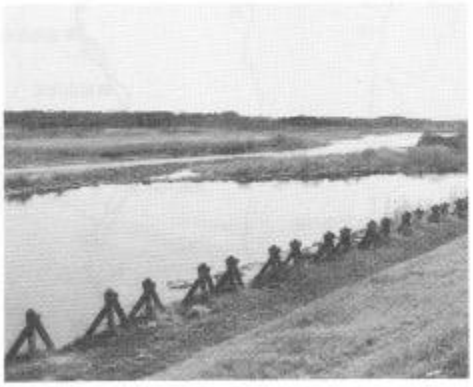
現在、河岸は堤防の中にあり、葦などが繁っていますが、船問屋だった坂本龍夫さんのお宅は、その家構えや門に当時の面影をとどめています。また坂本さんの家には多くの河岸に関する文書が残っていますし、南側の畑からは今でも炭（荷物置き場であったため）が出てくるそうです。

板戸河岸跡（現・板戸町）



板戸河岸問屋跡（現・板戸町、坂本龍夫氏宅）

●石井河岸〔10－②〕



石井河岸跡（現・石井町）

石井河岸から久部街道を臨む

石井河岸は、宇都宮大学から国道123号の南に並行して東に向かう久部街道が鬼怒川につきあたるところにありました。これは、石井河岸が宇都宮城下に最も近い河岸であるため、久部街道が重視されたためです。石井河岸は17世紀の半ば（江戸時代の前期）には既に作られており、宇都宮を中心とした地域の荷物を積み出していました。この河岸は大正時代の終わりころまで使われたそうで、柳田大橋の下を帆をたおして帆掛船が通っていたそうです。この石井河岸のすぐ西には下川岸という集落がありますが、ここにはセンドウヤ、カシヤ、ヨシノヤといった河岸当時の商売と思われる屋号を持つ家が並んでいます。

鬼怒川にはこの２つの河岸の他にも道場宿河岸〔10－③〕、鑪山河岸〔10－④〕、桑島河岸〔10－⑤〕などがありました。

●幕田河岸〔10－⑥〕

今まで述べてきた河岸が鬼怒川にあるのに対して、幕田河岸は姿川にあります。この河岸は江戸時代の後期に宇都宮およびその付近の商品輸送量が増大したのにともなって、寛政６年（1794）に開設されました。幕田河岸の開設により壬生から楡木方面の荷物の輸送量が減ってしまったため、楡木宿などとの争いも起きてしまいました。

幕田河岸跡（現・幕田町）

一時繁栄した幕田河岸も江戸時代末期には不振におちいり、明治４年（1871）には早くも閉鎖されてしまいました。

11　用水路や用水堰

用水路とは、飲み水や田畑のかんがいなどに用いる川や地面を堀削して作った引き水のことをいいます。堰は用水を取り入れるための施設のことです。用水路は古代から現代まで作られ続けていますが、ここでは江戸時代、特に二宮尊徳と関係の深い用水路や用水堰について述べていきます。

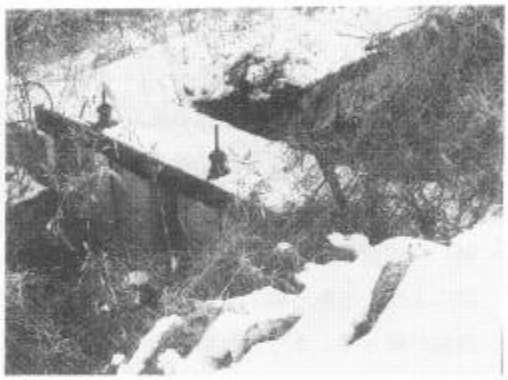
●徳次郎用水（石那田用水・徳次郎六郷用水）、徳次郎新掘（徳次郎用水）

江戸時代の後期・17世紀のはじめごろのことです。当時石那田村と徳次郎村はそれぞれ田川から水を引いて田を耕していましたが、水不足のため互いの村で水争いを繰り返していました。そこで代官も何とかとようとしていましたが手の下しようもありません。一方真岡の桜町で農村をたて直し成功した二宮尊徳に対し徳次郎村と石那田村から堰の築造、用水路の整備、新堀の開削の嘆願書が出されました。特に徳次郎新堀に関しては、文政７年（1824）に上徳次郎

から宝木十ケ新田を通り、鵜田にまで達する堀を作りましたが、通水することはありませんでした。その後文政8年（1825）、天保10年（1839）と工事をしましたがすぐ流れなくなってしまっていたのです。嘉永5年（1851）に入ると尊徳の監督指導の下に工事が始まりました。まず石那田に堰を設け〔11－①〕、上徳次郎宿の南で日光街道を横切って上・中・下徳次郎および西根・田中・門前の計六つの村の田を潤すとともに人々の飲み水も供給するので六郷用水とも呼ばれています。現在田川からの取水には河川改修で当時のものはありませんが、近くに移築記念碑が作られています。またこの用水は現在鎧川と呼ばれる川になって下流域の人々の生活に役立っています。

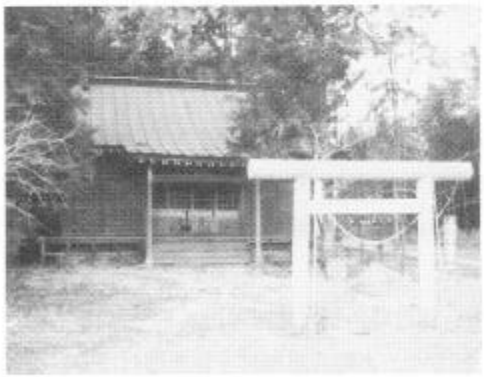
この堀工事は、前からくずれて通水しなかった部分の開削・補修を中心に行われたものですが、これがこの新堀が後に作られる宝木用水の母体になっていくのです。

石那田堰移築記念碑（現・石那田町）



宝木用水堰（現・徳次郎町）

●宝木用水



水神社（現・宝木本町）

宝木用水堀（現・宝木本町）

嘉永5年に徳次郎新堀が完成し、徳次郎村の田は潤いましたが、南にある宝木の村々には水は流れていきませんでした。そこで宝木の人々は資金を集め、新堀の通水工事を真岡の代官所

を通して二宮尊徳に依頼しました。安政2年（1856）には設計書も完成し、工事にとりかかろうとした矢先に尊徳は亡くなってしまいました。あきらめ切れない宝木の人々は、再度真岡の代官所に嘆願した結果、尊徳の門人であった吉良八郎らによって工事を始めることになりました。時に安政6年（1859）3月のことです。吉良八郎以下工事にたずさわった人々は、昼夜もいとわず仕事を進め、早くも6月には完成しました。この宝木用水の取水堰はアイワ北工場の裏側にあります〔11－②〕。現在田川の河川改修は進められていますが、昔の用水路は面影を残したままです。当時工事にたずさわった人々の名前をきざんだ祀も残っています。また国本公民館から日光街道をぬける途中には宝木用水を守る水神社もあります〔11－③〕。水神社はこの下流の悟理道にもあり〔11－④〕、当時の人々の水に対する感謝の念を思い知らされます。この宝木用水は後に江曽島にまで引かれ今では新川と呼ばれています。

12　刀を作った鍛冶場の跡

江戸時代までは、刀は武士の必需品だったので、多くの鍛冶職人がいました。そこで刀に関しては慶長（16世紀末～17世紀初）の前に作られた刀を古刀、後に作られた刀を新刀と呼んでいます。当然江戸時代には多くの刀が全国で作られましたが、古刀となると新刀よりも数は少なく貴重なものも多くあります。その古刀の刀鍛冶が宇都宮まで活躍していたのです。

現在県内には県指定になっている守勝銘の刀、わきざしなどが9振ありますが、この守勝が宇都宮にいた刀鍛冶です。守勝は初代から6代までおり、南北朝時代から戦国時代の終わりまで、徳次郎町で刀を作りつづけました。現在鍛冶場跡には守勝神社が建てられています。〔12－①〕この付近を掘ったりすると鉄のくずが見つかることがあるそうです。この辺りは多くの砂鉄が産出し、良質の粘土や水に恵まれていたために、この地が選ばれたようです。

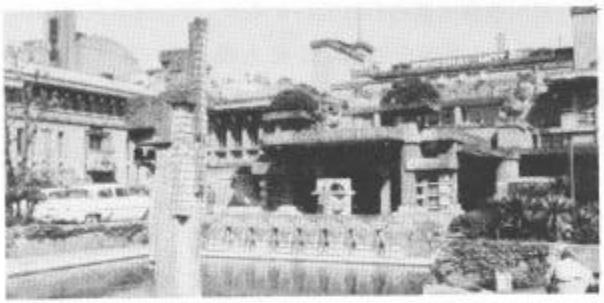
守勝神社（現・徳次郎町）

13　鉱山の跡と石を使った建物

●大谷石

大谷石は宇都宮西部、大谷町を中心に産出される石で、主に建築材料や石燈籠などの加工品に利用されています。特に建築材料としての利用は天平13年（796）に下野国分寺の土台石などに用いられたのが一番古い記録です。また江戸時代の元和6年（1620）には、宇都宮城主本多正純によって行われた宇都宮城改修の際に大量に用いられました。その後大谷石の名前を一躍有名にしたのが、フランク＝ロイド博士の設計により大正元年（1912）に完成した（旧）

帝国ホテルでした。全体に大谷石を用いた同ホテルは、関東大震災でも大きな被害は受けず、大谷石の耐震性の優秀さが認められました。帝国ホテルは現在新しく高層ビル化されましたが、旧ホテルの玄関部分は愛知県の明治村に保存されています。



（旧）帝国ホテル（資料提供・大谷資料館）

（旧）宇都宮商工会議所
（資料提供・大谷資料館）

市内では、（旧）宇都宮商工会議所をはじめ松ケ峰教会〔13－①〕、大谷公会堂〔13－②〕等多くの大谷石を用いた建物が建てられました。なお宇都宮商工会議所は立て替えに際し、その玄関部分のみが、県立中央公園に移築展示されています〔13－③〕。

大谷石の採掘はその後急速に伸び、大正時代の末から昭和のはじめにかけては、大谷石の黄金時代ともいうべき時代で、年間20万ｔ以上も採掘が手堀りでされていました。その後機械化の導入があり、昭和45年には最大採掘量78万ｔもありました。

大谷石は、緑色凝灰岩というもので、今から約２万５千年前から１万２千年前ごろに海底火山の爆発によって発生した火山灰が堆積してできたのです。大谷石は大谷周辺の石の名称になっていますが、この緑色凝灰岩は宇都宮市から県北にかけて広く分布しています。

大谷公会堂（現・大谷町）

松ケ峰教会（現・松ケ峰一丁目）

●徳次郎石

大谷石を作った緑色凝灰岩は大谷のみでなく県北の広い地域まで、各地でさまざまな石の産地を生み出しました。市内でも長岡石、多気石、徳次郎石などそれぞれに特徴ある石を産出しています。

徳次郎石は大谷石と違いみその部分が少なく色も白いところから、氏神様の祀などに用いされます。

徳次郎石を使った家（現・徳次郎町）〔13－④〕

徳次郎石石切場（現・徳次郎町）〔13－⑤〕

●篠井金山

市の北部篠井町に地元でガンカラ山と呼ばれている山（稀名山）〔13－⑥〕があります。ここは現在は廃鉱になっていますが、金が採掘された山でした。採掘がいつはじまったのか、どのくらいの採掘量があったのかなど良く分からない点も多くありますが、山に登ると採掘していた当時の坑道口の跡を見る事ができます。またこの地には宇都宮指定無形文化財である〝篠井の金堀唄〟が伝わっており、採掘当時のようすを偲ぶことができます。

この金山は現在では採掘はしてはいませんが、採掘権は存在していますので自由に掘ることはできません。

「篠井の金堀唄」

○ハッパかければ	切羽が延びる	延びる切羽が	金となる	ハア	チンチン
○曇るガンガラ	宝の山よ	里に黄金が	流れ出る	ハア	チンチン
○坑夫さんなら	来ないでおくれ	ひとり娘の	気をちらす	ハア	チンチン
○ひびく槌音	女房が聞けば	黄金集めて	背負い出す	ハア	チンチン
○右に槌持ち	左に手金	ひとつ打つたび	火花散る	ハア	チンチン
○灯蓋灯もして	黄金を掘れば	黄金光で	目がくらむ	ハア	チンチン
○佐竹奉行は	おれらの主よ	恵み厚きで	精が出る	ハア	チンチン
○夫婦揃うて	黄金を掘れば	いつかわがやに	煙立つ	ハア	チンチン

棒名山遠景（現・篠井町）

篠井金山坑道口跡

14　明治の工場の跡地

明治５年（1872）10月、群馬県富岡市に官営の富岡製糸工場が作られました。近代日本を目指した富国強兵策の一環として、巨額の経費をつぎ込んで作られたものです。しかし、富岡製糸場に先立つ明治４年に、宇都宮に民営の製糸場がつくられていました。これが大嶋商舎です。石井街道の新鬼怒橋を渡り200ｍ先の右側が工場の跡地です。〔14－①〕　大嶋商舎は、日本橋の豪商川村辻叟が建てたもので、一時は県内の生糸生産量の４分の１を占めるまでになりました。しかし、その後設立した銀行の不振から人手に渡り、大正４年（1915）には完全に移転してしまいました。現在大嶋商舎の跡に建物は残っておらず、住宅地になっていますが、土塁の一部や堀の跡などで工場の規模を推定する事も可能です。

明治時代の大嶋商舎作業風景

大嶋商舎跡・南東より望む（錦山町）

大嶋商舎旧入口付近・西より望む（石井町）

もっと知りたい人のために

●川村迂叟

川村迂叟は文化5年（1822）の5月に、日本橋新右衛門町に生まれました。通称を伝左衛門といいます。川村家は江戸時代の初期に江戸に出て商業を営み、勢力を拡大してきました。ちょうどその川村家の近くに宇都宮城主戸田氏の江戸藩邸があったため、川村家と戸田氏は急速に接近していきました。江戸時代の終わり頃の宇都宮藩は毎年のようにおこる凶作のため慢性的な巨額の借金をかかえていました。老中間瀬和三郎（後の戸田忠至）は藩の財政立て直しのために、川村迂叟の力を借りる事を考えました。和三郎は迂叟の元を何度も訪ねては立て直しの協力を要請したところ、ようやく迂叟は承諾をし、新田開発に着手する事になりました。また宇都宮藩が近畿地方の山陵を修理する時にも15,000両を貸し付けるなど、宇都宮藩復興のために努力をしました。さらに、幕末前後から鬼怒川沿いの荒地を開墾して多くの桑畑を作ったり、堤防の修理を行ったりしていました。そのような中で明治4年に製糸工場である大嶋商舎を設立しました。イタリア製機器に模した製糸試験場で15人の工女によって始められた大嶋商舎も、製糸場用水堀（川村堀）の開削により水力による紡績が可能になったため、明治7年には、100人をこえる工女や僕従たちを雇い入れるまでになりました。明治9年には、製糸家であるイタリア人パンビー夫妻の協力を得たり、蒸気の力による繰業なども行い、明治の半ばころには、ここの製糸生産量が県内生産量の4分の1を占めるまでに成長しました。迂叟はその後、大嶋商舎で生産した生糸の輸出のために明治11年に長男の伝衛とともに第33国立銀行を作り、宇都宮にも支店をおきました。その後迂叟は伝蔵（伝衛の義兄）とともに近隣の農民に対し、桑苗の配布、肥料代の無利息貸付などを行い多くの農民を救済しましたが、明治23年、銀行の経営悪化のために、銀行・大嶋商舎共に当時の財閥三井の手に渡り、大正4年には、大嶋商舎も閉鎖されてしまいました。

15　先人の墓所をたずねて

ここでは、宇都宮の歴史を創ってきた先人たちの墓所を紹介します。なお紹介する人物は江戸時代まで、または江戸時代の末期から明治時代にかけて活躍した人に限らせていただきます。

●戊辰戦争戦死者の墓

戊辰戦争では、宇都宮は大激戦地だっただけに、この地で多くの戦死者がでました。また宇都宮藩士の中にも会津など

戊辰戦争の会津の戦いで戦死した宇都宮藩士の墓（台陽寺・新町1丁目）

で命を落とした者もいました。それら戊辰戦争の戦死者を祀った場所は、今のところ新政府軍24ヶ所、幕府軍3ヶ所の合計27ヶ所もの墓所が市内にあることが分かっています。

○新政府軍

慈光寺、大運寺、一向寺、報恩寺、光琳寺、観専寺、安養寺、台陽寺、桂林寺、清巌寺
光徳寺、林松寺、天勢寺、光明寺、能延寺、江曽島町、石井町、東刑部町、山本町、
駒生町、簗瀬川沿い、雷神社、幕田町堂ノ前、幕田町合ノ畑

○幕府軍

常念寺、六道口、幕田町、光琳寺

●英巌寺跡〔15－①〕

宇都宮市の指定史跡英巌寺跡は宇都宮城主であった戸田氏の墓があります。1つは戸田氏二代尊次から十二代忠明まで連記された合葬墓、および十二代忠恕、十四代忠友の墓二基があります。ちなみに初代忠次の墓のみ伊豆の下田（伊豆下田の城主だった）にあります。なお英巌寺というのは、忠次の法号です。

●安養寺（材木町）〔15－②〕

○高宮雲僊

書家であった雲僊は、宝暦11年（1761）佐賀県島原に生まれました。その後藩主戸田氏が宇都宮に移ったため戸田氏の江戸藩邸に勤めました。宇都宮に藩学ができたときに、書札の教師として宇都宮に移り住みました。書に関しては、中国魏、晋の書道家の作風を学び尽くしたとまでいわれ、酒と旅を愛し、蒲生君平とも交友があり、宇都宮を代表する書家の一人といえます。

高宮雲僊の墓

●一向寺（西原二丁目）〔15－③〕

○菊地愛山

文政2年（1819）茂登町（現・大寛二丁目付近）に生まれた愛山は、画家鈴木海渓の弟子となり、数多くのすぐれた作品を残しました。明治39年（1906）に88才という高齢で亡くなる直前まで絵を描きつづけたといいます。県指定文化財「竜虎図屏風」、市指定文化財「宇都宮大明神祭礼絵図」をはじめ多くの作品が文化財に指定されています。愛山の墓は一向寺の山門をくぐった左側に、愛山をたたえる碑に向ってたたずんでいます。

菊地愛山自画像・部分
〔県指定文化財・延命院蔵〕

●桂林寺（清住一丁目）〔15－④〕

蒲生君平の墓

松本定の墓

○蒲生君平

高山彦九郎、林子平とともに寛政の三奇人として有名な蒲生君平は、明和5年（1768）新石町（現・小幡一丁目）で油屋福田右衛門の家に生まれました。幼少のころから延命院の良快和尚や鹿沼の鈴木石橋から学問を習い、学問で身を立てる決心をしました。その後山陵（天皇や皇族の墓）を近畿地方まで何回も出かけて調査し、「山陵志」という本を書きました。この中で初めて「前方後円墳」という言葉を君平は用いています。また、国防の必要性を説いた「不恤緯」や古代の官職について述べた「職官志」などを著し、人間の本質的な社会生活の営みを具体的な歴史を通して究明しようとしましたが、文化10年（1813）に40才そこそこの若さで惜しくも亡くなってしまいました。君平は、東京谷中の臨江寺に葬られましたが、後に遺骨を宇都宮の桂林寺に改葬しました。八幡山にある蒲生神社〔15－⑤〕は大正時代に君平を祀るために建てられたものです。

○岡田真吾（裕）

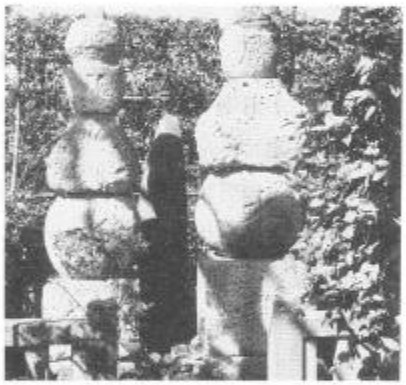
幕末における宇都宮の藩士。小さいころから学問が好きで、江戸・京都とそれぞれ大橋訥庵春日潜庵について漢学・陽明学を修めました。後尊王攘夷の思想に賛同し、松本釼太郎と共に一橋慶喜（後の将軍徳川慶喜）を擁して日光に拠り、幕府改造の先鋒となる計画をたて、訥庵に、慶喜への取り継ぎを頼みましたが、幕府に知られてしまい、訥庵をはじめ釼太郎、真吾も幕府に捕らえられてしまいました。その後宇都宮藩あげての赦免運動が効を奏し、真吾らは出獄を許されました。幕府が滅びた後、真吾は宇都宮に戻り、県の仕事から宇都宮裁判所の仕事に移り、明治5年（1872）51才の若さで亡くなりました。

○松本定

松本定は宇都宮藩医松本玄益の子で、岡田真吾と共に捕えられた岡田銀太郎の弟になります。兄同様父の跡を継ごうとせず、兄と共に池田草庵について漢学を学び、かつ武道の鍛練も熱心に行いました。宇都宮藩の改革に対し意欲的に取り組みましたが、その思想は尊王の志のもとにあったといわれています。元治元年（1863）3月、尊王攘夷の名の元に水戸天狗党は筑波山で兵をととのえ、日光を占拠するため出発し、宇都宮に着きました。天狗党は宇都宮藩の協力が得られないまま日光に行き参拝した後、栃木の太平山にとどまりました。天狗党の中の池尻隊の池尻嶽五郎は再び宇都宮藩の協力を得る交渉のため、老中県信緝と会見しましたが再び断られてしまいました。この時もともと宇都宮藩の中で尊王攘夷の考えを持った、松本定をはじめとする9人の若者が、池尻隊に加わりました。池尻隊は真岡代官の襲撃を受け、ここで松本定は誤って小川に落ちて捕らえられ、斬られてしまいました。時に二十三才の若さでした。なお、他の者もその後の戦いにおいて最期をとげました。

●興禅寺（今泉3丁目）〔15－⑤〕

興禅寺本堂



宇都宮貞綱（右）・公綱の墓

○宇都宮貞綱・公綱

興禅寺の山門を入り、本堂に向かって左側に非常に大きな五輪塔が2基並んでいますが、この右側が宇都宮氏八代城主の貞綱・左が九代の公綱の墓といわれているものです。

貞綱は、元が襲来した弘安4年（1281）に大将軍として九州の地に赴きました。時に貞綱は16才でした。貞綱が九州の地に着いた時、既に元軍は退却した後でしたが、そのまま九州にとどまり沿岸防備につとめたと伝えられています。なお、興禅寺は貞綱により開かれましたが、この興禅寺の名前は貞綱の法名からとったものです。

貞綱の二男公綱は、鎌倉時代から南北朝という動乱の世で活躍しました。元弘2年（1332）大坂（大阪府）天王寺に陣をはった楠木正成に立ち向かうよう、公綱は命じられました。それを知った楠木正成は「宇都宮は坂東一の弓矢取りなり…」といい、味方の損害が大きくなるの

を避けて退却した程でした。それくらい公綱の武名は全国にとどろいていたのです。建武の新政が御醍醐天皇によって行われると、公綱は雑訴決断所で裁判や治安維持の仕事を受け持ちました。その後、足利尊氏が京都に北朝をたて南北朝時代になると、公綱は戦況に応じて北朝方や南朝方についたりして、宇都宮氏一族の安泰のために奔走しました。

宇都宮公綱の画像（「下野国誌」巻九による）

○奥平家昌・忠昌

奥平家昌は慶長6年（1601）に宇都宮城主となりましたが、時に23才で大ぼってきといわれました。これは父信昌の奥方亀姫が家康の娘であり、東北の押えや下野の支配のために家康が計画したことだといわれています。家昌は興禅寺・光琳寺の再建、浄鏡寺・台陽寺・万松寺などを建立し、寺院の興隆に尽力しましたが、慶長19年（1614）に若くして亡くなりました。

忠昌は家昌の嫡男であり、父の死後宇都宮領を継ぎましたが、時にまだ7才でありました。しかし、元和5年（1619）に宇都宮から古河へ所替えになりました。このことが祖母亀姫の不満の種となり、後に忠昌のかわりに宇都宮城主となった本多正純失脚のための一翼を担ってしまうのです。（宇都宮釣天井伝説発生の一因です）正純が移封された後、忠昌は元和8年（1668）までの46年もの間城主となっていましたが、その間13回の将軍の日光社参があり、その度に宇都宮城が宿舎にあてられ、その対応に追われていたといわれています。

奥平家昌（右）・忠昌の墓

○奥平内蔵允正輝

寛文8年（1608）宇都宮城主奥平忠昌の二十七日忌法要の際、正輝は同族であった奥平隼人と口論の末、刃傷沙汰になり、逆に斬られ負傷し、約2ケ月病床にありましたがついに自刀してしまいました。その後、正輝の子源八は奥平隼人を仇として日夜探しまわり、ついに寛文12年（1672）江戸牛込の浄瑠璃坂で見事仇を討ち取りました。この仇討は本や芝居にもとりあげ

奥平正輝の墓（左は妻の見性院の墓）

られ江戸の三大仇討の一つとして今日まで伝えられています。奥平正輝の墓は興禅寺内墓地の中ほどに、妻の見性院の石塔と並んで建てられています。

もっと知りたい人のために

●浄瑠璃坂の仇討

寛永8年（1668）2月、宇都宮藩主奥平忠昌は江戸の藩邸で亡くなりました。その葬儀は宇都宮の興禅寺で執り行われることになりましたが、その席上で奥平内蔵允正輝と、奥平隼人はちょっとした口論になりました。その場は事なくおさまりましたが、忠昌二十七日忌法要の際再び口論となり、ついに刃傷沙汰になってしまいました。先に刀を抜いたのは正輝の方でしたが逆に隼人に斬られてしまい、病床に伏すことになりました。正輝は20日ほど苦しんでいましたが、4月22日隼人への無念の思いを込めて自刃しました。この刃傷沙汰の御達示は、正輝の子源八は改易（家禄・屋敷の没収）・隼人は無罪という、いわば片手落ちの結果でした。源八はやむなく宇都宮を出て、芳賀郡深沢村（現・茂木町深沢）に主従10人と共にかくまわれることになりました。一方、宇都宮藩の中でも刃傷沙汰に対して議論がかわされていましたが、源八が改易された事に不満を持つ者総勢30人程は、俸禄（給与）を捨てて源八の後を追って深沢村へと向かい、源八らと共に仇討ちの機会をねらっていました。

宇都宮藩士30人程も、源八の後を追って脱藩したため、藩主奥平昌能はやむなく隼人をも追放としました。しかし、むやみに追放すればすぐ討たれてしまうので、一時壬生藩に隼人の身柄を預かってもらうよう頼み、50人程に守られながら隼人は壬生入りをしました。源八らは穏密を壬生に向けて、城に火をつけるといううわさを流し、壬生藩は仕方なく隼人らを信州（現・長野県）高島の山中にかくまわせることにしました。当時山形にいた隼人の弟主馬允は、自ら兄の危機を救うべく信州の地へ向かいましたが、途中源八らの襲撃にあい首をとられてしまいました。隼人たちは信州の地でも安閑としていられなくなり、江戸に身を潜めることになりましたが、すぐ源八らの穏密にみつかってしまい、寛文12年（1672）2月2日、源八ら総勢42人は隼人の首を討ち取るべく討ち入りを決行しました。隼人は屋敷内にいなかったため、源八らは屋敷近くの浄瑠璃坂を下って行きました。するとそこで隼人らを見つけ、ついに隼人の首を取り、宇都宮へ戻りました。源八はこの時わずか15才でした。

源八らは後、仇討の主謀者であると自首をし、老中たちの閣議で源八ら3人のみ大島への遠島であり、他の者は無罪であると決まりました。6年後、源八らは赦されて江戸に戻り、それぞれの各藩に高禄で召しかかえられることになりました。

この仇討は荒木又右衛門の伊賀上野の仇討・赤穂義士の討入りと共に江戸の三大仇討といわれています。またこの浄瑠璃坂の仇討が、赤穂義士討入りのモデルになったともいわれています。

○筑紫市兵衛

間垣兵九郎、向井蔵人と共に寛永三馬術士の一人として有名な筑紫市兵衛は、唐津藩（現・佐賀県）の馬術指南役として仕えていましたが、唐津藩主をそしった薩摩藩（現・鹿児島県）の宍戸源太夫を切ったので浪人となり宇都宮の地に来ました。故あって厩仲間に住み込んでいましたが、時に藩主奥平忠昌公を助けたため、忠昌公から家宝の印籠をいただき、馬術の指南役になりました。ちょうどこれは寛永９年（1632）のことでした。翌年には仇討に来た源太夫の家来と出会い、これらの者を返り討ちにしてしまいましたが、宍戸家再興のために寛永16年（1639）自ら切腹をし、最期をとげました。

筑紫市兵衛の墓

桑名主米の墓（中央大型のもの）

○桑名主米勝乗

奥平氏が宇都宮藩主であったときの重要な家老の一人です。特に、わずか７才で藩主になった千福（後の忠昌）の側近として活躍し、「奥平に過ぎたるものが二つあり、桑名主米と白鳥の槍」（白鳥の槍とは、千福が祖父徳川家康を駿府（現・静岡市）に見舞った時に、いただいた槍でこの時いっしょにもらった印籠とともに奥平家の家宝となりました。なおこの印籠は後に筑紫市兵衛に下賜しています）とまでいれました。主米はその後、奥平昌章の時には特別に藩主から多くの土地をもらっています。元禄10年（1697）に今里村・関白村（現・上河内村）に隠居し、元禄11年に亡くなりました。

○山崎左近

藩主奥平忠昌の時の家老として活躍した人です。特に、幼かった忠昌に仕え、本多正純と交代する難局を見事にこなし、名家老の名をほしいままにしました。また寛永２年（1625）には、石町の米屋永島五郎左衛門の専横を抑えて士民の騒乱を未然に防いだり、寛永11年にも上河原の初市にからむ地主と売人との紛争を解決し、城下の人々のためにも尽くしましたが、寛永18年（1641）に惜しくも病気で亡くなってしまいました。

●光明寺（本町９）〔15－⑥〕

○中里家

中里家は宇都宮氏が城主だったころから二荒山神社の神官であった家です。宇都宮氏時代には神職のみでなく、軍役も兼ねて宇都宮城の入口を守る重要な任についていました。江戸時代に入ると軍役にはつかず、神主の中心として二荒山神社をとりしきっていました。

光明寺本堂

○星野清次郎・哲之助

宇都宮藩士の子で、幼いころから勉学を好み、兄弟そろって藩校の句読師となったほどの人物で、素直で律気なため信望、人気がありました。しかし当時の社会に対しては不満を抱き、松本定らと共に池尻隊に入り、共に若くして亡くなってしまいました。

●慈光寺（塙田１丁目）〔15－⑦〕

○杉山彖之助

宇都宮藩主杉山新五兵衛の長男で、松本定、星野清次郎らと脱藩し池尻隊に加わり、わずか22歳で命を落としました。

慈光寺本堂

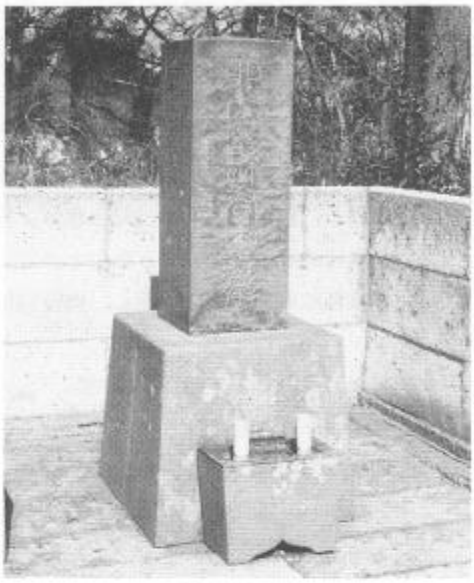
○戸田三左衛門忠厚

幕末の宇都宮藩家老であった戸田忠親の養子です。江戸の会津家で兵学を勉強し軍事奉行となり、万延元年（1860）には家老になりました。幕末の混乱期を、県六石や岡田真吾らと共に乗り切り、その功績は大きいものがあります。

○枝源五郎

源五郎は、現在の県庁前通り、釜川沿いの松屋という旅籠屋に生まれました。元文元年（1736）のことです。小さいころから義侠心に厚く、街道で困っている旅人をみつければ、馬に乗せたり松屋に無料で泊めたりしていました。宝暦６年（1756）には町の年寄衆から目明役を申

枝源五郎の墓



県六石の墓

し受けました。また安永4年（1775）には慈光寺に仁王門を建立することを思い立ち、城下の人々に寄附を募り、3年後に立派な門を建てました。源五郎はこの他にも釈迦堂町（現・馬場通り3丁目）の道路を修理する、善行者の表彰を町奉行へお願いするなど、町民のために尽くし厚い信望を得ました。天明5年（1785）には、江戸に出て侠客金看板藤九郎を抑えて、江戸侠客の第一人者となり、その名を天下にとどろかせました。江戸に来ても地元の事は忘れず、二荒山神社に手水盤を奉納したりしています。（この手水盤は戊辰戦争で破損しましたが、後に鋳直されて現在も境内にあります）慈光寺の境内にある源五郎の墓は逆修墓であり（生前に自分の墓を建てて死後の冥福を祈るもの）源五郎の性格を良くあらわしています。源五郎は文化3年（1806）に72歳で江戸で亡くなりました。

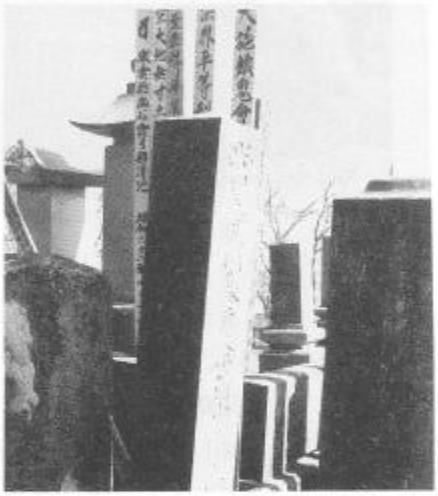
○県六石

幕末の宇都宮藩最大の危機を切り抜けるのに、多大な功績をあげた県六石（信輯）は、文政6年（1823）に宇都宮藩家老安形半兵衛の家に生まれました。二十歳にして江戸に出て大橋訥菴の思誠塾に入門し熱心に学問を修めると同時に、千葉周作のもとで剣道、清水赤城のもとで兵学を学び、かつ銚子（千葉県銚子市）大慈寺の独雄禅師から禅を教えてもらうなど文武の両面にわたって青春をつぎ込んでいました。その後10年間近く諸国を回ったり、学問を教えていたりしましたが、嘉永7年（1854）に江戸にもどり当時の江戸家老間瀬和三郎に江戸屋敷勤務を命ぜられ、安政3年（1856）には宇都宮に帰って鬼怒川左岸の開拓事業を達成したのもつかの間、坂下門外の変（文久2年・1862）で大橋訥菴が捕らわれると自らも謹慎となりましたが、

謹慎がとけると訥菴の救出に努力をしました。当時宇都宮藩は坂下門外の変に加わっていたとみなされ、危ない状態にありましたが、この時六石は山陵（天皇や皇族の墓）を修理する提案をし受け入れられ、再び藩に登用されました。山陵補修の努力が認められ、六石は中老の職を与えられだんだんと藩の中心的な位置を占めるようになりました。天狗党が宇都宮城に来たときは、根気良く対応し日光を守ることに成功しています。さらに戊辰戦争の時には藩の経理一切を処理し、難民の救済に当たるなど、幕末の宇都宮藩を陰に陽に支えた人です。明治になってからは司法省の少判事などをつとめていましたが、明治10年（1877）には主静塾という塾を開いて教育にも多大な貢献をし、明治14年（1881）に59歳で惜しまれながら亡くなりました。

●祥雲寺（東戸祭１丁目）〔15－⑧〕
○戸祭備中守高定

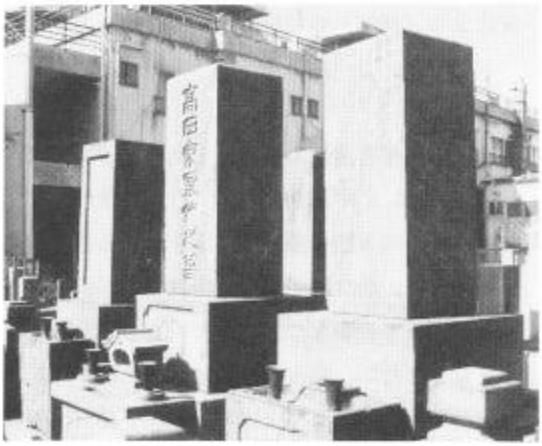
祥雲寺は、宇都宮第16代城主宇都宮正綱の弟（益子勝守の三男という説もある）である高定が、文明２年（1487）に開いたと伝えられています。戸祭氏は、もともとは宇都宮氏の重要な家来であった芳賀氏の出であるといわれ、祥雲寺の南方に戸祭城があったと伝えられています。後、宇都宮氏が滅んだときに、戸祭城は廃城となってしまいました。



戸祭高定の墓および碑

●浄鏡寺（塙田２丁目）〔15－⑨〕
○高田仏師

宇都宮を中心に活躍した江戸時代の仏師で、県北から県央にかけて多くの作品が現在でも残っています。高田氏はもともとは益子に住んでいましたが、18世紀のはじめに宇都宮の釈迦堂町（現・馬場通り３丁目付近）に移り、後に二荒山神社の明神前に移りました。墓石をみると運晴から運秋まで十代の名が連ねてあります。なお市指定文化財の瓦谷の神楽面は九代運春の作によるものです。



高田家の墓

○荒川文礼

江戸時代の中ごろの書の大家で、塾を開き子弟に書をはじめ礼儀作法を教えました。墓碑によれば「夜寝ないが数年に及び、片方の目が見えなくなってしまった…」というぐらい書を究めようとしました。そのため文礼の塾に入るのが人々の誇りとなり、「書を学ぶ者は700人ばかりである」というぐらい多くの者が教えを受けました。欲が少なく、酒を飲むことだけを唯一の楽しみとし、生涯独身で、文化2年（1805）に若くして亡くなりました。墓は山門をくぐってすぐ右手にあり、蘭英と号していたため『蘭英先生墓』と刻まれています。

荒川文礼の墓

●生福寺（仲町）〔15－⑩〕

○戸室氏（宇都宮藩御用鋳物師）

現在の馬場通り1丁目付近は、町名変更前は鉄炮町と呼ばれていました。これには次のような由来があります。寛文4年（1664）、戸室氏は藩の御用鋳物師となり、宇都宮のこの地に移り住み兵器（大筒など）を作っていたために名付けられたのです。戸室一門は兵器のみでなく、仏像・鏡・燈籠などの仏具も多く制作しており、それらはいずれもすばらしい出来ばえのものばかりです。残念なことに江戸時代の度重なる火災、戊辰戦争や第二次世界大戦の戦火、金属回収などで、貴重な文化財が失われてしまいましたが、現在では県・市・町合わせて11件が文化財に指定されて守り続けられています。

御用鋳物師看板

（吉野二丁目戸室弘氏蔵）

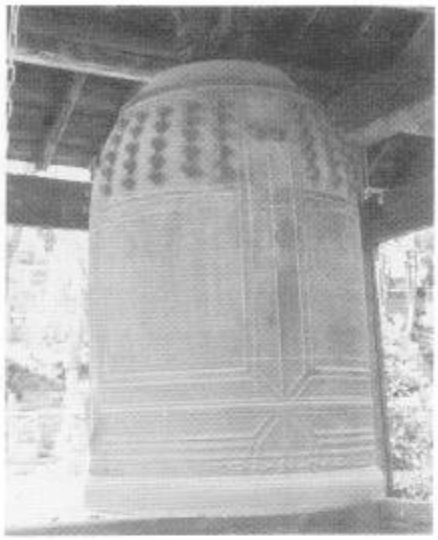
市内では善願寺の大豆三粒の金仏・大谷寺の銅鐘・銅燈籠、慈光寺の銅鐘、清巌寺の銅鐘、同慶寺の銅鐘、金剛定寺の銅造宝篋印塔が市や県の文化財に指定されています。

銅造盧舎那仏坐像（大豆三粒の金仏）

善願寺（南大通り1丁目）〔15－⑪〕

宇都宮市指定文化財

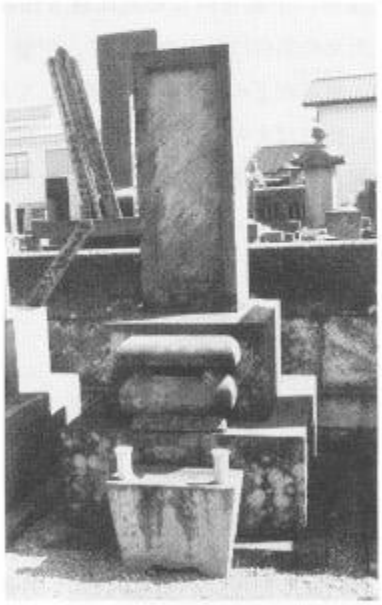
銅燈籠　大谷寺（大谷町）〔15－⑫〕
宇都宮市指定文化財



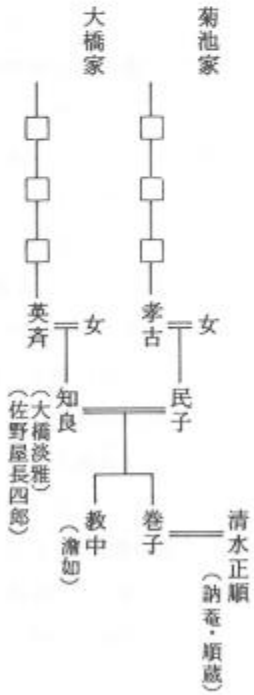
銅鐘　慈光寺（塙田１丁目）〔15－⑫〕
宇都宮市指定文化財

○菊池淡雅

江戸時代の後期、江戸で屈指の豪商となった菊池淡雅（大橋淡雅）は、寛政元年（1789）に下都賀郡粟宮（現・小山市）の医師大橋英斎の子として生まれ、諱（実名）は知良、字は温郷通称は孝兵衛といいます。淡雅は号（雅号）です。15歳で宇都宮に出て古着屋を営みましたが、当時の宇都宮の富商菊池治右衛門（考古）の養子となり、その娘民子と結婚しました。文化11年（1814）には名前を佐野屋長四郎と改め、江戸日本橋に真岡木綿を扱う問屋を開業し、十数年後には江戸で屈指の豪商となりました。



菊池淡雅の墓

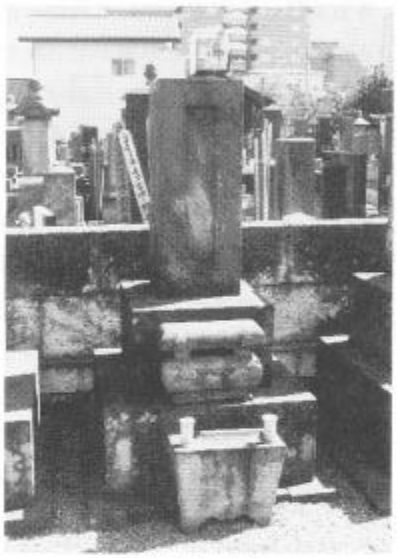


菊池家・大橋家略系図

しかし、天保の飢饉の際には私財を投げうって、貧民の救済に務めたり、奥鬼怒の日光沢温泉の開発を行ったりして人々のために尽くしました。また、当時の儒者や画家たちとも親交を深めて、彼らに多くの援助を行いました。淡雅は、当時、儒者であり尊王論者であった大橋訥菴（清水正順）を娘の婿として迎えました。また、菊池教中は淡雅の実子です。佐野屋の最盛期であった嘉永6年（1853）に、66歳で亡くなりました。

○菊池教中

文政11年（1828）に、江戸で一二を争う豪商佐野屋考兵衛（菊池淡雅）の子として生まれました。名を教中、字は介石、通称介之介・考兵衛、号を澹如といいます。姉大橋卷子の夫が大橋訥菴であり思想的に大きな影響を受けました。幕末の風雲急をつげる時節にあり、江戸日本橋の店をたたんで宇都宮に戻りました。また、この資産を用いて、鬼怒川左岸の桑島、岡本の開墾をするなど功績が大きく、宇都宮藩より士籍を与えられたほどでした。後に、義兄訥菴に感化され尊王攘夷主義に走り、文久2年（1862）の坂下門外の変では、訥菴と共に捕らえられてしまいました。（坂下門外の変の資金を出したため）獄中で病が悪化したので宇都宮藩邸で禁錮とされていましたが、まもなく亡くなってしまいました。教中は商人としてのみでなく、書画もたしなみその腕前は相当のもので、すぐれた作品が何点か残っています。墓は父淡雅の墓の隣りにあります。



菊池教中の墓

●清巌寺（大通り5丁目）〔15－⑬〕

○蓮生（宇都宮頼綱）

宇都宮氏第五代城主である頼綱は、承安元年（1171）に四代城主業綱の子として生まれました。鎌倉幕府の中にあっても重要な地位を占めていましたが、元久2年（1205）に幕府より謀叛の疑いをかけられてしまいました。頼綱は出家を決意し京都に上り、名を蓮生と改めました。この時家臣の六十人も一緒に出家をしたといわれています。その後、蓮生は嵯峨野に別荘を建てて移り住み、念仏と和歌の作に日々をすごしていました。当時蓮生の別荘の近くにある、小倉山には、「新古今和歌集」を編さんした当時一流の歌人である藤原定家がいました。蓮生と定家はやがて親交を深め、後には蓮生の娘を定家の子為家に嫁がせるまでの仲となりました。また蓮生は別荘の障子に貼るための色紙を定家に書くよう依頼していましたが、これが小倉百人一首の原形であるといわれています。正元元年（1256）蓮生は八十八という高齢で往生をとげ、京都右京区の三鈷寺に葬られました。

○芳賀高照・高継

戦国時代も終わりに近づいたころ、宇都宮氏も一族を含めて混乱期にありました。十九代城主宇都宮興綱は結城政朝とともに前城主（甥）の忠綱を退けて自ら城主になりました。この時宇都宮氏の一族であった芳賀高経は忠綱方について興綱に反旗をひるがえしました。この事があったため興綱の子である二十代城主の尚綱は、高経を捕えて処刑したため、高経の子高照は奥州白河（現・福島県白河市）を流浪した後、天文18年（1549）那須高資と共に宇都宮氏に反抗し、塩谷郡五月女坂（現・塩谷郡喜連川町）で尚綱を打ちとりました。しかし芳賀高定（もともと益子氏、芳賀氏の家督が絶えたので家を継ぐ）によって高照は殺され、高定の後は高照の弟である高継に芳賀氏をゆずりました。また高定は尚綱の子を養い21代城主広綱ともしました。一方高継は真岡の御前城（現・真岡市）を廃して、芳賀城（舞丘城）（現・真岡市台町）を築きましたが、男の子どもがいなかったため、宇都宮広綱の三男高武に相続させ、自らは飛山城〔15－⑭〕に退き余生を送りました。

宇都宮頼綱（中央）、芳賀高照（向って右）
芳賀高照（左）の墓

○山本焦逸

清巌寺の山門をくぐった右側に、国指定重要文化財の「鉄塔婆」がありますが、その手前に山本焦逸の墓があります。墓地の中とは違うので見落しやすいところです。

山本焦逸は享和2年（1802）三河（現・愛知県）に生まれました。幕府の騎士でしたが、故あって浪人し宇都宮の地に流れてきました。宇都宮では漢文・歴史等広い分野にわたって学問を教えましたが幕末の志士児島強介も焦逸の門に学びました。弘化4年（1847）壬生藩に召しかかえられましたが、嘉永2年（1849）病気のため47歳の若さで亡くなりました。墓は壬生町の常楽寺にありますが、清巌寺の墓は分骨をしたものといわれています。

山本焦逸の墓

○児島強介

強介は天保8年（1837）、大町（現・一番町付近）の小島家に生まれました。南北朝時代の備前（現・岡山県）の武将児島高徳の子孫と自ら名乗り、児島の姓を用いていました。幼いころ山本焦逸に学び、のちには水戸の藤田東湖の門に入り、尊王攘夷の志をたてました。大橋訥菴や菊池淡雅らと坂下の挙兵を計画しましたが、自らは病気のため参加することができませんでした。後、強介は幕府につかまり投獄される時「処士強介之墓」と自書して家に送り、文久2年（1862）にわずか26才で獄死しました。東京の小塚原回向院に埋葬されましたが、清巌寺に分骨をしました。なお八幡山の蒲生神社裏の墓地〔15－⑭〕に強介の碑もあります。

児島強介の墓

児島強介の碑（塙田5丁目）

●台陽寺（新町1丁目）〔15－⑮〕

○長沢楽浪

長沢楽浪は、元禄12年（1649）に儒学者長沢粋菴の次男として生まれました。名は主といい、不尤所と号しました。8才の時、父粋菴が仕えていた越後高田藩（現・新潟県）で疱瘡（天然痘）にかかり、兄の学（不恕斎）とともに盲目になってしまいました。しかし兄と共に父の下で日々勉学にはげみ、多くの書を暗記できるまでになりました。宝永元年（1710）には高田藩城主戸田忠真は宇都宮へ所替えになり、そこで楽浪は戸田氏の儒官として教育につとめる一方、数多くの書物をまとめあげました。

○堀貞道

宇都宮藩士堀内記の四男として生まれましたが、尊王攘夷の志厚く、松本定や星野清次郎らと共に宇都宮を脱藩し、池尻隊に加わりました。水戸の戦いで捕まり、長岡村（現・長岡町）でわずか21才で処刑されてしまいました。

○松本亮之允

宇都宮藩士の子として文政9年（1826）に生まれました。幼いころから学問が好きで、藤田東湖の門で学び、後には宇都宮藩の儒者としてとりたてられるまでになりました。一方尊王攘夷の志も厚く、やがては松本定や堀貞道らと共に宇都宮藩を脱藩し、池尻隊に加わりました。しかし、奮戦むなしく文久4年（1864）捕らえられて処刑されました。時に38才でした。

●報恩寺（西原1丁目）〔15－⑯〕

○戸田光形

戸田光形は幕末の宇都宮藩家老戸田光利の長男です。松本定や星野清之介らと同じように尊王攘夷の志を立て、同士37名と共に激派を結成しました。人々はこれを「天狗党」と呼んだそうです。混乱を恐れた藩は、光形を退藩に処したため、水戸天狗党の池尻隊に加わり総轄兼調練奉行の役職となりました。（この後松本定ら9人が加わる）各地で戦功をあげましたが元治元年（1864）に捕らえられ処刑されました。39才のことです。なお、墓は単独墓ではなく同族の合葬になっています。

○藤田泰堂

天保4年（1833）に宇都宮藩の家老藤田安利の長男として生まれました。綽は安義であり左京ともいいます。諸学をはじめ、弓術・馬術・兵学・剣術も体得し、若くして藩校の修道館で教鞭をふるい、かつ30才の時には藩の重職で多忙を極めることになりました。さらに文久4年（1861）には31才の若さで家老職につくことになりました。しかし、元治元年（1864）の水戸天狗党征伐の失敗から謹慎を命じられもしています。しかし、幕末の混乱期である慶応3年（1867）には再び家老職に就き宇都宮藩の危機を県勇記（六石）らと力を尽くして救いました。時代が明治と改った後は大手門内の屋敷で塾を開き多くの子弟を教育しました。その後、県庁職員を経て明治8年（1875）には郵便局詰となり、宇都宮の郵便事業の先駆として活躍しました。さらに晩年には私立校の「育英学舎」や下野英学校、作新館などで教鞭をとりました。明治39年（1905）に74才で亡くなりましたが、書画・詩歌等にもすぐれており、今日にも数多くのすぐれた作品が伝えられています。

○鮫島重雄

鮫島重雄は嘉永2年（1849）鹿児島県に生まれました。明治維新後陸軍に入隊し、西南の役（明治10・1877）にも従軍しました。後、近衛師団参謀長を経て日清戦争に従軍し武功を立てました。帰還してからは中部都督部参謀長などを経て陸軍中将に任ぜられました。日露戦争に従軍した後、明治39年（1906）に第二代の第十四師団師団長になり宇都宮の地にうつりました。さらに明治44年（1911）には大将に昇任しその任を退きました。工兵科の一大権威者であった

といいます。退任した後は宇都宮に住みつき、昭和３年（1928）に82才で亡くなりました。なお、西原町のグランドホテル（陽南荘）〔15－⑰〕は鮫島重雄の別邸だったものであり、そのすばらしい庭園は今日でも見ることができます。

報恩寺のサクラ

●田川幸橋（さいわいばし）たもと（大通り５丁目）〔15－⑱〕
○樋爪（ひつめ）氏

大通りを県庁からＪＲ宇都宮駅に向かって進み足利銀行宇都宮支店を左に折れてしばらく行くと田川にかかる幸橋があります。この橋の手前の左側に三峰山神社があり、その中に樋爪五郎季衡（すえひら）とその子経衡（つねひら）と伝えられている五輪塔の墓が２つ並んでいます。この墓には以下のような話が伝えられています。

樋爪氏の墓のある三峰山神社

源頼朝が奥州藤原氏を追討（ついとう）する際に、宇都宮大明神に戦勝を祈願（きがん）して出陣しました。そして、無事、平定することができました。

その時、藤原一族の樋爪五郎季衡（すえひら）とその子経衡（つねひら）の親子を捕虜（ほりょ）として引き連れ、二荒山神社に祈願成就（きがんじょうじゅ）のお礼に奴隷として引き渡しました。

樋爪五郎は、故郷恋しさのあまり逃げ帰ろうとして、上河原まで走ってきましたが、追手に捕われ殺害されてしまいました。その殺された所を樋爪坂といい、首は上河原（かみがわら）に、胴は今泉に葬られたといわれます。また、上河原で殺され、首は向う岸の博労（ばくろう）町に飛んだともいわれ、その首を祀（まつ）ったところを首塚稲荷といいます。また、墓の周囲に南天が植えられ、南天の葉を取れば盲目になるといい伝えられています。樋爪氏の墓は市の指定文化財となっています。

（宇都宮市教育委員会　「宇都宮の民話」より抜すい）

●伝法寺（徳次郎町）〔15－⑲〕

○妙哲

徳次郎町にある名刹、伝法寺の境内から西に沢伝いに入ってしばらく坂道を登るとやや広い平らな場所に出ます。ここは伝法寺を開いた妙哲（諱）の墓があります。安山岩の無縫塔で、八角の切石を基本としており、簡素な中にもリズミカルなバランスを感じさせます。

妙哲は、黒羽の雲巌寺を開いた仏国国師の弟子であり、伝法寺の外にも塩原町妙雲寺、宇都宮市竹下町の同慶寺〔15－⑳〕も開き、同慶寺には妙哲の墓が歴代和尚の中央にあります。伝法寺の墓石の下には、死後3年目の観応2年（1351）に石塔が建立されたと刻んであります。

妙哲の墓（伝法寺）

妙哲の墓（同慶寺）

●徳次郎町上田中堀の内〔15－㉑〕

○亀井六郎の墓

源義経の重要な家来であった亀井六郎は、義経が都落ちし、奥州（東北地方）へ落ちのびる時に同行したといわれています。宇都宮の地にも義経や静御前そして家来の亀井六郎に関する伝説の地があります。徳次郎町にある晃陽中学校の西側を南北に走る旧日光街道（高速道路の西側）に面したところに亀井六郎の墓と伝えられる五輪塔が二基祠の中に納められています。地元ではこの石塔を動かすとたたりがあるとも伝えられています。

亀井六郎の墓

●同慶寺〔15－㉒〕

○芳賀氏（清原氏）

同慶寺の本堂と庫裡の間の道路をぬけると一段高くなったところに、小さな五輪塔が並んでいるのがわかります。これが市指定の史跡になっている芳賀氏の墓で、全部で14基あります。芳賀氏の同族である清原氏は、永仁年間（1293～1298）に飛山城を築き、宇都宮氏の重要な家臣として活躍をしました。その清原氏の菩提寺がこの同慶寺だったので、累代の墓が残っているのです。なお、どれが誰の墓石かは不明です。

芳賀氏（清原氏）累代の墓

●成願寺〔15－㉓〕

○安達藤九郎盛長

盛長は保延3年（1135）、小野田三郎兼広の子として生まれました。源頼朝が挙兵した時から頼朝に従い頼朝が幕府を開いた後も重臣として信望あついものがあり、幕府の政治に力を及ぼしました。後に、出家して蓮西という僧になりました。一説によると蓮西となった後宇都宮の三代朝綱をたずねて刑部に住んでおり、正治2年（1200）に亡くなったといいます。しかし、日光の浄土院にも盛長の墓があるそうです。

安達藤九郎盛長の墓

●御田長島町高尾神社〔15－㉔〕

○源之丞（籾摺騒動処刑者）

江戸時代の中ごろ、松平忠恕が城主であったときの話です。（宝暦12〔1762〕～安永3〔1775〕）城主の忠恕は、苦しい藩の財政を何とかしようとして、明和元年（1764）から年貢の負担を重くしようとしました。農民たちは何度も年貢を上げないよう役人や出入りの商人に頼みましたが、聞き入れてもらえないためとうとう一揆を起こすことになりました。9月12日の夜から15日にかけて城下をさんざんにあばれまわりました。町役人のみでは手がつけられないので、

藩では若手で力のある足軽・徒士を選びようやく鎮圧できたほどでした。その後、この一揆（籾摺騒動）の主謀者が捕えられ、長島村庄屋の源之丞（げんのじょう）をはじめとする何人かが処刑されました（文献により処刑された者が異なります）。源之丞の墓は子孫である鈴木庄一郎宅の中にありますが、御田長島村の高尾神社のわきにも供養碑といわれている大谷石の六角柱の石碑が残っています。なお、これら籾摺騒動で処刑されたと伝えられる人たちは喜国（きこく）神社や喜国大権現として今日でも厚く祀られています。

- 長島村庄屋　　源之丞　　御田長島町高尾神社境内喜国神社
- 上平出村庄屋後見　亀右衛門　平出町平出神社内喜国神社〔15－㉕〕
- 今泉新田庄屋　　六兵衛　　今泉新町八幡宮境内喜国大権現〔15－㉖〕

（籾摺騒動の年号の資料は、「宇都宮市史」第６巻によりました。）

源之丞供養の碑

御田長島町喜国神社

平出町喜国神社

今泉新町喜国大権現（右はじの祀）

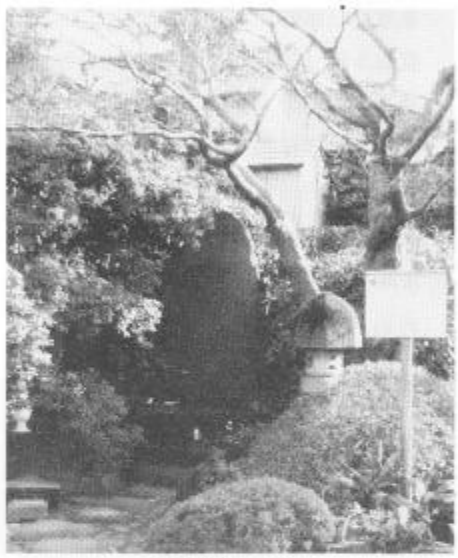
（右から２番目と、左はじが両方とも喜国神社）

16　さまざまな碑

碑は石に文字やさまざまな形を刻んで建てたもので、非常に多くの種類があります。石で作ったものは他の材料のものに比べて永く残るため、歴史を知る上で貴重な情報を私たちに与えてくれます。本市の場合は、特産である大谷石などの凝灰岩を用いたものを多く見受けますが、これらの石は刻みやすい反面、長年の風雨で侵食されて文字の判読ができなくなってしまうという問題も残ります。ここでは数多い市内の碑の中からいくつかを紹介します。

●靄厓山人碑（材木町６　観専寺）〔16－①〕

観専寺の境内、庫裏の向かい側の植え込みの中に、北を向いて建っている碑が靄厓山人の碑です。この碑は、渡辺崋山や立原杏所と並び称せられる、本県の誇るべき大南画家、高久靄厓の記念碑です。靄厓を絵の師とした観専寺住職黙蕾上人が安政３年（1856）４月に建てたもので、靄厓の江戸における後援者大橋淡雅の娘婿である大橋訥菴が文を作り、淡雅の息子菊池教中の書によるものです。碑文には靄厓の人物像、交友・業績を明らかにし、かつ当時の宇都宮の文化水準の高さも物語っている貴重なものです。この碑は昭和41年に、宇都宮市の考古資料に指定されました。



靄厓山人の碑

●吉良八郎碑（桑島町401）〔16－②〕

吉良八郎は文化10年（1872）に茂木で生まれました。24才の時に二宮尊徳の門下に入り、同居して開拓や土木工事の教えを受け、各地の開墾・開発に尽力しました。45才の時には石那田堰〔16－③〕を完成させ徳次郎用水を開通させたりしました。幕末には菊池教中が着手した鬼怒川沿岸の岡本、桑島の約226haの開拓を指導しました。また、明治３年（1870）の鬼怒川洪水後の田畑復興にも尽くし、明治５年に亡くなりました。桑島町内にある桑島町公民館のわきに碑が建っています。この碑も靄厓山人碑同様市の文化財の指定を受けています。

吉良八郎の碑

●芭蕉句碑

元禄2年（1689）に、奥の細道の旅に出た芭蕉は、本県内にもその足跡を多く残しました。そのためか、県内には数多くの芭蕉句碑が残されています。本市には今までのところ4つのものが確認されています。

○能延寺（宮町2）〔16－④〕

寛政5年（1793）芭蕉の100回忌建立

○慈光寺（塙田1丁目）〔16－⑤〕

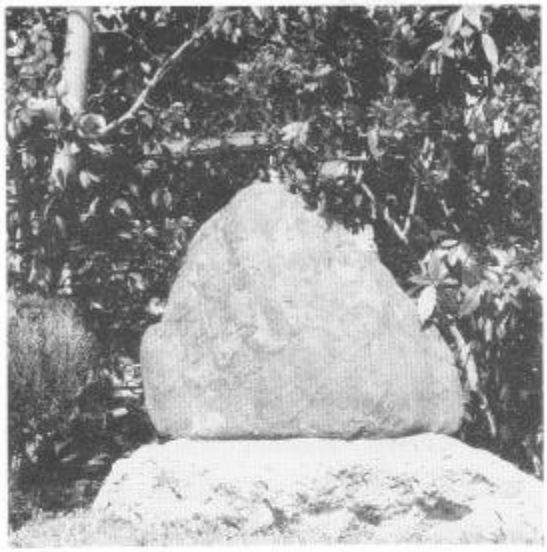
天保10年（1839）芭蕉の150回忌建立

○城山西小内（古賀志町）〔16－⑥〕

安政4年（1857）建立

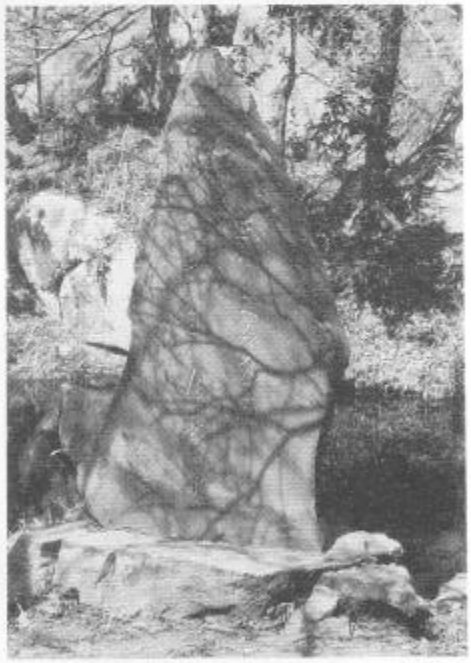
○宝蔵寺（大通り4丁目）〔16－⑦〕

大正7年（1918）建立



能延寺の芭蕉句碑

「いかめしき　音や霰の　桧木笠」



慈光寺の芭蕉句碑

「しばらくは　花のうえなる　月夜かな」

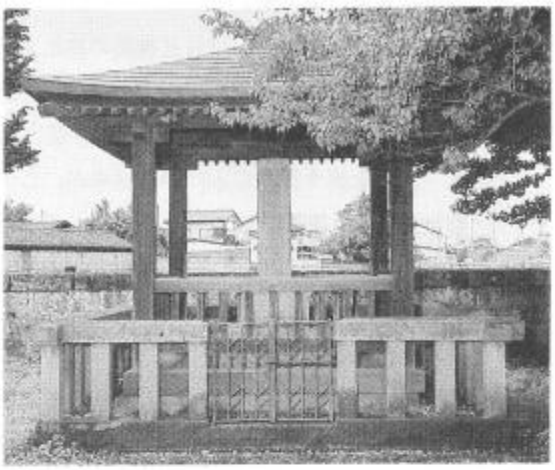
宝蔵寺の芭蕉句碑

「面白し　雪にやならん　冬の雨」

なお、城山西小学校内の句碑は「語られぬ　湯殿にぬらす　袂かな」と刻まれています。

●蒲生君平勅旌の碑（花房３丁目）

旧日光街道を不動前側から北上して、東武宇都宮線のガードをくぐった右側に蒲生君平勅旌の碑があります。〔16－⑧〕この碑は明治政府が宇都宮藩に、君平の遺功追賞を命じたため、当時の藩知事戸田忠友が明治２年（1869）に建てたものです。なお、この地は宇都宮市の史跡に指定されています。



蒲生君平勅旌碑

●古棺記（塙田５丁目）

県庁の裏側の小高い丘に雷神社が鎮座していますが、この雷神社への階段の途中左側に古棺記があります。〔16－⑨〕この碑は明治17年（1884）の県庁建設の際に、古墳時代の石棺が出土しました。その経過を碑文にあらわし、明治26年(1893)に建てられたものです。

古棺記

●日下開山初代横綱力士明石志賀之助の碑（塙田５丁目）

八幡山公園の南にある蒲生神社の前には、伝説上の人物ともいわれる、初代横綱明石志賀之助を顕彰する碑があります。〔16－⑩〕　志賀之助は、宇都宮藩の藩士の子といわれているため、明治33年（1900）に第12代横綱陣幕久四郎によって、御本丸公園内に建てられました。それが後に現在の蒲生神社前に移されたのです。

明石志賀之助の碑

● 大砲発射の碑（石井町）

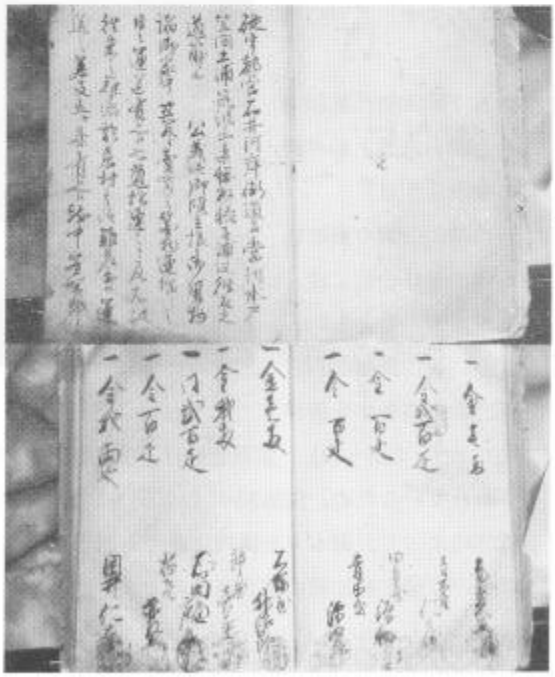
石井町の石井小学校南、三日月神社の前にある田崎幸夫氏宅の東に、他の碑と並んでいます。〔16－⑪〕これは、江戸時代の終わりごろ、宇都宮藩の砲術士（大砲を扱う役割の人）加藤義重が、この地で大砲を発射し、36町（約4㎞）も砲弾が飛んだことを記念して、天明2年（1782）に建てたものです。

大砲発射碑

● 道橋修覆供養碑（石井町）

石井町を通る久部街道を鬼怒川に向かって行くと新4号国道と交差しますが、その少し手前の左側の吉沢久夫氏宅の入口にこの碑があります。〔16－⑫〕久部街道は江戸時代の後期には鬼怒川の石井河岸と宇都宮城下をつなぐ輸送路としても、茨城県方面への交通路としても重要でした。しかし、道が悪く橋もあちらこちらで壊れており、道や橋の修復は是非とも必要でした。そこで、石井の人々は宇都宮藩の許可を得て、地元や宇都宮城下はもちろんのこと、遠くは真岡の方までも出かけて行き、寄付を集めて修理を行いました。その工事の安全を祈って文政3年（1820）に建てられたものです。なお、吉沢久夫氏宅には寄付者の名を連ねた文書も残っています。

道橋修覆供養碑



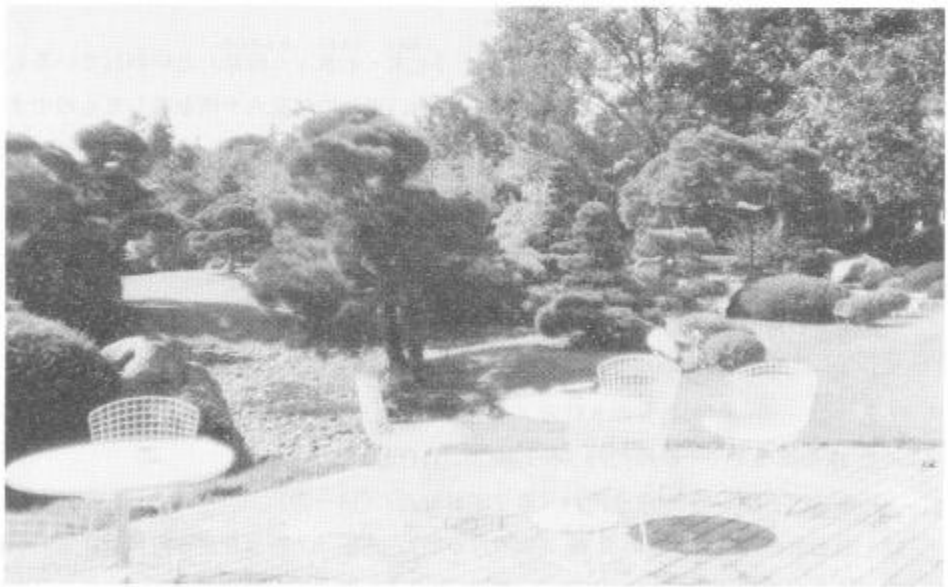
寄付関係文書

○橋供粮（養）碑（新里町）

新里街道を北上し、国道293号の交差点をすぎて100m程行き、左折してしばらく行きますと、姿川にかかる神郷橋という橋があります。この橋の手前に橋供粮（養）の碑が建っています。〔16－⑬〕現在では立派な橋になっていますが、少し前までは大谷石のタイコ橋だったそうです。一昔前までの橋は簡単なつくりのものが多く、洪水の際にはよく流されたりしました。また、工事が困難な場合も多く、そのために水神（かしん）様（水の神さま）に祈ったり供え物をしたりして、橋の安全や工事の安全を祈りました。この碑は年代が不明ではありますが、橋の工事に際して建てられ、今日まで橋の安全を見守っているものと考えられます。

橋供粮碑（向って右側、左側は十九夜塔）

17　庭園の跡

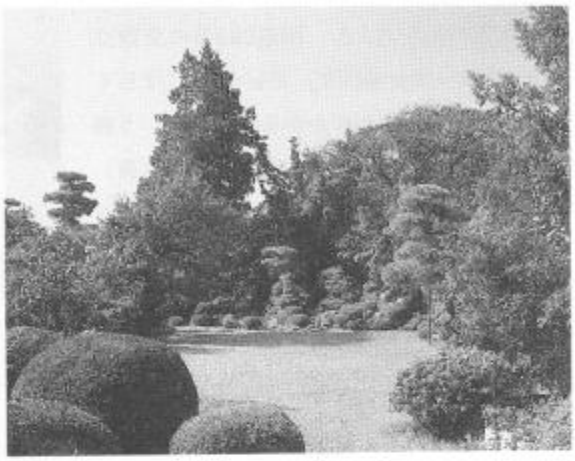


グランドホテルの庭園

●宇都宮藩主戸田氏別邸御山屋敷

西原町にあるグランドホテル（陽南荘）〔17－①〕には大変に美しい庭園がありますが、この庭園には以下の様な歴史があります。

ここは江戸時代の後期に宇都宮藩の藩主であった戸田氏の別邸御山屋敷があったところです。当初は5840坪（約２万㎡）でしたが、享保16年（1731）に城主忠真はさらに3210坪（約１万㎡）を拡張しました。大変に立派な庭園として当時から有名でしたが、一般の人々は入ることはできませんでした。しかし、庭園の中に稲荷様と八幡様の二つの社があったため、毎年２月の初午の時にのみ中に入ることが許されたそうです。その後、明治41年（1908）に宇都宮に陸軍第14師団が設置されると、師団長であった陸軍中将鮫島重雄は戸田氏別邸御山屋敷を自ら庭園として整備しました。昭和３年（1928）鮫島重雄が亡くなった後は一般の人々にも開放され、市内の名所となりました。その後、現在のグランドホテルに至っています。



グランドホテルの庭園

18　名木・名水

江戸時代には、城下町宇都宮の名所として『七木・七水・八河原』といわれているものがありました。これは七本の名木、七ケ所の井戸や池、田川の河原八ケ所を指したものです。

（『七木・七水・八河原』には様々な説がありますが「宇都宮市六十周年誌」によりました）

○七木（現在では残っているものはありません）

・明神の塩釜桜……二荒山神社境内（馬場通り１丁目）〔18－①〕
・普賢堂の桜…… 東勝寺の普賢堂（馬場通り３丁目）〔18－②〕
・日光堂の薄墨桜… 二荒山神社下の宮（馬場通り３丁目）〔18－③〕
・化桜……宇都宮城中門の中（中央５丁目付近）〔18－④〕
・亀井榎…… 亀井の水付近（下河原町付近）〔18－⑤〕
・松峰のケヤキ……松峰門内（松ケ峰２丁目付近）〔18－⑥〕
・地蔵堂門の藤…… 地蔵堂門内（旭２丁目付近）〔18－⑦〕

以上の七木の外にも、二の丸榎（場所は不明）、角榎一ノ筋（花房本町付近？）、角榎宿郷（南大通り１丁目付近？）、宮山桜（不明）、池上通り榎（池上T字路付近？）、井泉水門の榎（不明）などの説もありますが、すべて現在では残っていません。

○七水

・池の井……宇都宮城大手門わき（江野町付近）〔18－⑧〕残っていません。
・馬場の井……広馬場（馬場通り２丁目付近）〔18－⑨〕残っていません。
・亀井の水……常念寺前（下河原町）〔18－⑩〕形だけ残っていますが水は出ていません。
・明神の井……二荒山神社境内（馬場通り１丁目）〔18－⑪〕きれいな水が今も出ています。
・滝の井……滝尾神社（滝の権現）（滝谷町）〔18－⑫〕人工の池になっています。
・東石町の井…石町の東通り（三番町）〔18－⑬〕残っていません。
・天女水……慈光寺境内（塙田１丁目）〔18－⑭〕庫裏の裏側に池が残っています。

以上の外に嘶の清水（南新町口）を加えるものもあります。

明神の井

天女水

○八河原

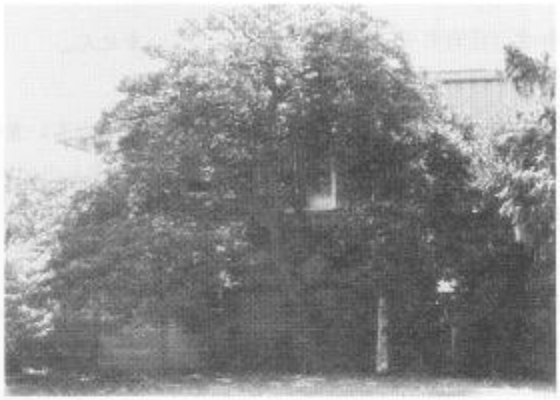
八河原は、上河原、中河原、下河原、北河原、七里河原、最上河原、仙阿弥河原、生霊河原を指すといわれていますが、別に神事（地神）河原を加えるものもあります。すべて田川に沿った河原ですが、昔のおもかげはほとんど残されておりません。

○名木

七木以外にも、市指定天然記念物、宇都宮城の土塁の上にある旭町の大いちょう（中央１丁目）〔18－⑮〕、旅人の目印になったという県指定の新町の大ケヤキ（新町１丁目）〔18－⑯〕などが有名です。

旭町の大いちょう

新町の大ケヤキ



英巌寺の犬つげ

智賀都神社のケヤキ

外には、戸田氏の菩提寺であった英巌寺境内〔18－⑰〕にある大きな犬つげなどは江戸時代の宇都宮を語る重要な証人ともいえるでしょう。また、郊外では徳次郎町の智賀都神社〔18－⑱〕の大ケヤキや、西刑部町の成願寺〔18－⑲〕の大いちょう、上桑島町の金剛定寺〔18－⑲〕のカヤなどが有名です。

○名水

●鏡ケ池（馬場通り２丁目）

西武百貨店南側道路上の鏡ケ池の碑

鏡ケ池碑

西武百貨店の南口の脇に、鏡ケ池について記された碑があります。〔18－⑳〕古くはこのあたり一帯が大きな池であったそうですが、だんだんとせばめられてしまい、今日ではその姿を見ることは全くできなくなってしまいました。宇都宮の古名である池の辺郷とよばれたのはこの池に由来するという説もあるくらいです。また、この池から古い鏡が見つかりそれを二荒山神社に奉納したので鏡ケ池と称したと一説には伝えられています。

郊外には、篠井町の地名の由来となった篠井の池（篠井町607、大島宅）〔18－㉑〕が篠井町にあります。この池は弘法大師がのどを潤したという伝説から弁天池とよばれ、また、弘法大師が篠の中にみつけたわき水なので、篠井の地名がおこったといわれています。石那田町岡坪の八坂神社の下にはこんこんと水が沸いている池があります。〔18－㉒〕この池は地元の人の目の病気を直したわき水といわれ、現在でも八坂神社の祭りに池の清掃がされています。日光街道（国道119号）を北上し野沢町の亀田宅の庭の東には鏡ケ池と呼ばれている小さな池があります。この池には静御前が鏡を捨てたとの伝説があるところです。また、亀田宅の庭には静御前の杖をさしたところ芽吹いたといわれる静桜（御前桜）もあります。宇都宮で一番高い山である古賀志町の古賀志山は、昔から修験と呼ばれる僧が修業した山でした。この中腹に滝神社がありますが、ここには不動の滝と呼ばれる滝が落ちています。修験者達の修業の一つである滝うたれの滝だったそうです。

篠井町篠井の池

野沢町　鏡ケ池

石那田町　八坂神社のわき水

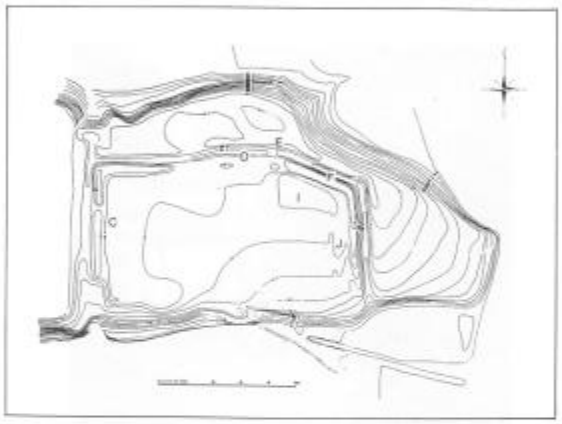
古賀志山　滝神社と不動の滝

19　城の跡

私たちは一般に"城"と聞くと、姫路城や名古屋城のようなりっぱな天守閣や石垣を持った城を思いうかべます。しかし、天守閣を持つ城は近世に入って発達したもので、それ以前は自然の山や崖地を利用した"山城"と呼ばれるものです。もともとは地方に居住する武士が自分の家を守るために、回りに土を掘った堀や土をあげた土塁を廻らしただけの簡単なものでした。それが戦国の世となると山や崖を利用した戦闘用の広い城が作られてきますが、防御の基本は堀と土塁にすぎませんでした。宇都宮市内には、近世の整備された城は宇都宮城のみであり、外はすべて山城の範ちゅうに入ります。その数は小さいものまで含めると、現在までのところ30ケ所程確認できています。以下市内の主な城を紹介していきます。

●石那田城

日光街道（国道119号）を北上し、石那田町に入ってから少し行きますと、文挟へ抜ける道のY字路になりますが、そこを文挟方面へ左へ曲がり日光自動車道のガードをくぐった右手の尾根の方に石那田城があります。〔19－①〕東西約100m、南北約60mの大きさがあり、土塁や堀の残りも比較的良い方です。北に赤堀川、南に田川が流れ天然の地形を実にうまく利用しています。なお、この城は、天正期（1573～1592）における宇都宮氏の家臣であった小池内蔵助の城といわれています。



石那田城実測図（「栃木県の中世城館跡」より）

●徳次郎城

徳次郎城（西側より臨む）

同城内南北にのびる堀底の道

日光街道と国道293号との交差点の南東側、田川が作った急な崖に面したところに徳次郎城があります。〔19－②〕東西160m、南北315mもあり、城の中には土塁や堀、井戸跡と思われるものなど良く残っており、築城当時の様子を想像することができます。東端は田川の急な崖で自然の要塞となっており、田川へ下りる道もあります。この城は戦国時代、宇都宮国綱の家臣、新田徳次郎昌言の居城であり、宇都宮氏が滅びると共にこの城が滅びたという伝承があります。

● 藤本館（高橋城）

国本西小学校の東側広がる水田のさらに東側、やや小高くなった林の中に藤本館があります。〔19－③〕現在は高橋氏の住居になっていますが、現在でも南・北・東側に堀と土塁が廻っているようすがわかります。城がいつ築かれたのか明確ではありませんが、室町時代ではないかと推定され、庭には永和2年（1376）の北朝の銘にある宝篋印塔があり、城の古さを示しています。高橋家はもともと源頼朝の重臣であり、三河（現・愛知県東部）地方を治めていましたが、源氏滅亡と共に三河の地を離れて宇都宮氏の支配下に入ったとの伝承があります。また、高橋氏宅の南には高橋家の墓地がありますが、ここはもともと歓喜院滝明寺という寺で廃寺になったまま今日に至っています。

藤本館堀跡（南側の堀にかかる橋より西側を望む）

藤本館内の宝篋印塔

● 下横倉城

下横倉町の山の西斜面にある城で宇都宮インターチェンジのほぼ東に位置します。〔19－④〕西側を田川が流れ、標高200mの頂上に東西40m、南北50mの広さの中に郭（区切り）が2つあります。井戸跡・堀跡・土塁跡も良く残っ

下横倉城遠景

ており、廃城当時の様子をよくとどめています。ここは宇都宮氏の家臣横倉氏の居城と伝えられています。

●堀の内城（徳次郎町）

晃陽中学校の西側、旧日光街道に沿ったところに堀の内城の跡があります。〔19－⑤〕宇都宮氏の家臣の城（館）といわれ、宇都宮氏滅亡と共に廃城になったと伝えられています。現在では土塁や堀などすべてなくなり、〝堀の内〟という地名のみが残っています。

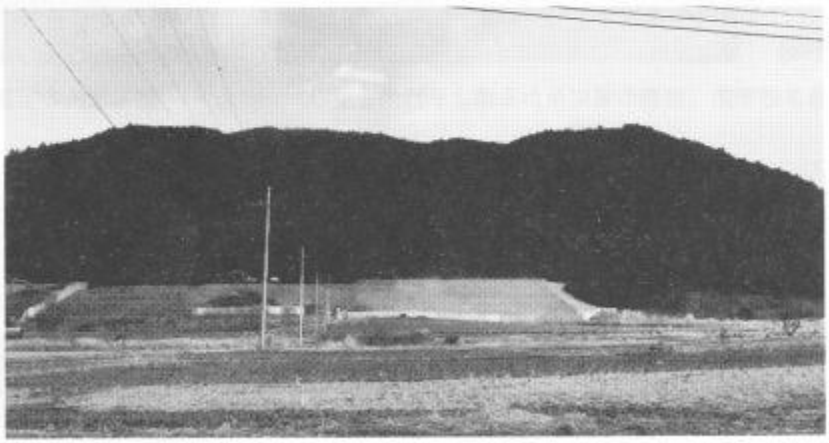
堀の内城跡

●岡平城（大網町）

国道119号（日光街道）と国道293号との交差点の北東、大峯山の南斜面の麓にあります。〔19－⑥〕宇都宮氏の家臣であった新田義盛の城と伝えられており、近くにある比沙門神社は義盛の守り神ともいわれています。

岡平城遠景

●多気城



多気城遠景（南西より望む）

宇都宮市の西部に位置する多気山〔19－⑦〕は、多気不動尊やハイキングのコースとして有名ですが、この山全体が城として機能していたという事はあまり知られていないようです。御殿平とよばれる山頂の平坦地を本丸とし四方にわたって郭がつくられています。独立した山全体が城として作られたものとしては、全国的にみてもすぐれたもののひとつです。この多気城は、康平6年（1063）に宇都宮氏の祖である宇都宮宗円が築いたといいますが、確かなことは分かりません。また、文明4年（1472）に『宇都宮家臣記』という本に、多気兵庫守が住んだという記録がありますが、宇都宮宗円の話と同様に確信のもてないものです。ともかく戦国時代末期において、後北條氏の侵入を恐れた宇都宮氏がこの時期に大改修したと考えられます。平地にある宇都宮城では防御しきれないと考えたためです。特に、宇都宮国綱は宇都宮城を重臣の玉生美濃守にまかせて、自らは多気城に本居地を備えたといわれています。そのため多気山の南側には「塙田・下河原・清願寺・扇町」といった宇都宮城下と同じような小字名が現在も残っています。天正14年（1586）に後北條氏が再度下野に侵入した時は東側で戦闘まで行われています。なお、この多気城は、慶長2年（1597）に宇都宮国綱が豊臣秀吉により滅亡させられた時に廃城となりました。

●中城

駒生町にある能満寺の西側が中城の跡〔19－⑧〕です。姿川と鎧川の間に位置し、北の多気城と南の北原城（駒生町北原〔19－⑨〕、城の跡はほとんど残っていません）の中間に位置していたため中城という名がついたようです。一部土塁が残っているほかはすべて田や畑になっています。

●戸祭城

戸祭本町、昭和小学校の西側あたりが戸祭城の跡といわれていますが〔19－⑩〕、現在堀や土塁などの跡は一切残っていません。戸祭城は芳賀氏から出た戸祭氏の居城で宇都宮氏について戦闘の際などに名を残しています。近くにある祥雲寺は文明2年（1470）に戸祭備中守高定が創建したと伝えられています。

●平出城

平出城は平出町を通る国道4号バイパスの東側で、広琳寺の南にありました。〔19－⑪〕50m四方程度の館と考えられ、一部に堀や土塁が残っていますが、ほとんどは田や畑にかわってしまいました。伝承によれば、宇都宮氏の家臣であった鈴木八郎重行が築いたとも、平出氏の居城ともいわれています。

●淡路城

刈沼町の西端、満美穴町にある鵜鵜神社がある崖の上に淡路城の跡があります。〔19－⑫〕本丸と思われるところは民家になっていますが、堀や土塁の跡がわずかに残っています。この城は宇都宮家の家臣である直井淡路守の居城であると伝えられているところから、淡路城と呼ばれています。

淡路城のわずかに残る堀の跡

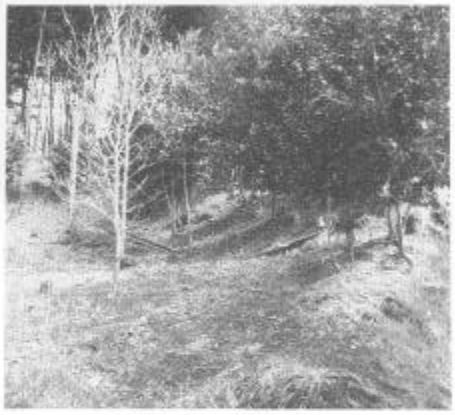
●飛山城

飛山城航空写真

竹下町字飛山、清原公民館の西、鬼怒川に面した急な崖の上に飛山城があります。〔19－⑬〕東西330m、南北450m、約13ｈａという広大な面積を持ち、深さ6.5m、幅17mの大きな堀や土塁、土橋（土で作った橋で、堀を渡る時に用いる）、櫓（物見）跡などが、400年を経た今日まで実によく残っているところから、昭和52年に国指定の史跡になりました。飛山城は永仁年間（1293～1299）に、宇都宮氏の重臣であった芳賀高俊によって作られたといわれています。一方飛山城の東方に芳賀氏の菩提寺であった同慶寺がありますが、この寺にも堀や土塁が残って

いるのです。これは同慶寺が飛山城の支城として役割を果していたとか、芳賀氏の居城が同慶寺であり、戦闘の際に飛山城にこもったなどと考えられています。南北朝時代には北朝についた宇都宮氏の拠点となっていたため、南朝の攻撃の対象とさえなっています。宇都宮氏が活躍したのはこの芳賀氏（のちに清原氏となる）と益子氏（紀氏）の力に負うところが大きいといわれています。慶長2年（1597）宇都宮氏の所領（領地のこと）が豊臣秀吉の命により没収させられ、宇都宮氏が滅亡するとともに飛山城も廃城となってしまいました。

同慶寺内の堀跡



同慶寺内の土塁の跡

●石井城

石井城は久部街道と新国道4号との交差点の北東にありました。〔19－⑭〕現在でも堀の内という小字が残っています。城の跡はほとんどが水田になってしまいましたが、土塁が一部だけ残っています。この城は、宇都宮氏の家臣であった横田五郎業澄が築いたものであるといわれており、石井の地を支配したので後に石井氏を名乗ったとも伝えられています。

石井城の土塁の跡

●犬飼城（根古谷城）

上欠町の聖山公園のある丘陵の南端に犬飼城の跡があります。〔19－⑮〕姿川と武子川にはさまれた地点にあり、急な崖で守られています。堀や土塁の跡は非常に良く残っており、築城当時の様子を現在にまで伝えています。さらに井戸や櫓の跡もあり、市内でも特に保存の良い城となっています。なお、この城についての伝承はほとんどありませんが、城のすぐ下にある

蓑輪氏宅は犬飼城の家老の一人であったといわれています。

犬飼城の堀の跡

犬飼城の土塁の跡

●江曽島城（瓢箪城）

東武線江曽島駅の東側に江曽島のロータリーがありますが、ここからさらに東へ向かい坂を下ったところに江曽島城の跡があります。〔19－⑯〕この城は、未確認ですが全長230mの大前方後円墳（雷電山古墳）の上に築かれた城で、古墳の周溝をそのまま堀に用いたともいわれています。盛ってあった土は何度も削られてしまったため、ほとんど失われてしまいましたが、東側は水田や道の型が堀の形を残しています。ここは宇都宮氏の家臣であった江曽島氏の城であったと伝えられています。

江曽島城東側の堀の跡

●東川田城

上三川街道を市街地から南下し、東北新幹線のガードをくぐって少し行くと「大城内」というバス停があります。ここを東に入ったところが東川田城の跡です。〔19－⑰〕現在では土塁の跡がほんの一部となってしまいましたが、以前は土塁のほか堀などの跡ももっと残っていたといいます。

東川田城跡遠景（東側より）

●猿山城

砂田街道を南下し、横川中学校の交差点を左折して1㎞ぐらい行った平地林が猿山城の跡です。〔19－⑱〕城の東側は江川に接し、北側は道の北の農業倉庫までであり、約300m四方程度の規模であると考えられます。堀や土塁の跡は、西側や南側に良く残っており、城の中にもいくつかの堀や土塁の跡を確認することができます。また、この城の中には、前方後円墳1基、円墳10基ほどがあり、城を作る時にも破壊されなかったものです。『宇都宮興廃記』に、結城政朝が明応9年（1500）に、宇都宮忠綱と猿山で合戦したという記載がありますが、この城が当時あったかどうか、また、この城で戦いが繰り広げられたのかは、明らかではありません。

猿山城遠景（西側より）

猿山城の堀の跡

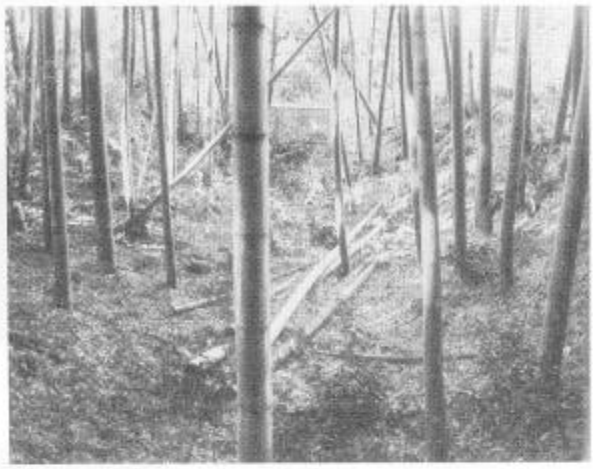
●桑島城

桑島城の跡は、瑞穂野北小の東側、鬼怒川の西岸にあります。〔19－⑲〕現在の鬼怒川の本流は東に寄っていますが、昔は西側の堤防近くを流れており、それに接して城がありました。現在土塁の跡が一部残っているだけで、他はほとんど消失してしまいましたが、中城、政所、東の門、西の門、南の門などの小字名が残されており、当時の城の広さを推測することもできます。

桑島城の跡（北西から）

●樋口城

幕田町を通る栃木街道の姿川の淀橋から東に500m程行った台地のへりに樋口城の跡があります。〔19－⑳〕現在では堀や土塁の跡がほんのわずか残っているだけで他は消失してしまいましたが、全体の規模は東西に50m、南北に70m程であると思われます。なお、この地には御城や中城といった小字名が伝えられています。また、貞応元年（1222）に樋口主計頭が城主であったという伝承もあります。



樋口城の堀の跡

●横田城（長州〈寸〉館）

兵庫塚街道と安塚街道の交差点の北東、住宅地に囲まれた平地林に横田城の跡があります。〔19－㉑〕明治時代の初期には、東西270m、南北180mの規模で残っていたといいますが、現在では回りが住宅地として開発されてしまったため面積は小さくなり、堀や土塁もごくわずかしか残っていません。

横田城の堀の跡

●刑部城

辰街道を南下し、上三川町に入る手前に堀の内のバス停がありますが、ここの近くの刑部薫氏宅を中心にして刑部城の跡があります。〔19－㉒〕東西95m、南北42m程の規模があり、土塁や堀の跡も比較的良く残っています。そのため、昭和32年に市の史跡

刑部城の跡

の指定を受けました。伝承では、宇都宮氏の家臣横田氏が当地に移り住み、城を築いて刑部氏と名乗ったといわれています。

●宇都宮城

宇都宮城航空写真（垂直）

関東の七名城の一つとして名を馳せた宇都宮城の築城に関しては、諸説があり、あまりはっきりしていません。ある伝承では、平安時代の中ごろの天慶3年（940）に平将門の乱をおさめた藤原秀郷（俵藤太）により築かれたといわれていますが推測の域を出ていません。また、康平6年（1062）に、宇都宮氏の祖である藤原宗円が築いたともいわれており、この説が一般的ではありますが、やはり確信があるわけではありません。ともかく鎌倉時代初期以降、文武両面で活躍した宇都宮氏の居城（館）から出発したようです。当初はあまり規模も大きくなく200m四方であったと考えられています。後に宇都宮氏の勢力拡大や度重なる戦ごとに城が改修・拡張されていき、室町時代には城としての形態を整えました。宇都宮氏が宇都宮の地を離れた後、

御本丸公園に残る土塁の跡と戸田忠恕公の碑

江戸時代の終わりまで、代々の城主が宇都宮城に住んでいました。特に元和5年（1619）に城主となった本多正純は、わずか2年程の期間で城の大改築、城下町割りの変更等の大工事を行い、本格的な近世城郭としての姿を作りあげました。正純による町割りは現在も市街地の随所で見ることができます。宇都宮城には本多正純のいた元和年間（1615～1623）までは、天守閣があったと伝えられています。その後享保年間（1716～1735）には、本丸の広さ、4058坪余（約1万3千㎡）もあり、その中に385坪余（約1270㎡）の御殿があったと伝えられています。しかし、戸田氏が再び宇都宮城主となったころ（明和7年・1770）には空地となり、藩兵（宇都宮藩の兵士）の教練に用いており、城主御殿は二の丸に移っていました。しかし、天保14年（1843）の将軍の日光社参の際には、本丸に将軍宿泊の新居が建築されたこともありました。御本丸をとりかこむようにしてあった土塁の口には、東に3ケ所、西に2ケ所の櫓があり、特に北西角の清明台櫓が天守閣のかわりにされていたようです。これらの櫓は慶応4年（1868）の戊辰戦争の時火にあいすべて焼け落ちてしまいました。明治時代に入ってからは、陸軍の第四分営の宇都宮分営が駐屯したりしましたが、だんだんと堀は埋められ、土塁はくずされてしまい、御本丸の一部のみが公園となって今日に至っています。

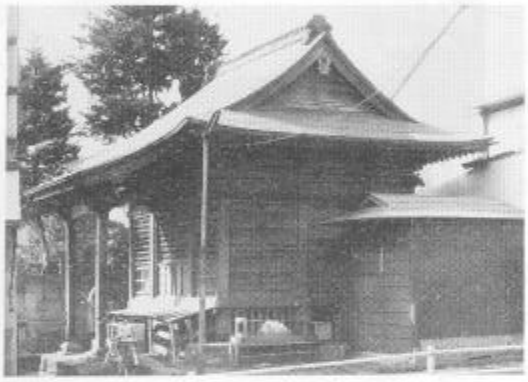
宇都宮城航空写真（東から望む）

20　その他の旧跡

今まで、市内のさまざまな旧跡をみてまいりましたが、ここでは前の項目に入らない旧跡を紹介していきます。

●アカン堂（丹堂薬師）（材木町５）

大通りを西に向かい、裁判所を少しすぎた道の左側にあるお堂がアカン堂です。〔20－①〕江戸時代に書かれた宇都宮市の案内書「宇陽略記」（高橋節子氏蔵）の中にも『丹堂薬師、安養寺ノ北に有、是ヨリ大谷観音ヘノ道有』と記してあり、当時から有名でかつ信仰を集めていたと思われます。全体が朱塗りのためアカン堂と名付けられたようで、随所にすばらしい彫刻がほどこされています。



アカン堂

アカン堂木鼻部分の彫刻

●聖天サマ（泉蔵院跡）（西２丁目）

聖天サマへの入口

聖天サマの小祠（ほこら）

材木町通りにある西一郵便局の南に西校入口のバス停があります。〔20－②〕ここから東に入る細い道の奥にある小さな祀が聖天サマと呼ばれており、昔泉蔵院という会所坊式寺院（無住で集会所の役割も果たすかんたんな寺院・現在、二荒山神社のオタリヤの神輿を迎える会所はその名残り）で、仲町の生福寺の管理下にありました。聖天サマというのは歓喜天のことで、もともとはインド神話に出てくる魔王ですが、後に仏教の守護神になりました。夫婦和合に霊験があるといわれ、ここの聖天サマも多くの信者でにぎわったといいます。しかし、祟りやすいのでおまつりの方法が大変に難しいといわれています。

●六道閻魔堂（西原１丁目）

戊辰戦争の大激戦地であった六道の辻には閻魔堂として有名なお堂があります。〔20－⑦〕ここはもともと六つの辻に分かれていたところから、仏教でいう六道（地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天上道）になぞらえてつけられたものです。ここのお堂は元禄14年（1701）に光琳寺〔20－④〕の専誉上人の時お堂をつくり、高さ８尺あまりの閻魔大王をおまつりしていましたが、後の火災で焼けてしまい、（閻魔像は光琳寺が今でも所有）、明治39年（1906）に再建して今日に至っています。

六道閻魔堂

なお、この閻魔堂には次のような話が伝えられています。

奈良に都があった聖武天皇の御代に、池や道や橋を各地につくり、人々から生き仏のようにあがめられた行基という高僧がいました。行基は欲のみにふけって来世に苦難をうけることを知らない人々が余りにも多いのをあわれに思い、すみやかに仏法を信じて安楽浄土に生まれる方法はないものかと七日の間、阿弥陀仏を念じました。

満願の日の暁に大忿怒の相で閻魔大王が現われ「汝末代の人々のために予の像を彫刻して罪悪の人々を救うべし。」と言うと御姿を消してしまいました。そこで行基はお告げの通り、尊像三体を彫刻して開眼供養すると、遠近の人々は在家出家を問わず袖をつらねてこれを拝み縁を結び、利益をこおむる人は天下にみちみちてきました。

その後、弘法大師が真言宗を広めた時、この尊像は大師に「予汝と共に東国へ赴き迷える人々を救わむ。」と告げました。

大師が日光登山のおり、木像と共にこの地を訪れたところ、不思議にも常に災いから大師をお守りになられたので、この地こそ有縁の地であると思われて、一宇を建立し、あつく尊像を

安置し、また、この地を六道と名づけました。

元禄のころ、日野町の森幽可という人が不思議な利益をこおむり八尺の木像を彫刻してこの尊像をお腹ごもり奉り、それ以来お腹ごもりの尊像と称するようになったといわれています。

かくして、この尊像を拝して厄難を免がれ、二世安穏の大利益得るものは年をへると共にその数を増していきました。（宇都宮市教育委員会「宇都宮の民話」から抜すい）

●不動堂（不動前１丁目）

宇都宮市には、不動前１丁目～５丁目という地名がありますが、これはその地にある不動堂に由来しています。国道４号線を北上すると不動前の交差点で新国道と旧道に分かれるところにあるお堂が不動堂です。〔20－⑤〕もともとはこの場所よりもっと東側・旭陵通りを少し入ったあたりにありましたが、後に移されて現在の地におちつきました。江戸時代にはここはまさに宇都宮への入口ともいうべきところであり、宇都宮へ入る目印となったお堂です。

不動堂

写真中央部に、昔不動堂があった

●報恩寺山門（西原１丁目）

西原１丁目の報恩寺〔20－⑥〕は、戊辰戦争戦死者の墓があることで有名ですが、ここの茅葺の山門は姿が美しいことでも有名で、江戸時代に作られたと思われます。戊辰戦争の戦火で本堂は焼失しましたが、この山門は火を免れました。装飾をあまりしない簡素なつくりだけに、まわりの白ぬりの築地壁とよくマッチし、寺のシンボル的な存在となっています。なお、最近寺で屋根の葺き替えをし、さらにすばらしい姿を見ることができます。

報恩寺山門

●蒲生君平誕生の地（小幡１丁目）

寛政の三奇人として有名な蒲生君平の生誕の地といわれる場所は、材木町通りが大通りと接するところから東に少し行った道の北側にあります。〔20－⑦〕明和５年（1768）に当時新石町と呼ばれたこの地で、油屋の子として生まれました。なお、君平は幼いころ延命院〔20－⑧〕で学問を教わりましたが、その碑が延命院の山門の脇に立てられています。

君平誕生の地の碑

●大豆三粒の金仏（南大通り１丁目）

南大通り１丁目にある名刹善願寺の境内には、高さ3.6ｍもある青銅製の露仏（被い屋のないところにある仏像）があります。〔20－⑨〕正式には毘盧舎那仏といい、万物を照らす宇宙的存在としての仏で、奈良の大仏もこれにあたります。この大豆三粒の金仏は、宇都宮の鋳物師であった戸室氏が作ったものです。なお、大豆三粒の金仏という名前の由来は以下のような伝説によるものです。

大豆三粒の金仏

江戸時代の八代将軍吉宗のころ、善願寺住職中興第12世栄鈷和尚は大仏建立を思い立って弟子の貫栄とともに諸国を托鉢してまわり、浄財を集めましたが、思うように集まらず、徒らに歳月が流れました。

ある冬の夜のこと、旅の僧が現れて、一夜の宿を乞うのでした。栄鈷和尚は喜んで招き入れ、夜食をともにしながら、大仏建立の念願を打ち明けました。すると旅の僧は、「私は諸国遍歴の身で、何らお役に立つことは出来ませんが、ここに大豆が三粒ありますから御喜捨いたしましょう。」と言うのでした。住職が当惑していると、旅僧は、「この三粒の大豆を境内にまかれたら、来年は百粒程の大豆がとれるでしょう。これを信者に一粒ずつわけ、それからとれる大豆はすべて、寺に喜捨していただく。その大豆をまた多くの信者にやって、実った大豆は寺に喜捨していただく。このようにして十数年をすぎたなら、その大豆の収益は驚くばかりになるでしょう。」と付け加えました。栄鈷和尚は顔をほころばせて「いかにも仰せの通りです。なぜ

これに気づかなかったのか……。」

と合掌し感謝しました。旅僧を泊めたのも仏の導きかと心に感じ、早速この言葉を実行に移しました。それから毎年毎年熱心に農家を巡って趣旨を説き、信者を増やしながら大豆の生産に協力していただくことを頼んで歩きました。そして10年の後、このような大仏が建立されたのです。

この年、栄鈷和尚は60歳、弟子貫栄は36歳、師弟が一致して大仏建立に尽力した美挙はたちまち民衆の話題となり、誰が詠んだかわからないが、

"土や石　積もれば富士の　山となる　豆も仏と　なることそきけ"

という和歌が人々の教訓として伝えられるようになりました。

●粉河寺出土の石棺（大通り４丁目）

ＪＲ宇都宮駅前、およりの鐘で有名な宝蔵寺〔20－⑩〕の境内には、石で造られた右の写真のようなものがあります。これは現在の県庁から郵便局あたりまでの広さがあった粉河寺（明治30年（1897）に宝蔵寺に合併）から明治時代に出土した石棺です。中には即身成仏（生きたまま仏になること・地中の空間にこもって、念物を唱えながら往生する）のミイラがあったそうです。戦前には一人当りいくらかのお金をとって見物させたこともあったそうですが、第二次世界大戦の戦火でミイラが焼けてしまい、現在はその石棺のみが残っています。また、宝蔵寺の境内にある古い石仏の中には、粉河寺から移したものも多くあります。

粉河寺出土の石棺

●鉄塔婆（大通り５丁目）

田川にかかる幸橋の西、清巌寺〔20－⑪〕の境内にある、国の重要文化財の鉄製の塔婆です。現在までのところ鉄の塔婆はこの清巌寺にあるものしか報告されておらず、大変に貴重なものです。高さ330cm、幅30cm、重さ300kg以上もあり、梵字や阿弥陀三尊、碑文が浮き堀りになっています。鎌倉時代の終わりごろの宇都宮城主であった宇都宮貞綱が、亡き母の13回忌の供養のために、正和元年（1312）に東勝寺に建てたものですが、東勝寺が廃寺となってしまったので、清巌寺に移されたのです。

鉄塔婆部分

碑文は「母は四恩で光であり、孝は百行の源である……」と記されています。鉄塔婆を見ると三つに割れているのが分かりますが、これは嘉永2年（1849）の暴風により割れてしまったもので、それを明治44年（1911）に修理したものなのです。

●芝増上寺の石灯籠（仲町）

生福寺内の石灯籠

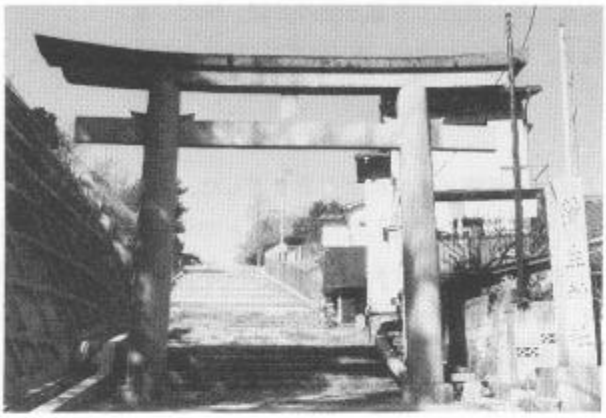
同左

東京都港区芝にある増上寺は、江戸時代に将軍徳川家の菩提寺となり、かつ関東十八檀林（仏教の学問所）の筆頭となっていました。そのため当時の大名は、将軍の菩提を弔うために多くの奉納をしましたが、生福寺〔20－⑫〕にある石灯籠も各地の大名より奉納されたもののうちの4基が、第二次世界大戦この地に移されたものです。なお、増上寺の石灯籠は大谷町の大谷寺〔20－⑬〕境内にもあります。

●蒲生神社の鳥居（塙田5丁目）

栃木県庁東側の道を八幡山公園方面に向かって行くと石造りの大きな鳥居が目に入ります。これは蒲生神社の鳥居ですが、奉納者は本県が生んだ名横綱栃木山です。〔20－⑬〕

栃木山は明治25年（1892）に下都賀郡赤麻村（現・藤岡町）で生まれ、19才の時に出羽の海部屋に弟子入りしました。力士になってわずか7場所で幕内入幕してしまいました。入幕後は3年（当時は年2場所）で第27代の横綱になり、引退するまでの幕内の通算勝率は、8割5分8厘もあり、かの名横綱双葉山よりも高い勝率となっています。大正元年（1925）に引退した後は春日野部屋を興したりして相撲界の発展に尽くし、昭和34年（1959）に63才で亡くなりました。



蒲生神社・栃木山奉納の鳥居

同左部分

●無縁仏供養碑（鶴田町）

本市の生んだ偉人である蒲生君平が残した文章をまとめた「修静庵遺稿拾遺」という本があります。この中に、晩年のころ菱川村の庄屋に〈無縁仏の碑（墓）を作ってくれるように頼まれた〉というところがあります。現鶴田町にある宮の原中学校北側には、能満寺別院があり、この境内に「無縁の墓」と刻まれている碑が建っています。〔20－⑭〕向かって右に「文化六年……」(1809)、左に「無縁先哀之墓」と刻まれており、時期的にも君平の記載と一致するので、この碑ではないかと思われます。

君平建立の無縁仏供養碑

●橋くぐり地蔵（新里町）

新里街道を北上し、栗谷沢ダムバス停より少し行くと新しい橋があり、そこのたもとに小さな祠があります。〔20－⑮〕幼い子どもを、この橋の下をくぐらせると、はしかにかからない、はしかがかるくなるといわれており、広く信仰を集めていました。明治時代以前から地元の人たちはお堂を作り、中に地蔵

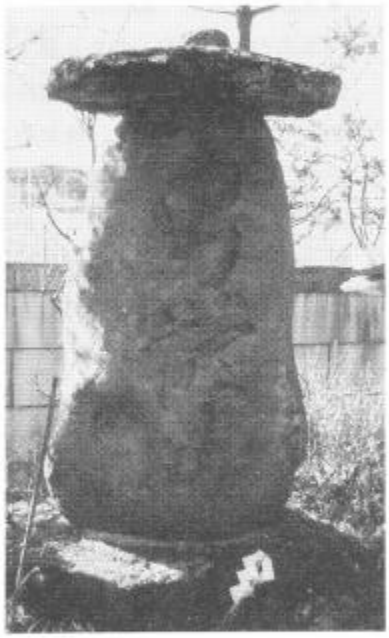
橋くぐり地蔵

さまをまつり、おまつりを行ってきました。現在でも春と秋の２回、地元の女の人たちによっておまつりが行われるそうです。なお、現在のお堂は、昭和59年に建てられたものです。

●男体講行屋（下荒針町）

少し前まで、農村では"講"とよばれる組織がどこにでもありました。講とは神仏をまつったり、また神社や寺院・山などに参詣するために組織した団体のことです。神仏をまつる例では、庚申講、念仏講、十九講などがあり、参詣するための講としては、古峰ケ原講、三峰講、伊勢講などがあります。男体講とは、本県の霊峰である男体山に登るための講であり、県内では比較的多くみられました。男体山に登るためにはまず身のケガレを落とさなければなりませんでした。そのために、家族と分かれて行屋とよぶ小屋に寝泊りし、川や池で水を浴びて潔斎した後に、はじめて男体山に登る資格を得たのです。下の写真にある男体講の行屋は、明保小学校の西500m程のところにある阿部一夫氏宅〔20－⑯〕の宅地の北西隅にあります。阿部氏の先祖は男体講の先達（男体登山の先導者）をしていたために行屋が屋敷内にあるのだそうで、戦前まで用いていたそうです。現在この行屋は物置として用いられており、一部改造はされているものの、昔の姿をよくとどめている貴重なものです。またこの行屋の前には、嘉永５年（1852）の銘のある男体山碑があります。

男体講行屋



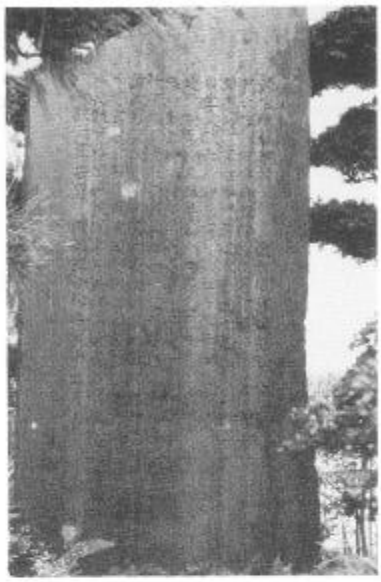
男体山碑

●上金井二宮林（上金井町）

上金井町台の上に杉や桧の立派な林があります。〔20－⑰〕これは二宮尊徳が植樹したものと伝えられています。この地は杉や桧の成長に適しているといわれ、

上金井二宮林

尊徳も地元の人々に植樹をすすめたそうです。また、二宮林の面積は、約7万2千㎡にも達し、植栽数は2万本を越えていたそうです。



釣伯翁の碑

●カゴノジ（籠の家）屋号の家（下欠町）

下欠町の寺高照院の南にある佐藤氏の屋号は「カゴノジ」と呼ばれています。一般に屋号は、地名・植物・方位・位置・職業などに由来しますが、佐藤氏の場合は、「門に吊るしてあった籠」に由来するという、めずらしい例です。これは佐藤氏の先代が医者であり、常用で使う籠が長屋門の中に吊してあったためなのです。佐藤氏の庭には医者であった釣伯翁をたたえる碑がのこっており、子弟の医学教育に尽くした生涯をたたえています。

●七内・八門・九堂（石井町）

現在の石井町、旧石井村には七内・八門・九堂という言葉があります。これは七つの小字・八つの四ツ足門、九つの堂という意味で、七内は地中内、古城内・大平内・堀ノ内・川子内・北ノ内・庫ノ内であり、八門を持っている八つの家、および千手観音堂・十一面観音堂・十三堂・阿弥陀堂・薬師堂・観音堂・地蔵堂・十王堂・行堂の九つの堂宇といわれています。なお、門やお堂の中にはすでにないものもあります。

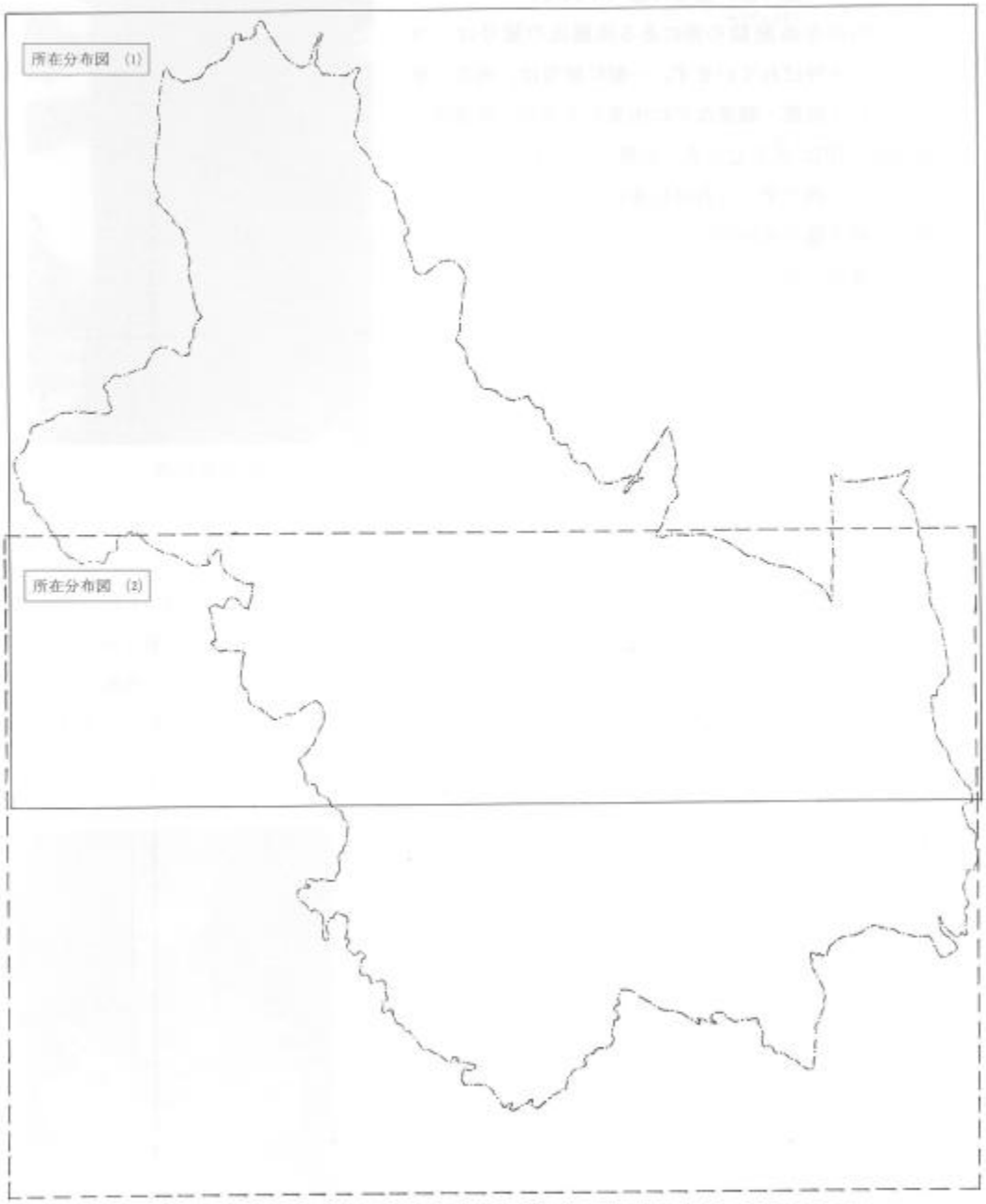
●神明宮（徳次郎町）

徳次郎町にあるドライブイン第二大晃の北側の畑の中に、神明宮というお宮があります。〔20－⑲〕ここは奈良時代にすでに建っていたといわれ、五穀豊穣・災難防止の神といわれています。また、お宮の中に石づくりの一対のこま犬がいますが、このこま犬は持った時の軽さ重さで、願い事がかなうか、かなわないか判断できるといい、その確率が大変によかったので多くの人でにぎわったといわれています。

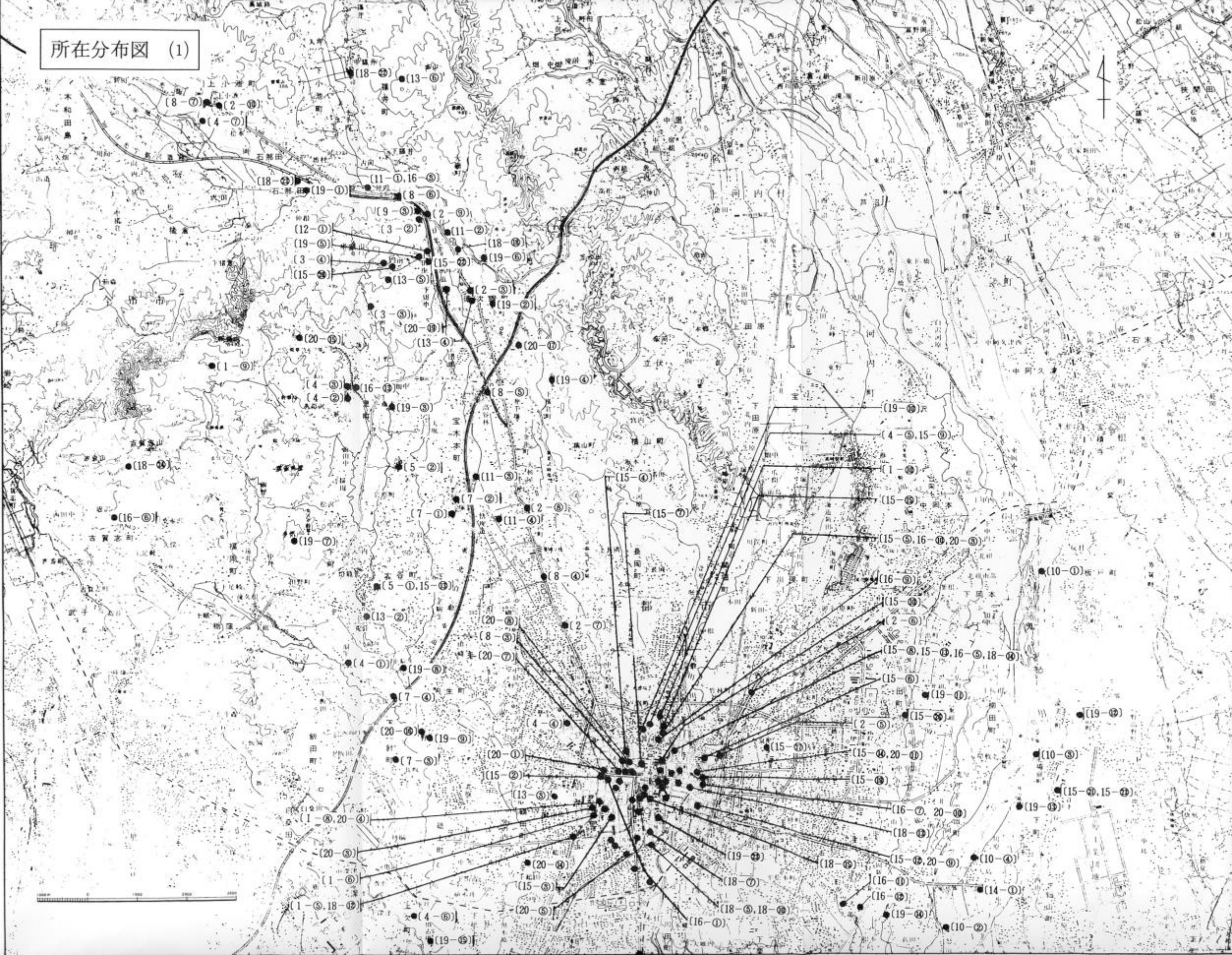
神明宮のこま犬

Ⅲ　参考資料

1　宇都宮の旧跡地図



所在分布図 (1)


(8－⑦)
(2－⑩)
(4－⑦)
(18－㉒)
(13－⑥)
(18－㉒)
(19－①)
(11－①,16－③)
(8－⑥)
(9－③)
(2－⑨)
(12－①)
(3－②)
(11－②)
(19－⑤)
(18－⑬)
(3－④)
(15－㉒)
(19－⑥)
(15－㉔)
(13－⑤)
(2－③)
(19－②)
(3－③)
(20－⑲)
(13－④)
(20－⑮)
(20－⑰)
(1－⑨)
(19－④)
(4－③)
(16－⑬)
(4－②)
(8－⑤)
(19－③)
(19－⑩)
(4－⑤,15－⑨)
(18－㉔)
(5－②)
(1－⑩)
(11－③)
(15－④)
(15－⑮)
(7－②)
(16－⑧)
(7－①)
(2－⑧)
(11－④)
(15－⑦)
(19－⑦)
(15－⑤,16－⑩,20－③)
(10－①)
(8－④)
(16－⑨)
(5－①,15－⑬)
(15－⑩)
(13－②)
(2－⑥)
(20－⑧)
(2－⑦)
(8－③)
(15－⑧,15－⑬,16－⑤,18－⑭)
(20－⑦)
(4－①)
(19－⑧)
(15－⑥)
(7－④)
(19－⑪)
(19－⑫)
(15－㉔)
(4－④)
(2－⑤)
(20－⑯)
(19－⑨)
(15－㉑)
(20－①)
(15－⑭,20－⑪)
(10－③)
(7－③)
(15－②)
(15－⑱)
(15－⑳,15－㉓)
(13－③)
(16－⑦, 20－⑩)
(19－⑬)
(1－⑧,20－④)
(18－⑫)
(20－③)
(19－㉒)
(18－⑮)
(15－⑫,20－⑨)
(10－④)
(20－⑭)
(1－⑥)
(18－⑦)
(16－⑪)
(14－①)
(15－③)
(16－⑫)
(1－⑤,18－⑫)
(20－⑤)
(18－⑤,18－⑱)
(19－⑭)
(4－⑥)
(16－①)
(10－②)
(19－⑮)

所在分布図 (2)

凡例
記号
宇都宮市
(4－①)
(19－⑧)
(18－㉑)
(18－⑧)
(7－④)
(2－②)
(4－④)
(9－②)
(20－⑮)
(19－⑨)
(7－③)
(9－①)
(20－②)
(6－①)
(1－⑦,15－⑰,20－⑥)
(20－⑭)
(13－①)
(18－⑥)
(4－⑥)
(19－⑮)
(15－⑯)
(18－⑯)
(20－⑱)
(16－⑧)
(1－②)
(10－⑥)
(1－③)
(19－㉓)
(1－④)
(19－㉑)
(7－⑤)
(2－⑥)
(18－①,18－⑪)
(19－⑪)
(16－④)
(15－㉘)
(15－㉗)
(15－⑪,20－⑫)
(4－⑧)
(18－②,18－③)
(18－⑨)
(18－④)
(6－②)
(3－①,15－①,18－⑦)
(15－⑱,17－①)
(19－⑩)
(8－②)
(19－⑰)
(2－④)
(19－⑱)
(18－㉔)
(16－⑪)
(16－⑫)
(19－⑭)
(19－⑫)
(10－③)
(15－㉑,15－㉓)
(19－⑬)
(10－④)
(14－①)
(10－②)
(16－②)
(19－⑲)
(10－⑤)
(15－㉔,18－⑲)
(19－㉒)
(2－①)
(9－④)
(8－①)
(15－㉕)
(3－⑤)
(1－①)
宇都宮市
石田
中子
上三川町
東刈部町
東峰沼
西木代
上三川工業団地
大田
西高
西川田
西原
西谷
西横田
西蓮寺
西川
西大通り
西大寺
西新井
西新田
西中
西中通り
西中島
西刈部
西刈部町
西刈部町中
西刈部町西
西刈部町西南
西刈部町中央
西刈部町東
西刈部町東南
西刈部町南
西刈部町北
西刈部町北東
西刈部町北西
西刈部町南東
西刈部町南西
西刈部町中央東
西刈部町中央西
西刈部町中央南
西刈部町中央北
西刈部町中央北東
西刈部町中央北西
西刈部町中央南東
西刈部町中央南西
西刈部町中央東南
西刈部町中央東北
西刈部町中央西南
西刈部町中央西北
西刈部町中央東南東
西刈部町中央東北東
西刈部町中央西南西
西刈部町中央西北西
西刈部町中央東南南
西刈部町中央東北北
西刈部町中央西南南
西刈部町中央西北北
西刈部町中央東南東南
西刈部町中央東北東北
西刈部町中央西南西南
西刈部町中央西北西北
西刈部町中央東南東南南
西刈部町中央東北東北北
西刈部町中央西南西南南
西刈部町中央西北西北北
西刈部町中央東南東南南南
西刈部町中央東北東北北北
西刈部町中央西南西南南南
西刈部町中央西北西北北北
西刈部町中央東南東南南南南
西刈部町中央東北東北北北北
西刈部町中央西南西南南南南
西刈部町中央西北西北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央東北東北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央西南西南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南南
西刈部町中央西北西北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北北
西刈部町中央東南東南南
西刈部町中央東北東北北
西刈部町中央西南西南南
西刈部町中央西北西北北
西刈部町中央東南東南南南
西刈部町中央東北東北北北
西刈部町中央西南西南南南
西刈部町中央西北西北北北
西刈部町中央東南東南南
西刈部町中央東北東北北
西刈部町中央西南西南南
西刈部町中央西北西北北
西刈部町中央東南東南南南
西刈部町中央東北東北

2　書籍にある宇都宮の旧跡

○　この資料は、「宇都宮市史」、「宇都宮６０周年記念誌」、「宇都宮史」の３冊の書籍の中で、宇都宮市内の旧跡に関する記載場所を調べるときに用いやすいように作成したものです。また、国・栃木県・宇都宮市の指定となっている史跡も併せて載せておきました。

○　各地区により項目数に差があるのは、書籍の中の項目数の差です。

○　上記の書籍でも見落としたもの、載せることができなかったものもあります。

○　上記以外の書籍に書いてある旧跡に関しては今回については除外とさせていただきました。

○　ここでは、宇都宮市を２０の地区に分けて、それぞれの地区ごとに分類しました。

○　分類記号は以下に記した『旧跡項目』と一致します。

○　項目名はできるだけ簡単にしました。

○　引用文献の略号は次の通りです。宇都宮市史→「市史」、宇都宮６０周年誌→「60」、宇都宮史→「宮史」、宇都宮誌→「宮誌」

○　引用文献名の後の数字は巻数を示します。また、巻数の後にある－に続く数字はその巻数のページ数を示します。

『旧跡項目』（国の史跡指定基準を参考にして教育委員会事務局で作成しました。）

1　古戦場その他政治に関する旧跡

(1)　古戦場　(2)　政治関係の旧跡

2　社寺の跡または旧境内、塚、磨崖仏、堂宇

(1)　社寺の跡　(2)　塚　(3)　磨崖仏　(4)　堂宇

3　藩校、私塾、文庫その他教育学芸に関する旧跡

(1)　藩校　(2)　寺子屋　(3)　その他

4　産業、交通、土木に関する旧跡

(1)　一里塚　(2)　並木街道　(3)　本陣・脇本陣跡　(4)　問屋跡　(5)　河岸跡

(6)　用水堰　(7)　窯跡　(8)　鍛冶場跡　(9)　鉱山跡　(11)　産業関係建物跡

5　墓、石碑関係

(1)　墓　(2)　石碑　(3)古墳

6　旧宅地、園地、井泉、樹石および特に由緒のある地域

(1)　旧宅地　(2)　井泉　(3)　樹木　(4)　その他

7　信仰関係地

8　城跡、屋敷跡

9　その他

○一条地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
1－(1)	戊辰の役六道古戦場	市史６－５７７	
1－(2)	高札場	宮史－２１８	
2－(1)	廃寺　教乗寺　代官町	市史６－７０９	
2－(1)	廃寺　地蔵寺　西原村	市史６－７０９	
2－(1)	廃寺　栄林寺　新町	市史６－７０９	
2－(1)	廃寺　盛久院　新町	市史６－７０９	
2－(1)	廃寺　宗見寺　新町	市史６－７０９	
2－(1)	廃寺　長福寺　新町	市史６－７０９	
2－(1)	廃寺　長楽寺　大黒町	市史６－７１０	
2－(1)	廃寺　吉祥寺　三ノ筋	市史６－７１０	
2－(1)	廃寺　英巌寺	市史６－７１０	
2－(1)	廃寺　雲幻寺	市史６－７１１	
2－(1)	廃寺　万松寺	市史６－７１１	
2－(1)	廃寺　新善光寺	市史６－７１１	
2－(1)	廃寺　新院尼寺（薬王寺）	市史６－７１１	
2－(4)	六道閻魔堂	市史６－７２９	
2－(4)	丹堂薬師（赤堂）	市史６－７２９	
2－(4)	南新町地蔵堂	市史６－７２９	
2－(4)	熱木町不動堂	市史６－７２９	
2－(4)	大黒町大黒天堂	市史６－７２９	
2－(4)	蓬莱町観音堂	市史６－７２９	
2－(4)	池上裏町虚空蔵堂	市史６－７２９	
3－(1)	修道館	市史６－６３１	
3－(2)	四條町鈴木喜八塾	市史６－６４５	
4－(3)	宇都宮宿本陣	市史６－261 ・279	
5－(1)	戸田氏の墓所	市指定	
5－(1)	戸田忠温の母墓（報恩寺）	市史６－９５	
5－(1)	戊辰の役戦死者墓（各地）	市史６－592 他	
5－(1)	長沢楽浪墓（台陽寺）	市史６－６２８	
5－(1)	堀郷三墓（報恩寺）	市史６－６４２	
5－(1)	高宮雲僊墓(安養寺)	市史６－６５９	

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
5－(1)	菊地愛山墓（一向寺）	市史6-664	
5－(2)	君平勅旌碑	市指定	
5－(2)	天狗党事件碑（英厳寺跡）	市史６－５５３	
5－(2)	高久靄厓山人碑（観専寺）	市指定	
5－(2)	愛山寿碣碑（一向寺）	市史６－６６４	
5－(2)	永井安通君碑（宝勝寺）	宮史３３２	
5－(2)	戊辰戦役碑（報恩寺）	宮史３４２	
5－(1)	戸田光形墓（報恩寺）	６０－１２６５	
5－(1)	堀貞道墓（台陽寺）	６０－１２６５	
5－(1)	松本亮之允墓（台陽寺）	６０－１２６６	
6－(1)	君平誕生地（小幡）	市史６－５９７	
6－(2)	滝の水（滝の権現）	６０－１２９０	七木七水八河原
6－(2)	虹の井（池上）	宮誌３３５	七木七水八河原
6－(2)	嚬の清水（新町口）	宮誌３３５	七木七水八河原
6－(3)	亀井榎（亀井の井付近）	６０－１２８９	七木七水八河原
6－(3)	松峰の欅（松峰御門内）	６０－１２８９	七木七水八河原
6－(3)	角榎一ノ筋	宮誌３３４	七木七水八河原
6－(3)	池上通り榎	宮誌３３４	七木七水八河原

○陽北地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(1)	廃寺　粉河寺	市史６－７０９	
2－(2)	根来塚	６０－１２８６	
2－(4)	千手町千手堂	市史６－７２９	
2－(4)	小田町千手観音堂	市史６－７２９	
2－(4)	清厳寺横丁角地蔵堂	市史６－７２９	
2－(4)	岩曽村薬師堂	市史６－７３０	
3－(2)	塙田町修験者永井正雄塾	市史６－６４４	
3－(2)	塙田町神官田中左郷塾	市史６－６４４	
3－(2)	寺町東山堂	市史６－６４５	

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
3－(2)	上河原町稽古堂	市史６－６４５	
3－(2)	寺町白井蔵子の茶華道伝授	市史６－６４５	
4－(1)	竹林一里塚	６０－１２８７	
5－(1)	樋爪氏墓	市指定	
5－(1)	貞綱　公綱墓（興禅寺）	市史３－１３１	
5－(1)	奥平正輝墓（興禅寺）	市史６－４３	
5－(1)	桑名主米墓（興禅寺）	市史６－５３	
5－(2)	芳賀高継宝篋印塔（清巌寺）	市史３－３８７	
5－(2)	松尾芭蕉句碑（能延寺）	市史６－６５２	
5－(2)	松尾芭蕉句碑（慈光寺）	市史６－６５２	
5－(1)	山本蕉逸墓（清巌寺）	宮史３３０	
5－(2)	山澤士弘碑（清巌寺）	宮史３３０	
5－(2)	大橋淡雅墓表（生福寺）	宮史３４４	
5－(1)	菊地淡雅墓（生福寺）	６０－１２６５	
5－(1)	菊地教中墓（生福寺）	６０－１２６５	
6－(2)	上河原	６０－１２９０	七木七水八河原
6－(2)	仙阿弥河原	６０－１２９０	七木七水八河原
6－(2)	北河原	６０－１２９０	七木七水八河原
6－(2)	七里河原	６０－１２９０	七木七水八河原
6－(2)	最上河原	６０－１２９０	七木七水八河原
6－(2)	生霊河原	６０－１２９０	七木七水八河原
9	興禅寺の刃傷	市史６－４１	

○旭地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(1)	廃寺　神宮寺	市史３－２６	
2－(1)	廃寺　長楽寺	市史３－３６４	
2－(1)	廃寺　生善寺　宿郷	市史６－７０８	
2－(1)	廃寺　文殊院　馬場町	市史６－７０９	
2－(1)	廃寺　示現寺　馬場町	市史６－７０９	
2－(1)	廃寺　昌泉寺　御橋	市史６－７１０	

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(1)	廃寺　東勝寺　釈迦堂町	市史６－７１０	
2－(1)	廃寺　松岩寺　曲師町	市史６－７１０	
2－(1)	廃寺　本宮寺（大明神）	市史６－７１０	
2－(1)	廃寺　神楽寺（大明神）	市史６－７１０	
2－(1)	廃寺　浄心寺（大明神）	市史６－７１０	
2－(1)	廃寺　金照院（大明神）	市史６－７１０	
2－(1)	廃寺　不動院（大明神）	市史６－７１０	
2－(1)	廃寺　国恩寺（大明神）	市史６－７１０	
2－(1)	廃寺　慈心院（大明神）	市史６－７１１	
2－(2)	おしどり塚	市指定	
2－(4)	曲師町弁天堂	市史６－７２９	
2－(4)	馬場町観音堂	市史６－７２９	
2－(4)	馬場町薬師堂	市史６－７２９	
2－(4)	馬場町庚申堂	市史６－７２９	
2－(4)	釈迦堂町文殊堂	市史６－７２９	
2－(4)	釈迦堂町普賢堂	市史６－７２９	
3－(2)	曲師町松巌寺岡田梅陵塾	市史６－６４２	
3－(2)	小袋町成田山鹿児島愚六塾	市史６－６４３	
3－(2)	押切町修験者錦織真澄塾	市史６－６４４	
3－(2)	大工町天野芳右衛門塾	市史６－６４４	
3－(2)	馬場町鏡池堂塾	市史６－６４５	
3－(2)	簗瀬村釈義竜の寺子屋	市史６－６４５	
4－(1)	元石一里塚	６０－１２８７	
5－(2)	蒲生秀實碑	宮史３３８	
5－(2)	戸田忠恕公碑（本丸跡）	宮史３４０	
5－(2)	圓山信庸之碑（二荒山神社）	宮史３５０	
5－(1)	手島道定墓（宝蔵寺）	６０－１２６５	
6－(2)	鏡ヶ池（馬場通り）	市史３－２６	
6－(2)	池の井（宇都宮城大手門脇）	６０－１２９０	七木七水八河原
6－(2)	馬場の井（広馬場）	６０－１２９０	七木七水八河原
6－(2)	東石町の井（石町の東通り）	６０－１２９０	七木七水八河原
6－(2)	亀井の水（常念寺前）	６０－１２９０	七木七水八河原

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
6－(2)	明神の井（二荒山神社内）	60－1290	七木七水八河原
6－(2)	中河原	60－1290	七木七水八河原
6－(2)	下河原	60－1290	七木七水八河原
6－(2)	御供水（御宮）	宮誌335	七木七水八河原
6－(2)	滝の井（馬場先）	宮誌335	七木七水八河原
6－(2)	芝田の井（鏡の井）東石町	宮誌335	七木七水八河原
6－(3)	明神の塩釜桜（二荒山神社）	60－1289	七木七水八河原
6－(3)	普賢堂の桜（東勝寺普賢堂）	60－1289	七木七水八河原
6－(3)	化桜（宇都宮城中門内）	60－1289	七木七水八河原
6－(3)	地蔵堂門の藤（宇都宮城内）	60－1289	七木七水八河原
6－(3)	日光堂の薄墨桜（荒尾崎）	60－1289	七木七水八河原
6－(3)	二ノ丸榎	宮誌334	七木七水八河原
6－(3)	角榎宿郷	宮誌334	七木七水八河原
6－(3)	宮前桜	宮誌334	七木七水八河原
6－(3)	最上河原	60－1290	七木七水八河原
6－(4)	標茅が原	60－1290	
8	宇都宮城	市史3－52他	

○陽南地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
4－(1)	江曽島一里塚	60－1287	
5－(2)	老農篠崎君功績碑（江曽島）	60－1267	
8	江曽島城跡（江曽島町館合）	60－1270	

○陽西地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
6－(3)	軍道の桜	宮誌337	

○星が丘地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(1)	廃寺　桂蔵寺　塙田	市史6－708	
2－(1)	廃寺　大日院　百目鬼	市史6－708	
2－(1)	廃寺　心光寺	市史6－709	
2－(2)	和尚塚	60－1286	
2－(4)	戸祭村十九夜堂	市史6－730	
3－(2)	小伝馬町渓雲堂塾	市史6－644	
3－(2)	戸祭村鵜池堂	市史6－644	
4－(1)	上戸祭一里塚	60－1287	
4－(1)	清住一里塚	60－1287	
5－(1)	蒲生君平墓（桂林寺）	市史6－622	
5－(1)	福井重次郎墓（桂林寺）	市史6－641	
5－(1)	長瀬原兵衛墓（桂林寺）	市史6－642	
5－(1)	荒川文礼墓（浄鏡寺）	市史6－643	
5－(2)	蒲生君蔵墓表（桂林寺）	宮史335	
5－(2)	古棺記（県庁裏）	宮史351	
5－(2)	明石志賀之助碑（蒲生神社）	60－1266	
5－(2)	県六石先生碑（蒲生神社）	60－1266	
5－(1)	安倍泰弘墓（慈光寺）	60－1265	
5－(1)	県信緝墓（慈光寺）	60－1265	
5－(1)	枝源五郎墓（慈光寺）	60－1265	
5－(1)	岡田真吾墓（桂林寺）	60－1265	
5－(1)	児島強介墓（八幡山）	60－1265	
5－(1)	中里家の墓（光明寺）	60－1265	
5－(1)	松本定墓（桂林寺）	60－1265	
5－(3)	大塚古墳	県指定	
6－(1)	君平学問地（延命院）	市史6－598	
6－(2)	天女水（塙田町慈光寺）	60－1290	七木七水八河原
8	戸祭城跡	60－1268	

○陽東地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(4)	石井村観音堂	市史6－730	
3－(2)	宝正院　神宮篠原某寺子屋	市史6－646	
3－(2)	農荒内新次郎石井小松堂塾	市史6－646	
4－(5)	石井河岸	市史6－330	
4－(10)	大嶋商舎	市史8－23	
8	石井城跡	60－1269	

○泉が丘地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
5－(1)	六兵衛墓　（貴国大権現）	60－1227	籾摺騒動

○宮の原地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(4)	鶴田村薬師堂	市史6－730	
2－(4)	砥上村北坪観音堂	市史6－730	
2－(4)	上欠下村初網水田中観音堂	市史6－730	
2－(4)	鶴田村十九夜堂	市史6－730	
2－(4)	上砥上村北坪十九夜堂	市史6－730	
3－(2)	上欠下木村新蔵塾	市史6－648	
3－(2)	上砥上岡田五郎右衛門寺小屋	市史6－648	
8	犬飼城跡（上欠町）	60－1272	

○平石地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(1)	廃寺　薬王院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　宝性院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　成福院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　観行院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　泉蔵院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　普門寺	市史6－725	
2－(1)	廃寺　吉祥院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　照光寺	市史6－725	
2－(1)	廃寺　柳光寺	市史6－726	
3－(2)	農中里千代吉塾	市史6－646	

○清原地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(4)	板戸村薬師堂	市史6－729	
2－(4)	上籠谷村薬師堂	市史6－729	
4－(5)	板戸河岸	市史6－330他	
4－(5)	道場宿河岸	市史6－330	
4－(5)	鎌山河岸	市史6－330	
5－(1)	芳賀氏墓所	市指定	
5－(3)	竹下浅間山古墳	市指定	
8	飛山城跡（竹下町）	国指定	
8	淡路城跡（刈沼町）	60－1269	
8	狸穴城跡（満美穴町）	60－1270	

○横川地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(1)	廃寺　宝性院	市史6－726	
2－(1)	廃寺　観行院	市史6－726	
2－(1)	廃寺　観音寺	市史6－726	
2－(1)	廃寺　延寿院	市史6－726	
2－(1)	廃寺　真福寺	市史6－726	
2－(1)	廃寺　竜泉院	市史6－726	
3－(2)	農飯野清右衛門塾	市史6－647	
3－(2)	修験者鈴木某の寺子屋	市史6－647	
8	猿山城跡（下栗町）	60－1270	
8	東川田城跡（川田町大城内）	60－1271	

○瑞穂野地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(1)	廃寺　回向院	市史6－726	
2－(1)	廃寺　成就院	市史6－726	
2－(1)	廃寺　西光院	市史6－726	
2－(1)	廃寺　円光院	市史6－726	
2－(1)	廃寺　密蔵寺	市史6－726	
2－(1)	廃寺　福寿寺	市史6－726	
2－(1)	廃寺　満蔵寺	市史6－726	
2－(1)	廃寺　法蓮院	市史6－726	
2－(1)	廃寺　照明院	市史6－726	
2－(1)	廃寺　金乗院	市史6－726	
2－(1)	廃寺　仏頂寺	市史6－726	
2－(4)	上桑島村薬師堂	市史6－730	
2－(4)	東刑部村前田内観音堂	市史6－730	
2－(4)	西刑部村中観音堂	市史6－730	
2－(4)	西刑部村田中内観音堂	市史6－730	

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(4)	上桑島村観音堂	市史6－730	
3－(2)	下桑島増淵勝蔵の自保堂	市史6－647	
3－(2)	上桑島　山口昇専塾	市史6－647	
3－(2)	西刑部小川芳蔵の算学塾	市史6－647	
4－(5)	桑島河岸	市史6－330	
5－(2)	吉良八郎碑	市指定	
5－(1)	安達藤九郎盛長墓（成願寺）	60－1264	
8	刑部城跡（東刑部町）	市指定	
8	桑島城跡（上桑島町）	60－1270	

○豊郷地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(1)	廃寺　松岳寺	市史6－725	
2－(1)	廃寺　宝蔵院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　広蔵寺	市史6－725	
2－(1)	廃寺　持福院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　自性院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　地福院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　悉地院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　覚性院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　浄光院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　真成院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　玉蔵院	市史6－725	
2－(1)	廃寺　宝蔵寺	市史6－725	
2－(2)	雷電山古墳	市指定	
2－(4)	横山村薬師堂	市史6－730	
2－(4)	瓦谷村薬師堂	市史6－730	

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(4)	山本村堂前観音堂	市史6－730	
2－(4)	長岡村百穴観音堂	市史6－730	
2－(4)	川俣村浮田延命地蔵堂	市史6－730	
2－(4)	横山村宮内阿弥陀堂	市史6－730	
2－(4)	長岡村太子堂	市史6－730	
3－(2)	関堀　梅園春男塾	市史6－645	
3－(2)	下川俣大定院　河内勝学塾	市史6－646	
3－(2)	上瓦谷　農中里造酒造塾	市史6－646	
4－(1)	海道一里塚	60－1287	
5－(2)	感恩報徳碑（海道町）	60－1267	
5－(3)	百穴古墳（長岡町）	県指定	
5－(3)	宮下古墳	市指定	
5－(3)	権現山古墳	市指定	

○国本地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(1)	廃寺　光明寺	市史6－727	
2－(1)	廃寺　東泉寺	市史6－727	
2－(1)	廃寺　金照院	市史6－727	
2－(1)	廃寺　観喜院	市史6－727	
2－(1)	廃寺　滝明寺	市史6－727	
2－(1)	廃寺　観音寺	市史6－727	
2－(1)	廃寺　宝持院	市史6－727	
2－(1)	廃寺　万念寺	市史6－727	
2－(1)	廃寺　持福院	市史6－727	
2－(1)	廃寺　天王寺	市史6－727	
2－(1)	廃寺　金性寺	市史6－728	
2－(4)	新里村薬師堂	市史6－730	
2－(4)	東新里村大堀子育地蔵堂	市史6－730	

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(4)	東新里村大堀安産地蔵堂	市史６－７３０	
2－(4)	西新里村栗谷沢はしか地蔵	市史６－７３０	
2－(4)	足次新田阿弥陀堂	市史６－７３０	
2－(4)	東新里村毘沙門堂	市史６－７３０	
3－(2)	野沢光明寺栄明の寺子屋	市史６－６４９	
3－(2)	仁良塚農岩崎団吉寺子屋	市史６－６４９	
5－(2)	岩崎団吉翁碑（宝木本町）	６０－１２６７	
7	日枝神社	市史３－４５	

○城山地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(3)	大谷磨崖仏	国指定史跡	
3－(2)	古賀志北條文大夫伯教剣術道場	市史６－６４８	
3－(2)	荒針医・名主渡辺敷善書道塾	市史６－６４８	
3－(2)	古賀志松園北條吉蔵書道塾	市史６－６４９	
3－(2)	上駒生医飯村道碩寺子屋	市史６－６４９	
3－(2)	飯田御子貝光三寺子屋	市史６－６４９	
4－(9)	大谷石	市史６－１２５ ３７７・７－７６５	
5－(2)	廻国塔（大谷寺）	市史３－３８９	
8	多気城（田下町）	市史３－４９９他	

○富屋地区

分　類	項　　目	引用文献	備　　考
2－(1)	廃寺　安養院	市史6－728	
2－(1)	廃寺　神宮寺	市史6－728	
2－(1)	廃寺　成就院	市史6－728	
2－(1)	廃寺　長林寺	市史6－728	
2－(1)	廃寺　光明寺	市史6－728	
2－(1)	廃寺　西光院	市史6－728	
2－(1)	廃寺　蓮蔵寺	市史6－728	
2－(1)	廃寺　延命寺	市史6－728	
2－(1)	廃寺　東光寺	市史6－728	
2－(1)	廃寺　不動寺	市史6－728	
2－(4)	下金井村薬師堂	市史6－730	
2－(4)	下横倉村薬師堂	市史6－730	
2－(4)	徳次郎宿西根観音堂	市史6－730	
2－(4)	中徳次郎宿あざ地蔵堂	市史6－730	
2－(4)	上金井村さんから地蔵堂	市史6－730	
3－(2)	明王院外鯨要人寺子屋	市史6－649	
4－(1)	上金井一里塚	60－1287	
4－(3)	上戸祭町以北日光街道並木	60－1287	
4－(3)	徳次郎宿本陣	市史6－263 他	
4－(6)	徳次郎堰	60－1288	
4－(8)	徳次郎正宗鍛冶場跡	市史3－522	
5－(1)	妙哲禅師墓	県指定	
8	石那田城跡（石那田町）	市史3-642 60-1271	
8	徳次郎城跡（徳次郎町）	60－1271	

○篠井地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
2－(1)	廃寺　持福院	市史6－728	
2－(1)	廃寺　普門院	市史6－728	
2－(4)	篠井村薬師堂	市史6－730	
2－(4)	石那田村薬師堂	市史6－730	
4－(1)	石那田一里塚	60－1287	
4－(1)	上小池一里塚	60－1287	
4－(6)	石那田堰	60－1288	

○姿川地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
1－(1)	戊辰の役幕田古戦場	市史6－574	
2－(1)	廃寺　重福寺	市史6－727	
2－(1)	廃寺　福寿院	市史6－727	
2－(1)	廃寺　秀明寺	市史6－727	
2－(4)	鷺谷村薬師堂	市史6－730	
2－(4)	西川田村黒木橋子育地蔵堂	市史6－730	
2－(4)	下欠下村阿弥陀堂	市史6－730	
3－(2)	幕田荒川安蔵寺子屋	市史6－648	
4－(5)	幕田河岸	市史6－354	
8	横田城跡（兵庫塚町）	60－1272	
8	樋口城跡（幕田町御城）	60－1272	
9	根古谷台遺跡	国指定	

○雀宮地区

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
1－(1)	裳原古戦場	市史３－４５５	
2－(1)	廃寺　満蔵寺	市史６－７２６	
2－(1)	廃寺　円光寺	市史６－７２６	
2－(1)	廃寺　普門寺	市史６－７２６	
2－(1)	廃寺　医王寺	市史６－７２６	
2－(1)	廃寺　観音院	市史６－７２６	
2－(1)	廃寺　慈眼寺	市史６－７２７	
2－(1)	廃寺　薬王院	市史６－７２７	
3－(2)	針ヶ谷医倉井友敬塾	市史６－６４７	
3－(2)	雀宮宿医小倉脩敬塾	市史６－６４７	
4－(1)	雀宮一里塚	６０－１２８７	
4－(3)	雀宮宿本陣	市史６－260 他	
5－(1)	源乃丞墓（喜国神社）	６０－１２２７	籾摺騒動
5－(3)	塚山古墳	県指定	
5－(3)	塚山西古墳	県指定	
5－(3)	塚山南古墳	県指定	
5－(3)	笹塚古墳	県指定	

○市内各地

分　類	項　　目	引　用　文　献	備　　考
9	明治天皇御幸	６０－１２４１	
9	旧市内橋名称	宮誌１０６	

Ⅳ 索　引

あ　行

露厓山人碑――55
明石志賀之助――57
県信綱（六石）――38,43
アカン堂（赤堂・丹堂薬師）75
秋月登之助――4,7
旭町の大いちょう――61
足利氏満――6
足利尊氏――6
安達藤九郎盛長――53
荒川文礼――45
淡路城――68
安養院――11
安養寺――36
育英学舎――50
池上通り榎――60
池の井――61
池の辺郷――62
池尻嶽五郎――38
石井河岸――28,58
石井城――69
石那田一里塚――25
石那田城――64
石那田堰――30,55
石那田用水――29
井泉水門の榎――60
板戸河岸――28
一里塚――23
一向寺――36
嘶の清水――61
犬飼城（根古谷城）――69
岩崎団吉寺子屋――21
岩本磨崖仏――20
上杉憲顕――6
上野新右衛門――26
宇都宮氏綱――6
宇都宮興綱――48
「宇都宮家臣記」――67
宇都宮公綱――6,38
宇都宮国綱――67
宇都宮貞綱――38,79
宇都宮宿高札場――9
宇都宮宿本陣――25
宇都宮宿脇本陣――26
宇都宮商工会議所（旧）――32
宇都宮城――4,7,8,73
宇都宮城下の廃寺――10
宇都宮宗円(藤原宗円)――13,14,67,73
宇都宮忠綱――48,71
宇都宮釣天井――39
宇都宮朝綱――15
宇都宮広綱――48
宇都宮正綱――44
宇都宮基綱――4,6
宇都宮頼綱（蓮生）――47
「宇陽略記」――75
雲巌寺――52
英巌寺――8,11,36
英巌寺の犬つげ――62
江曽島城（瓢箪城）――70
江曽島の一里塚――24
枝源五郎――42
遠歓寺――15
延命院――37,78
大嶋商舎――34,35
大手門――21,61
大鳥圭介――7
大橋訥菴――37,43,47,49,55
大峯山――66
大谷石――31,32
大谷公開堂――32
大谷寺――18,19,45,80
大谷寺の磨崖仏――18
大山弥助（巌）――8
オカザキ山――13
岡田真吾――37,38
岡田錠太郎――38
岡平城――66
奥平家昌――39
奥平内蔵允正輝――39
奥平源八――40
奥平忠昌――39,40,41
奥平隼人――40
刑部城――72
おしどり塚――17
和尚塚――15
御山屋敷――60
小山義政――4
小山義政の乱――6

か　行

鏡ヶ池（馬場通り）――62
鏡ヶ池（野沢町）――63
カゴノジ屋号の家――83
河岸――27
勝山――14
金沢学校――22
上金井二宮林――82
上河原――61
上小池一里塚――25
上徳次郎宿本陣――26
上戸祭一里塚――24
亀井榎――60
亀井の水――60,61
亀井六郎――52
亀右衛門――54
亀姫――39
蒲生君平――36,37,57,81
蒲生君平勅旌碑――57
蒲生君平誕生地――78
蒲生神社――37,49,57,80
川村迂叟――34,35
ガンガラ山――33
歓喜院滝明寺――65
観専寺――36,55
菊地愛山――36
菊池教中――47,55
菊池淡雅（大橋淡雅）――46,49
喜国神社――54
喜国大権現――54
北河原――61
北原城――67
経塚――15
清原高名――6
吉良八郎――31,55
吉良八郎碑――55
楠木正成――6,38
供養塚――16
倉井友敬塾――23
グランドホテル――51,60
桑島城――71
桑名主米勝乗――41
桂林寺――36,37
潔進館――20
源之丞――53,54

県立中央公園——32
小池内蔵助——64
高札場——8
高照院——83
庚申塚——16
興禅寺——38
光徳寺——36
光明寺——36,42
高谷林一里塚——25
広琳寺——67
光琳寺——5,6,36,76
古賀志山——63
粉河寺——79
古棺記——57
児島強介——48,49
後醍醐天皇——6
金剛定寺——45
金剛定寺のカヤ——62

さ　行

幸橋——51
坂下門外の変——43,49
作新館——50
沙石集——17
鮫島重雄——50,60
猿山城——71
猿山の合戦——71
山陵志——37
山陵修補——35,44
慈光寺——36,42,45,56,61
静御前——52,63
静桜（御前桜）——63
地蔵堂門——60
地蔵堂門の藤——60
七内・八門・九堂——83
七水——61
七木——60
七里河原——61
篠井金山——33
篠井の池——63
篠井の金掘り唄——33
下河原——61
下野英学校——50
下野国分寺——31
下横倉城——65
「修静庵遺稿拾遺」——81
修道館——20,50
塾——21
主静塾——44
祥雲寺——15,44,67
成願寺——53
成願寺のいちょう——62
浄鏡寺——44
聖天サマ——75
常念寺——36,61
生福寺——45,76,80
生霊河原——61
職官志——37
浄瑠璃坂の仇討——40
城山西小学校——56
神事河原——61
新田町一里塚——24
神仏分離令——9
新町の大けやき——61
神明宮——83
水神社——30,31
杉山彖之助——42
鈴木石橋——37
鈴木梅渓——36
鈴木八郎重行——67
雀宮一里塚——23
雀宮宿——8
雀宮宿本陣——26
雀宮宿脇本陣——26
角榎一ノ筋——60
角榎宿郷——60
清巌寺——36,45,47,79
聖山公園遺跡——15
仙阿弥河原——61
善願寺——45,78
泉蔵院——75
宗円獅子舞——13
宗円塚——13
増上寺——80
五月女坂——48
芝田和尚——12

た　行

大運寺——36
第十四師団——51,60
大豆三粒の金仏——45,78
大砲発射碑——58
台陽寺——36,49
高尾神社——53
高久靄厓——55
高田仏師——44
高塚——16
高宮雲遷——36
高山彦九郎——37
宝木用水堰——30
滝神社——63
滝の井——61
滝の権現（滝尾神社）——5,61
多気城——66
多気山持宝院（多気不動）14,67
立原杏所——55
玉生美濃守——67
智賀都神社の大けやき——62
塚——13
筑紫市兵衛——41
帝国ホテル（旧）——32
鉄塔婆——79
寺子屋——21
天勢寺——36
天女水——61
天王寺——12
伝法寺——12,52
道橋修覆供養碑——58
同慶寺——45,52,53,68
東勝寺——79
東勝寺の普賢堂——60
徳次郎石——33
徳次郎城——64
徳次郎新堀——29
徳次郎用水——29,55
徳次郎六郷用水——29
戸田三左衛門忠厚——42
戸田忠恕——7,8,11,36
戸田忠真——11,60
戸田忠友——57
戸田光形——50
栃木山——80
飛山城——48,53,68
戸祭城——67
戸祭備中守高定——44,67
富岡製糸場——34
戸室氏——45
豊臣秀吉——67

な　行

直井淡路守——68

中河原——61
中里家——42
中城——67
長沢粋菴——49
長沢学（不恕斎）——49
長沢楽浪（不尤所）——49
中徳次郎高札場——9
中門——60
那須高資——48
男体講行屋——82
「日光道中図絵」——8
「日光道中分間延絵図」——8
日光堂の薄墨桜——60
新田徳次郎昌言——65
新田義盛——66
二の丸榎——60
二宮尊徳——30,55,82
能延寺——36,56
能満寺——67
能満寺別院——81

は　行

廃寺——9
廃仏毀釈——10
芳賀氏——53
芳賀高定——48
芳賀高継——48
芳賀高武——48
芳賀高照——48
芳賀高俊——68
化桜——60
橋くぐり地蔵——81
橋供養（養）碑——59
羽下の薬師——13
芭蕉——56
八河原——61
八幡山——8
馬場の井——61
林子平——37
林庄兵衛——26
榛名山——33
藩校——20
日枝神社——13
東川田城——70
東石町の井——61
樋口城——72
樋口主計頭——72
土方歳三——4,7
樋爪五郎季衡——51
樋爪経衡——51
百間堀——20
平出城——67
広馬場——61
普賢堂の桜——60
藤田安義（素堂）——50
藤田東湖——49,50
藤本館——65
藤原兼家——14
藤原定家——47
藤原秀郷（俵藤太）——73
二荒山神社——8,60,61,62
二荒山神社下の宮——60
仏国国師——52
不動堂——77
不動の滝——63
報恩寺——5,6,36,50,77
宝蔵寺——56,79
星野清次郎——42,49
星野徹之助——42
戊辰戦争——4,7,11,35,44,74,76,77
堀貞道——49
堀の内城——66
本多正純——31,39,74

ま　行

磨崖仏——18
間瀬和三郎——35
幕田河岸——29
幕田の戦い（幕田古戦城）——4
松ヶ峰教会——32
松ヶ峰のけやき——60
松ヶ峰門——60
松本定——38,49
松本亮之允——50
松本鉀太郎——37
御穴——5
御子貝光三——22
水戸天狗党——38,44,50
源義家——14
源義経——52
源頼朝——53,65
源頼義——14
三峰山神社——51
妙哲（詰）禅師——12,52
妙雲寺——52
明神の井——61
明神の塩釜桜——60
宮山桜——60
無縁仏供養碑——81
無住法師——17
明保舎（明保学校）——22
最上河原——61
裳原古戦場——4
裳原の戦い——6
守勝神社——31
籾摺騒動——53,54
黙雷上人——55

や　行

薬王院——12
八坂神社——63
山崎左近——41
山城——64
山本焦逸——48,49
結城政朝——48,71
横田五郎業澄——69
横田城（長州館）——72

ら　行

雷神社——57
雷電山古墳——70
良訓和尚——15
臨江寺——37
林松寺——36
蓮生（宇都宮頼綱）——47
六十六部——16
六道——36
六道の戦い（六道古戦城）——5
六道閻魔堂——76
六兵衛——54

わ　行

渡辺崋山——55

あ と が き

今回文化財シリーズ第10号として「宇都宮の旧跡」を、関係者の方々の御指導・御協力により発刊することができました。ここに厚く御礼申し上げます。

第10号とういう節目になりました「宇都宮の旧跡」は、もう一度身近なところの歴史を見直そうと、調査をはじめたものです。すべての土地には、その土地にまつわる歴史が凝縮されています。その歴史の上に私たちの歴史が築かれていくわけですが、今まで気がつかなかったことや知らなかったことが多いようです。

今回の「宇都宮の旧跡」が皆様方のお目にとまり、地元の歴史を見直す気運が高まれば、編集に携わった者としてこれにまさる喜びはございません。

宇都宮市内の旧跡に関しましては、既に多くの研究者の方々が様々な問題に取り組まれ、その成果をまとめておられます。今回の「宇都宮の旧跡」は特定の項目に関して特に深く追究したわけではありませんし、問題の提起をしたわけでもありません。一番の目的は、できるだけ多くの方々に、身近な歴史（旧跡）を知っていただくことです。ですから、文章も、やさしく書きましたし、内容もできるだけ簡単にまとめてみました。そのようなところから、記載にあたっての意を尽くせなかったところや表現において不足あるところ、また、時間的な制約から、調査不足や調査もれとなったところなど多々あると思います。これらは、今後も調査を行っていくことで解決していきたいと考えておりますので、関係各位のますますの御指導を心からお願い申し上げます。

なお、宇都宮市内の旧跡は、個人の土地や神社・寺院等に関係するものも多くあります。訪れる際には必ず土地の所有者や管理者の方の許可を得てからにしてください。

最後になりましたが、本冊子が多くの方々に活用されますことを心からお願い申し上げます。

平成元年３月

編集責任者
宇都宮市教育委員会
社会教育課長　塚　田　隆　一

参 考 文 献

宇都宮市史	宇都宮市	昭和56年
宇都宮市六十周年誌	宇都宮市	昭和35年
栃木県史	栃木県	昭和59年
宇都宮市史・宇都宮誌	田代善吉　歴史図書社	昭和35年復刻版
宇都宮郷土史	徳田浩淳　大和学芸図書	昭和54年復刻版
歴史散歩事典	井上光貞監修　山川出版社	昭和60年
民俗探訪事典	大島暁雄他監修　山川出版社	昭和58年
下徳次郎刀の研究	日本刀剣研究会	昭和63年
栃木県方言辞典	森川喜一　桜桐社	昭和58年
世界大百科事典	平凡社	昭和56年
徳田浩淳著作選集	徳田浩淳　国書刊行会	昭和58年
栃木県大百科事典	栃木県大百科事典刊行会	昭和55年
栃木県地名事典	角川書店	昭和59年
栃木県の地名	平凡社	昭和63年
とちぎの文化財	栃木県文化協会	昭和57年
栃木の街道	奥田久　栃木県文化協会	昭和53年
栃木の水路	奥田久　栃木県文化協会	昭和54年
二宮尊徳の宇都宮における足跡	福田富治	昭和63年
行餘芸談第二号	喫茶芸談会	昭和60年
川村迂叟とその時代	伊藤重男	昭和59年
歴史人物事典　栃木	尾島利雄・柏村祐司　第一法規	昭和52年
幕臣戸田一族の系譜	戸田博亘	昭和59年
うつのみや重宝記「宇都宮の仏像と仏師」	北口英雄	昭和63年
うつのみや重宝記「宇都宮の鋳物師と作品」	冨祐次	昭和63年
うつのみや重宝記「幕末の志士　縣六石」	長嶋元重	平成元年
日光道中分間延絵図５―５　解説編	千田孝明	昭和63年
栃木県の中世城館	栃木県教育委員会	昭和57年
図説中世城郭事典	新人物往来社	昭和62年
宇都宮市文化財シリーズ第１集～第９集	宇都宮市教育委員会	昭和44～62年
宇都宮の遺跡	宇都宮市教育委員会	昭和58年
聖山公園遺跡Ⅴ	宇都宮市教育委員会	昭和63年

文化財愛護シンボルマークについて

このマークは文化財愛護運動の一環として昭和41年5月に定められたもので、ひろげた両方の手のひらのパターンによって日本建築の重要な要素である斗栱のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより文化財という民族の遺産を過去・現在・未来へと永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

平成元年3月25日発行

宇都宮の旧跡

発行　宇都宮市教育委員会
編集　宇都宮市教育委員会社会教育課
表紙題字　桜井敬朔
印刷所　㈲井上総合印刷所

文化財愛護
シンボルマーク

文化財シリーズ第10号